



一般社団法人
日本排尿機能学会

50th
Anniversary
50周年記念誌

日本排尿機能学会創立 50 周年記念誌

目 次

巻頭言	高 橋 悟	1
ご祝辞		
日本泌尿器科学会		
日本排尿機能学会創立 50 周年に寄せて	江 藤 正 俊	3
International Continence Society		
ICS Congratulates the Japanese Continence Society	John Heesakkers	4
Pan-Pacific Continence Society		
Congratulations on 50 th anniversary of JCS	Chun-Hou Liao	5
Congratulations to the JCS from Down Under !	Vincent Tse	6
Happy 50 th Anniversary Japanese Continence Society	Harrina Erlianti Rahardjo	7
国内関連学会		
日本脊髄障害医学会		
日本排尿機能学会発足 50 周年に寄せて	中 村 雅 也	8
日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会		
日本排尿機能学会の皆様へ	板 橋 道 朗	9
日本老年泌尿器科学会		
日本排尿機能学会 50 周年を祝して	高 橋 悟	10
日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会		
祝 排尿機能学会設立 50 周年	武 中 篤	11
日本小児泌尿器科学会		
日本排尿機能学会 50 周年を祝して	林 祐太郎	12
日本創傷・オストミー・失禁管理学会		
祝辞	紺 家 千津子	13
International Distinguished Collaborators		
Dear Members of the Japanese Continence Society	Karl-Erik Andersson	14
Best Wishes From Europe	Christopher Chapple	15
日本排尿機能学会 50 周年記念事業 寄稿	吉 村 直 樹	16
Celebrating 50 Years of the Japanese Continence Society	Michael B Chancellor	17
歴代理事長		
第 2 代理事長 神経因性膀胱学会から排尿機能学会へ	河 遼 香 月	21
第 3 代理事長 日本排尿機能学会 50 周年を記念して	小 柳 知 彦	22
第 5 代理事長 5 代目理事長の 4 年間を振り返って	西 澤 理	23
第 6 代理事長 ICS Trustee の経験と将来計画委員会	武 田 正 之	24
第 7 代理事長 学会法人化と専門医制度	横 山 修	25
第 8 代理事長 理事長・事務局長としての 6 年	後 藤 百 万	26
第 9 代理事長 日本排尿機能学会理事長を経験して	柿 崎 秀 宏	27
第 10 代理事長 日本排尿機能学会創立 50 周年を祝して	高 橋 悟	28
歴代大会長		
第 31 回神経因性膀胱研究会	島 崎 淳	31
第 1 回日本神経因性膀胱学会 日本神経因性膀胱学会こと始め	白 岩 康 夫	32
第 3 回日本神経因性膀胱学会 開催地に京都を選んで	宮 川 征 男	33

第4回日本神経因性膀胱学会 ICS 学会中の神経因性膀胱学会	河 邊 香 月	34
第6回日本神経因性膀胱学会 上越市で初めて会を開催して	高 木 隆 治	35
第7回日本神経因性膀胱学会の追想	八 竹 直	36
第10回日本排尿機能学会	服 部 孝 道	37
第11回日本排尿機能学会 日本排尿機能学会 50 周年記念に寄せて	滝 本 至 得	38
第12回日本排尿機能学会の思い出	西 澤 理	39
第15回日本排尿機能学会	本 間 之 夫	40
第16回日本排尿機能学会開催の思い出	内 藤 誠 二	41
第17回日本排尿機能学会 下部尿路医学の創造 ―飛躍の未来に向けて― ..	武 田 正 之	42
第18回日本排尿機能学会	横 山 修	43
第19回日本排尿機能学会	後 藤 百 万	44
第20回日本排尿機能学会を開催して	山 田 静 雄	45
第21回日本排尿機能学会	公 文 裕 巳	46
第22回日本排尿機能学会を振り返って	柿 崎 秀 宏	47
第23回日本排尿機能学会を振り返って	井 川 靖 彦	48
第24回日本排尿機能学会	山 西 友 典	49
第25回日本排尿機能学会を振り返る	吉 田 正 貴	50
第26回日本排尿機能学会総会を開催して	高 橋 悟	51
第27回日本排尿機能学会 日本排尿機能学会 50 周年を記念して	巴 ひかる	52
第28回日本排尿機能学会を開催して	石 塚 修	54
第29回日本排尿機能学会 (2022 年) 大会長を仰せつかって	舩 森 直 哉	55
第30回日本排尿機能学会 in 千葉	榊原 隆次、関戸 哲利	56

国際禁制学会大会長

アジアで初の ICS meeting	河 邊 香 月	59
ICS 2016 in Japan	本 間 之 夫	60

ご寄稿

名誉会員

研究会発足当時のこと	小 川 秋 實	63
日本排尿機能学会の 50 周年に寄せて	塚 本 泰 司	64
学会と北大泌尿器科教室	野々村 克 也	65
神経因性膀胱研究会から神経因性膀胱学会、そして排尿機能学会へ	荒 井 陽 一	66

基礎研究者

基礎研究者として	齊 藤 源 顕	67
日本排尿機能学会 50 周年記念誌寄稿	橋 谷 光	68
基礎の立場から排尿機能学会 50 周年に思いを馳せて	宮 里 実	69
排尿機能学会 50 周年 基礎研究者として	窪 田 泰 江	70

産婦人科

日本排尿機能学会 50 周年を祝して	中 田 真 木	71
--------------------------	---------	----

脳神経内科

3 人寄れば文殊の知恵	藤 木 富士夫	72
-------------------	---------	----

看護師

日本排尿機能学会 50 周年に寄せて 看護師として	西 村 かおる	73
日本排尿機能学会 50 周年に看護師として思うこと	横 山 剛 志	74

理学療法士

日本排尿機能学会創立 50 周年に寄せて ―理学療法士の立場から―	井 上 倫 恵	75
---	---------	----

作業療法士

日本排尿機能学会において作業療法士が果たした役割 ―作業療法士も『排尿ケアの一翼を担う職種』へ―	今 西 里 佳	76
--	---------	----

日本排尿機能学会の主要な事業

ガイドライン

過活動膀胱診療ガイドライン第3版2022	武 田 正 之	79
過活動膀胱症状スコア（OABSS）作成	本 間 之 夫	81
「夜間頻尿診療ガイドライン 第2版」の改訂にかかわって	吉 田 正 貴	82
女性下部尿路症状診療ガイドライン初版・第2版を刊行して	高 橋 悟	83
脊髄損傷における下部尿路機能障害の診療ガイドラインの歴史と今後の展望	関 戸 哲 利	84
二分脊椎に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン〔2017年版〕の発刊を振り返って	井 川 靖 彦	85
パーキンソン病における下部尿路機能障害診療ガイドライン	榊 原 隆 次	86

ワーキンググループ

「低活動膀胱に関するコアワーキンググループ」の軌跡	吉 田 正 貴	87
---------------------------	---------	----

疫学研究

排尿に関する疫学的研究	本 間 之 夫	88
本邦における下部尿路症状に関する疫学調査	三 井 貴 彦	89

学会誌

編集委員会委員長として	齊 藤 源 顕	90
Lower Urinary Tract Symptoms 編集長として	柿 崎 秀 宏	91

教育事業

日本排尿機能学会における教育事業の歴史・現状	小 島 祥 敬	92
------------------------	---------	----

専門医制度

専門医制度委員会前委員長として	石 塚 修	93
-----------------	-------	----

用語の標準化

下部尿路機能に関する用語基準	本 間 之 夫	94
日本排尿機能学会標準用語集第1版の編集を振り返って	井 川 靖 彦	95

日本排尿機能学会のあゆみ

年表		97
歴代理事長一覧		98
歴代世話人および歴代大会長一覧		99
学術大会ポスター一覧		101
学会賞 受賞者一覧		103
河邊賞 受賞者一覧		108
日本排尿機能学会が関与した適正使用指針・声明		111
日本排尿機能学会が提出した医療技術評価提案書		111
日本排尿機能学会のロゴマークの変遷	関 戸 哲 利	112
山口 脩先生の逝去を悼んで	西 澤 理	114
編集後記	舩 森 直 哉	115

巻 頭 言



日本排尿機能学会 理事長
高橋 悟

日本排尿機能学会創立 50 周年記念誌を刊行するにあたり、ご挨拶申し上げます。

日本排尿機能学会の前身は 1973 年（昭和 48 年）に発足した神経因性膀胱研究会であり、1994 年に日本神経因性膀胱学会となりました。その後、前立腺肥大症、過活動膀胱、腹圧性尿失禁など神経因性膀胱以外の対象疾患の広がりに対応する形で、2002 年に日本排尿機能学会となりました。2014 年には法人化し、「一般社団法人日本排尿機能学会」（英語名：The Japanese Continence Society）となり、2023 年に 50 周年を迎えました。

本記念誌には多くの諸先輩方から当時の貴重なエピソードをお寄せ頂き、また国内外のさまざまな分野で関係の皆様から暖かいお祝いのメッセージを頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

もう 1 つの 50 周年記念事業として、20 年ぶりに本邦における大規模な下部尿路症状に関する疫学調査 2023 を行いました。20 歳代から 90 歳代まで約 6,000 名を対象にウェブ調査を行い、下部尿路症状の有症状率と背景因子・基礎疾患・性機能・フレイル/ロコモとの関連を調査しました。現在第一報を投稿し、さらに詳細な検討を加えて続報を作成中です。

現在本学会は、会員数 1,951 名で、医師 1,510 名、看護師・保健師 284 名、薬剤師 24 名、臨床検査技師 10 名、理学・作業療法士 57 名、その他の研究教育者、製薬企業研究開発者などの多職種で構成されています（2023 年 8 月 25 日現在）。理事長挨拶でご紹介したように、日本は本領域の基礎研究で国際的に高く評価されており、環太平洋禁制学会（Pan-Pacific Continence Society：PPCS）においても、リーダーとして国際協力を推進してきました。また下部尿路症状の診断・治療の普及・標準化を目的に、本記念誌でも紹介しているように多くの診療ガイドラインを刊行してきました。2016 年には排尿機能専門医制度を発足させるとともに、セミナーを通して積極的に多職種の医療従事者を含めた人材育成活動を行っています。また学会活動におけるダイバーシティの推進（女性委員の割合：25%）と多職種連携強化を進めています。

本記念誌にお寄せいただいた皆様の学会への想いと励ましのメッセージを心に刻んで、100 周年に向けてさらに学会活動を展開してまいります。

これからも皆様のご支援をお願い申し上げます。

ご祝辞

日本排尿機能学会創立 50 周年に寄せて



令和 5 年 8 月吉日
一般社団法人日本泌尿器科学会 理事長
江藤 正俊

日本排尿機能学会の 50 周年を迎えるにあたり、心からお祝い申し上げます。

半世紀にわたり、日本排尿機能学会は排尿に関する研究と臨床の進歩に寄与してきました。私たちの日常生活において、排尿は欠かせない重要な機能の 1 つであり、その障害は多くの人々にとって深刻な問題となります。そのため、排尿に関する知識や技術の向上は、患者さんの生活の質を向上させるために不可欠なものと考えます。

本学会は、創設以来数々の研究成果や臨床の進歩を積み重ね、排尿障害の診断や治療に多大な貢献をしてきました。また、医師や研究者、看護師などの専門家が集まり、知識の共有と交流の場を提供してきました。私自身も若い時に総合せき損センターに 1 年間赴任した際に、本学会の前身である神経因性膀胱研究会で発表させていただき、勉強させていただいたことが思い出されます。しかし、私たちが直面する課題はまだ多くあります。高齢化社会の進展に伴い、排尿障害の患者さんは増加しています。また、新たな疾患や症状が現れる中で、さらなる研究や治療法の開発が求められています。私たちは、このような課題に真摯に向き合い、継続的な努力を続ける必要があります。

日本排尿機能学会の 50 周年は、このような課題に取り組むべき重要な節目です。私たちは学会として、さらなる知識の発展と技術の革新に向けて努力を続ける必要があります。また、学会のメンバーとして、連携と協力を強化し、排尿機能の向上に向けた総合的なアプローチを追求していくことが求められています。

最後に、日本排尿機能学会の 50 周年を祝福し、関係者の皆様に感謝の意を表します。学会の発展に尽力された先生方や看護師の皆さん、そして患者さんに深く感謝いたします。これからも学会の発展と皆様の健康に寄与することを願っています。心から、日本排尿機能学会の 50 周年をお祝い申し上げます。

ICS Congratulates the Japanese Continence Society



Secretary General of the International Continence Society
John Heesakkers

Dear Prof Takahashi, Dear Esteemed Members of the Japanese Continence Society,

It is with immense pleasure and heartfelt congratulations that the International Continence Society extends our warmest regards on the occasion of your 50th Anniversary. This remarkable milestone stands as a testament to your dedication, innovation, and commitment to advancing the field of continence research and treatment.

The partnership between our organizations has been extraordinary. Your society's relentless pursuit of excellence in incontinence care has not only garnered national acclaim but has also left an indelible mark on the global landscape of medical research and practice. As an esteemed national partner of the International Continence Society, your contributions have significantly enriched our collective understanding of incontinence and propelled advancements in patient care.

One highlight of our collaboration was the extraordinary meeting hosted in Tokyo in 2016. The event served as a vibrant platform for experts, practitioners, and researchers from across the world to converge and exchange knowledge, ideas, and breakthroughs in the field. The congress was a true testament to the dedication that the Japanese Continence Society invests in promoting excellence in continence research and treatment.

The invaluable contribution provided by Japanese experts have greatly influenced the international community's approach to continence. Your society's unwavering commitment to innovation, research, and patient-centered care has had impact on the lives of many individuals and families worldwide. From groundbreaking research studies to innovative treatment approaches, the Japanese Continence Society has consistently demonstrated the highest level of dedication to improving the quality of life for those affected by incontinence.

As we stand on the threshold of the future, we happily anticipate the continuation of our collaboration. The challenges and opportunities that lie ahead in the realm of continence treatment and research demand continued unity, shared knowledge, and mutual support. Together, we can push the boundaries of medical science and redefine the standards of patient care, making a profound impact on many patients.

Once again, on behalf of the International Continence Society, I extend my heartfelt congratulations to the Japanese Continence Society on this remarkable 50th Anniversary milestone. Your contributions have left an indelible mark on the world of medical science, and we look forward to a future marked by even greater achievements, collaborative breakthroughs, and the advancement of patient care.

Congratulations on 50th anniversary of JCS



President, Taiwanese Continence Society
Associate Dean, College of Medicine, Fu Jen Catholic University
Superintendent, An Kang Branch of Cardinal Tien Hospital
Associate Medical Superintendent, Cardinal Tien Hospital
Professor, School of Medicine, Fu Jen Catholic University
Chun-Hou Liao

On the momentous occasion of the 50th anniversary of the establishment of the Japanese Continence Society (JCS), it is with great honor that I convey, on behalf of all members of the Taiwanese Continence Society (TCS), our sincerest congratulations and heartfelt wishes to the esteemed society.

Since its establishment over the past fifty years, the JCS has made significant strides in the field of medicine, achieving noteworthy accomplishments within the medical community. The society has played a crucial role in advancing urinary health by conducting research on treatment approaches for incontinence and lower urinary tract disorders, among other significant contributions. Over the past five decades, your steadfast commitment and exemplary professionalism have made a substantial impact on improving the well-being of countless patients.

For an extended period, the JCS and TCS have nurtured a profound friendship and engaged in frequent communication. Since 2006, we have jointly coordinated the annual meeting of the Pan-Pacific Continence Society (PPCS) for sixteen consecutive years. The Pan-Pacific Continence Society (PPCS) offers a unique platform for specialists in the field of functional urology within the Pan-Pacific region to convene and explore the latest advancements and challenges related to continence control. The society strives to identify feasible solutions while also emphasizing the societal advantages of the profession in an evolving global landscape.

The experts at JCS have additionally launched a journal named LUTS, with a specific focus on promptly disseminating peer-reviewed research. This journal aims to provide new clinical and fundamental scientific knowledge to physicians and researchers specializing in the fields of neurourology, urodynamics, and urogynecology. This also significantly contributes to the advancement of research on voiding disorders.

As we contemplate the future, we are filled with anticipation for forthcoming advancements in research, sophisticated treatment methods, and broadened global partnerships. Let us engage in a collaborative endeavor, united by our dedication to further explore the field of continence control, with the objective of offering increased hope and improved well-being for patients.

Heartfelt congratulations are extended on the occasion of the 50th anniversary of the Japanese Continence Society. May the future of the society shine even brighter, bringing benefits to an even larger number of people in need.

Congratulations to the JCS from Down Under!



Past President PPCS Sydney 2019
USANZ Medal Award 2023
Honorary Member, Urological Association of Asia
Vincent Tse

Dear Professor Takahashi and Colleagues of the Japanese Continence Society,

It is with great pleasure and indeed a great honor to be able to deliver this congratulatory message to the JCS on their 50th anniversary. Fifty years is a long time. Although my association with your society is only within the last 10-12 years, I can see it has made magnificent strides. My first witness of one of those successes was the ICS Meeting in Yokohama in 1997 convened by Professor Kawabe. It was my first association with Japanese functional urologists when I was only a young resident attending my first ICS meeting ! It was a wonderful congress which inspired me further to pursue a career in continence and pelvic floor care. Upon completion of my training, my interests in education and research opened up opportunities to lecture at a series of APUC meetings hosted by Astellas between 2011-2016. There I met many notable JCS members who have featured so much in basic sciences and clinical research including Prof Yamaguchi, Prof Gotoh, Prof Yamanishi, Prof Kakizaki, Prof Tomoe, Prof Homma, Dr Kumiko Kato and Dr Yasukuni Yoshimura just to name a few. Very fortunate indeed in the 2014 PPCS, Prof Yamaguchi and Prof Kuo from Taiwan asked me if we (USANZ) would like to join the PPCS ! I was so happy that upon my return home, I at once discussed this opportunity with USANZ executive and they supported it wholeheartedly the idea. We joined officially in 2015 after the Sapporo PPCS meeting hosted by Prof Kakizaki, another great meeting and I will never forget the gala barbeque in the Sapporo Beer Garden and the karaoke singing afterwards ! To this day, USANZ and myself especially would like to thank Prof Yamaguchi and the JCS for inviting us to participate in the wonderful society of PPCS, which we played host in 2019 in the Sydney meeting welcoming many JCS delegates. Australia and NZ urologists are very fortunate indeed that over the past 10 years or so we have been able to learn, exchange ideas and network with so many JCS members over many meetings including ICS, APUC and PPCS. We hope to continue our collaboration and mutual recognition into the future with JCS members, all for the benefit of improving the quality of life of our patients with incontinence and pelvic floor dysfunction.

Happy 50th Anniversary Japanese Continence Society



Department of Urology, Faculty of Medicine Universitas Indonesia-dr. Cipto
Mangunkusumo National Hospital, Jakarta, Indonesia
Harrina Erlianti Rahardjo

On behalf of the Indonesian Continence Society, we would like to extend our warmest congratulations on reaching this remarkable milestone – The 50th anniversary. This is a truly momentous occasion that deserves recognition and celebration.

Over the past five decades, your society has undoubtedly made significant contributions in advancing continence care and research.

As fellow advocates for continence care, we hope for a continuous collaboration for efforts towards improving quality of life for individuals living with continence issues globally.

We wish you continued success in all future endeavors as you strive towards excellence in continence care.

日本排尿機能学会発足 50 周年に寄せて



令和 5 年 8 月
日本脊髄障害医学会 理事長
中村 雅也

日本排尿機能学会が発足 50 周年という素晴らしい節目を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。

超高齢社会を迎えた日本において、過活動膀胱、前立腺肥大症、夜間頻尿などの排尿機能障害は極めて重要な課題であることは言うまでもありません。半世紀にわたり、これらの課題に関する基礎・臨床研究の推進を通して、頻尿、尿失禁、排尿困難などの下部尿路症状の診断・治療の発展を目的とした様々な活動を行なわれてきたことに、敬意を表するとともに感謝申し上げます。

日本脊髄障害医学会におきましても、脊髄障害による神経因性膀胱は最重要課題の 1 つであり、基礎・臨床のいずれにおきましても、創薬、医工連携、再生医療など大きなパラダイムシフトがまさに起きようとしています。今後、貴学会との連携をさらに強化しながら、これらの問題に取り組んで参りたいと思います。

記念すべき 50 周年を迎えるにあたり、貴学会の歴史を振り返りつつ、未来への展望を抱きながら、より多くの医療従事者や基礎研究者が参加できる充実した学術の場として、さらなる発展を遂げられることを確信致しております。

最後に、日本排尿機能学会の会員の皆様、ならびに本学会の活動に尽力された方々に心から感謝を申し上げますとともに、今後の学会の益々のご発展とご繁栄を心より祈念致しております。

日本排尿機能学会の皆様へ



日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会 理事長
板橋 道朗

日本排尿機能学会が創立 50 周年を迎えられたこと、日本ストーマ排泄・リハビリテーション学会一同より、心よりお祝い申し上げます。日本排尿機能学会は 50 年の中で大変誇らしい無数の成果と貢献をされてまいりました。

排泄はその人の尊厳であり、Quality of Life (QOL) に直結します。貴学会は排尿機能にいち早く着目して排尿機能に関する医療の発展とケアの向上に大きな影響を与えてまいりました。

日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会（以下、JSSCR）でも排尿は大きな課題の 1 つであると考えております。これまでも排尿機能にかかわる研究、教育、臨床の分野において、常に日本排尿機能学会の先進的な取り組みを学び、刺激を受けて切磋琢磨してまいりました。また、行政への働きかけなども共同して行っていました。

両学会がそれぞれの専門領域で培ってきた知見と経験は、お互いの成長と、さらなる医療の進化や患者さんの QOL 改善にとって不可欠です。今後、両学会の知識や経験を集積し、連携して取り組むことで、新たな展望と成果を生み出すことができると信じています。

今後は、日本排尿機能学会と JSSCR が、臨床から研究、教育まで幅広い分野でこれまで以上に協力することができることを楽しみにしています。知識の共有と交流を通じて、より良い医療の実現に貢献できることを願っております。両学会がともに歩み、患者様と社会に寄り添う価値ある活動をともに推進してまいりたいと考えています。

日本排尿機能学会のさらなる飛躍とご発展を心よりお祈りしております。

誇りある 50 年の節目を迎える日本排尿機能学会の皆様へ、心からの祝福と感謝を送らせていただきます。今後の益々のご発展を心より応援申し上げます。

日本排尿機能学会 50 周年を祝して



日本老年泌尿器科学会 理事長
高橋 悟

貴学会創立 50 周年、誠におめでとうございます。泌尿器科領域のサブ学会として、長年連携して参りました日本老年泌尿器科学会として、お慶び申し上げます。現在私はこの 2 学会の理事長を拝命しており、不思議な心持ちで本文を書いています。

貴学会と日本老年泌尿器科学会の使命は似ている部分がありますが、また別の役割も有しています。すなわち、高齢者の排尿機能障害診療をメインテーマとしている点は同じです。一方貴学会は高齢者以外の排尿機能障害も対象にしているのに対して、老年泌尿器科学会は高齢泌尿器がん患者やその他の高齢者の泌尿器疾患診療を対象にしています。老年泌尿器科学会の目的は「高齢者および障害を持つ人々の生活の質を改善すべく、広く泌尿器科学に関係する研究を行い、もって国民の健康に貢献すること」です。この目的達成のために医師だけでなく、看護・介護職に携わる多くの会員で構成されているのが本学会の特徴です。1,200 余名の会員の半数以上はこれらの職域の方々と、理事、監事、評議員をはじめ、3 つの委員会では委員長・委員として活躍しています。

今日急速に超高齢社会に移行した本邦では 2 学会の役割は益々大きくなっています。高齢者の排尿（排泄）障害の治療・管理が最重要テーマであることは今後も変わらないと思います。さらにこれからは医学会全体の課題であるフレイル・サルコペニア対策との協調、多職種による治療・管理の推進が一層必要と考えます。貴学会は長年排尿機能障害の基礎研究で優れた業績を有し、世界に先駆けた新薬開発にも多大の貢献をされています。また私たちが日本創傷・オストミー・失禁管理学会と連携して注力している排尿自立支援における理論的支柱でもあります。今こそ、一人でも多くの高齢者に「快適で尊厳ある排尿・排泄」を提供できる仕組みや手段を確立できるよう、貴学会と連携しながら努めて参りたいと思います。

最後に貴学会の益々のご発展をお祈り申し上げて、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝 排尿機能学会設立 50 周年



日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会 理事長
武中 篤

日本排尿機能学会設立 50 周年、誠におめでとうございます。貴学会は 1973 年に神経因性膀胱研究会として設立され、1994 年に日本神経因性膀胱学会、そして 2002 年に日本排尿機能学会に名称変更され、この度 50 周年を迎えられました。現在会員数は 2,000 名を超え、泌尿器科関連学会の中でも有数の学会に発展をされましたこと、心よりお喜び申し上げます。

貴学会は、設立当初はかなり専門性の高いグループによる研究会であったと聞いておりますが、特に 2000 年以降、時代の変化に対応すべく名称を変更され、泌尿器科医のみならず、複数の診療科医師、基礎研究者、看護師などが参画する学際的学術団体となりました。われわれ日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会も、1990 年に日本 Endourology・ESWL 学会として発足し、日本泌尿器内視鏡学会、そして日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会と名称を変更してまいりました。常に、時代の要請にマッチするように柔軟に形態を変化させて参った点は、両学会の共通点であるように思います。また、現在の専門医機構では、日本排尿機能学会、日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会ともにサブスペシャリティ学会ではありませんが、貴学会は専門医制度、われわれの学会は腹腔鏡技術認定制度を有し、教育という観点から、極めて重要な業務を担っております。この点も両学会の大きな共通点であります。

一方、骨盤領域の外科治療については、排尿機能を適切に評価し、これを改善、温存、再建することが求められます。この点が、泌尿器科が他の外科系診療科と大きく異なる点であります。その意味では両学会は、アプローチは異なれど、常に並走してゆく必要があり、欠くことのできないパートナーであります。

このように、日本排尿機能学会と日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会は、共に歩むべき兄弟学会であります。今後も、良好な関係を継続し、切磋琢磨して頑張ってまいりましょう。

日本排尿機能学会 50 周年を祝して



名古屋市立大学大学院医学研究科小児泌尿器科学分野
日本小児泌尿器科学会第8代理事長
林 祐太郎

日本排尿機能学会が50周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。また、そのおめでたい記念誌に日本小児泌尿器科学会にお声掛けいただいて寄稿の機会をお与えいただきましたこと、謹んで御礼申し上げます。

私ども日本小児泌尿器科学会は、1992年に泌尿器科医、小児外科医、小児科医により設立され、今年で32年を迎えました。日本泌尿器科学会をメインの基幹学会としておりますので、今日まで貴学会は私どもにとってずっと大変頼もしい兄貴分でいらっしゃいました。

日本小児泌尿器科学会は主に先天性の泌尿器科疾患の臨床と研究を扱っております。なかでも尿失禁や頻尿などで苦しんでいる小児の尿路管理は大切なテーマです。しかし、下部尿路機能障害の診断と治療は日進月歩の領域ですので、常に貴学会のご指導を仰いでまいりました。とくに2017年に発刊されました「二分脊椎に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン」では、日本小児泌尿器科学会を協力学会として作成のお仲間に入れてくださいました。脊髄髄膜瘤など二分脊椎の患児の尿路管理の指針として患児、保護者への指導やケアに活用しております。

また、貴学会の学術集会では、毎年のように小児セッションのシンポジウムを企画させていただいております。第28回日本排尿機能学会(2021年石塚 修会長;松本)ではシンポジウム“小児の尿失禁治療を網羅する:内科的管理から外科的療法まで”を、第29回日本排尿機能学会(2022年舩森直哉会長;札幌)ではシンポジウム“小児期に治療を受けた下部尿路疾患～思春期以降の問題点と対策”を、第30回日本排尿機能学会(2023年榊原隆次会長;千葉)ではシンポジウム“エキスパートに学ぶ小児排尿障害診療”を、佐賀大学泌尿器科の野口 満教授とともに企画させていただき、普段小児医療に携わっております日本小児泌尿器科学会の会員がそれぞれのテーマについて研究発表をいたしました。貴学会のスペシャリストの先生方からいただいたご質問やご指導は示唆に富むものばかりで、2021年に日本小児泌尿器科学会から発刊した教科書「小児泌尿器科学」の編集に役立てることができました。この場を借りて御礼申し上げます。

末筆ではございますが、貴学会の益々のご繁栄とご隆盛を祈念申し上げますとともに、日本小児泌尿器科学会に変わらぬご指導、ご教授を賜りますようお願い申し上げます。

祝 辞



一般社団法人日本創傷・オストミー・失禁管理学会 理事長
石川県立看護大学看護学部 教授
紺家千津子

一般社団法人日本排尿機能学会には学術活動 50 周年を迎えられ、誠におめでとうございます。日本創傷・オストミー・失禁管理学会を代表して、心からお祝い申し上げます。

貴学会は、1973 年に神経因性膀胱研究会として発足されて以来、「過活動膀胱診療ガイドライン」や「夜間頻尿診療ガイドライン」などのガイドラインを刊行されてきました。さらに、排尿機能専門医制度の発足や、医療従事者向けのハンズオントレーニングの開催、排尿自立指導に関する解説ビデオの作成など、下部尿路症状の診断や治療の普及と、これらが標準化されることによって、実臨床で起こっている問題を解決するための方策を学会の事業として実現されてきました。このような網羅的な学術活動の発展に尽くされた役員の方々ならびに会員の皆さまに敬意を表したいと思います。

日本創傷・オストミー・失禁管理学会は、米国で Enterostomal Therapist（ストーマ療法士）の資格を取得し帰国した医師と看護師たち 7 名で 1981 年に創設した日本 ET 協会から発展して誕生しました。現在は、ストーマケアだけでなく創傷ケアや排泄ケアへと活動範囲を広げております。そのため、日本排尿機能学会と日本創傷・オストミー・失禁管理学会とは、下部尿路症状の失禁ケアに関しては活動分野が重なっております。また、2016 年の排尿自立指導料の診療報酬収載に向けては多大なるご協力をいただき、実現に至りました。その後も、この診療報酬対象研修会である看護師向けの「下部尿路症状の排尿ケア講習会」の開催には継続的なご支援を賜っております。

排尿管理においては医師、看護師、理学療法士、作業療法士、介護士などの多職種の連携によるケアが求められています。今後もよりいっそうの協力をお願いして、祝辞とさせていただきます。

Dear Members of the Japanese Continence Society



Professor Emeritus, Department of Laboratory Medicine, Lund University, Lund, Sweden;
Wake Forest Institute for Regenerative Medicine, Wake Forest University, Winston-Salem, NC, USA
Karl-Erik Andersson

Dear Members of the Japanese Continence Society,

This year, 2023, The Japanese Continence Society celebrates its 50th anniversary, and I want to extend my warmest congratulations to you on this occasion. This celebration is a remarkable milestone representing five decades of dedication, advancements, and commitment to promoting continence care and improving the lives of countless individuals in Japan and beyond. Having had the privilege to be associated with the JCS and witnessing your journey over the years, I am truly impressed by the remarkable achievements you have accomplished. Thus, the Society has played a pivotal role in spearheading research, education, and advocacy in the field of continence management. My own engagement has been not only as an observer, but also as a participant in the national and international meetings arranged by the Society, and I have been able to follow how the Society has developed from its start in 1973 to its present international position as a beacon of inspiration to the medical community. Your initiatives have fostered international collaboration between specialists, researchers, and caregivers, fostering a culture of continuous learning and growth in the field of continence care. The Society has provided training and support not only to urology basic scientists but also to clinical researchers and other healthcare professionals, and it has been a privilege for me to serve as a collaborator and mentor for several of them. This has resulted not only in very fruitful scientific collaborations but also in many long-lasting personal friendships for which I am deeply grateful.

I hope that the future of the Society will be filled with even greater accomplishments and continued success.

Best Wishes From Europe



Emeritus Consultant Urological Surgeon, Sheffield Teaching Hospitals NHS Foundation Trust
Honorary Professor, University of Sheffield
Visiting Professor, Sheffield Hallam University
Christopher Chapple

I would like to congratulate the Japanese Continence Society on its 50th anniversary. I have had the honour and pleasure of working very closely with many Japanese urologists over the past 35 years, particularly in a research capacity. I would like to emphasise and acknowledge the enormous contributions in the field of functional urology, in particular relating to the pharmacological innovations in the management of lower urinary tract function that have been instigated and led by Japanese colleagues. I wish you great success on this landmark occasion and for the future of your society.



ピッツバーグ大学医学部泌尿器科
吉村 直樹

日本排尿機能学会 50 周年おめでとうございます。前身の神経因性膀胱研究会から継続して本学会は最も身近な学会として大変お世話になっています。この機会に私と排尿機能学会のかかわりを振り返ってみたいと思います。

私は 1981 年に京都大学医学部を卒業し、1985 年に入学した大学院で「排尿機能のノルアドレナリン系を介する中枢コントロール」を研究テーマとして選びました。学位取得後、排尿研究の第一人者であった Dr. William (Chet) de Groat と出会いピッツバーグ大学留学（1991 ～ 1993）および再渡米（1996）を経て、現在まで一貫して排尿研究に携わってきました。

大学院在籍中および卒業後に数回神経因性膀胱研究会に参加した後、1994 年には移行後初の日本神経因性膀胱学会総会にも参加しました。そして第 2 回日本神経因性膀胱学会総会では、パーキンソン病モデルのサルを用いた研究で基礎部門の学会賞を頂き、大きな励みとなりました。その際に副賞として頂いた折畳傘は 30 年近くたった今でも愛用しています。2002 年に現在の日本排尿機能学会と改称された後、2005 年からは毎年のように本学会の講演やシンポジウムに呼んでいただき、排尿基礎研究の話題をお届けすることで本学会に微力ながら貢献することができたのではないかと考えています。

この 30 年余りの間に排尿研究は目覚ましく発展を遂げました。臨床での疾患病態の理解、過活動膀胱 (OAB)、下部尿路症状 (LUTS) や膀胱疼痛症候群 (BPS) などの新しい疾患の定義などと相まって、基礎領域でも遺伝子組換えを含む種々の新しい動物モデルの作成や、膀胱、神経路にまたがる新しい受容体・チャネルの同定（例えば TRP チャネル）、遺伝子レベルを含む新しい研究手技の開発など発展の内容は多岐にわたります。その中でも β_3 アドレナリン受容体の基礎・臨床レベルでの研究と OAB に対するその作動薬の臨床開発は、本学会会員の先生方の主導で行われたもので特筆すべきことだと思います。

また、我々のピッツバーグでの研究室でも、①脊髄損傷後の下部尿路機能障害における知覚神経路や脊髄レベルでのイオンチャネルや各種受容体、神経栄養因子の関与、ウィルスベクターや Nanoparticle を用いた治療開発、②間質性膀胱炎を含む BPS における疼痛誘発機序の解明、③腹圧性尿失禁モデルを用いた脊髄レベルでの尿道禁制メカニズムの解明、④ BPH による下部尿路機能障害の解明を目的とした尿道部分狭窄や前立腺炎症動物モデルでの機序の探索、など多くのテーマで研究を行っています。そして、これらの研究には、本学会の会員でもある日本の先生方が多大な貢献をされてきました。

ピッツバーグ大学では、1980 年代から Dr. de Groat が多くの日本人の研究者を指導されていましたが、それを引き継ぐ形で Dr. Michael Chancellor と私で総勢 50 人余りの研究者を日本から招き、現在も数名の先生をお預かりしています。代々 Dr. de Groat の下や私たちのラボで研究された先生方も、帰国後は後継者育成に尽力されており、Dr. de Groat の排尿研究への真摯な探究心がピッツバーグの genealogy（系譜）として、本学会にも受け継がれていることは大変素晴らしいことと思っています。

現在、排尿に関する機能障害の領域は、ボトックス注入や神経変調療法といった新規治療導入などもあり大きく発展しています。しかし、患者さんの問題解決にはまだまだ不十分であり、新しい排尿障害の治療に向けたブレイクスルーのために、本学会の果たす役割は今後ますます大きくなっていくと考えられます。幸いなことに本学会には多才な人材が数多くおられます。引き続き排尿研究の分野で新しい知見を世界に発信するプラットフォームとして大いに発展することを期待しています。

Celebrating 50 Years of the Japanese Continence Society



Professor of Urology
Director of the Aikens Research Center
Oakland University William Beaumont School of Medicine
Corewell Health Beaumont University Hospital, Royal Oak, MI
Michael B Chancellor

My journey with the Japanese Continence Society (JCS) began nearly four decades ago, and I cannot help but feel a profound sense of gratitude and admiration. My first encounter with the society took place during the American Urology Association Annual Meeting in about 1986, where I was a urology resident at the University of Michigan. It was there that I met Professor Tomohiko Koyanagi from Hokkaido University, a urologist from Japan who had trained at my alma mater. His warm welcome and encouragement in my interest in voiding dysfunction left an indelible impression on me, and thus began a lifelong friendship (**Figure 1.A**).

Following my residency, I pursued a fellowship in neurourology and urodynamics at Columbia University before becoming an Assistant Professor at Thomas Jefferson University in 1990. It was during this time that I had the opportunity to collaborate with Professor Hiromi Kumon from Okayama University in utilizing ultrasound technology for urodynamics. This collaboration led to the arrival of Dr. Toyohiko Watanabe to study with me, and together, we embarked on a journey of research and friendship that continues to this day (**Figure 1.B**).

The JCS played a pivotal role in furthering these connections, as Dr. Naoki Yoshimura, Associate Professor at Kyoto University, also joined our research endeavors in Pittsburgh. Our mutual interest in neurourology and our admiration for the eminent Professor William de Groat brought us together, and we have since forged lasting partnerships in research and friendship.

My involvement with the Diokno Lapidus Essay Contest in Neurourology further solidified my connection with members of the JCS (<https://dioknolapides.wixsite.com/essay>). Serving as the Steward of this esteemed award, which was created to honor the pioneering work of Dr. Ananias Diokno and his mentor, Dr. Jack Lapidus, has allowed me to witness the exceptional contributions of JCS members to the field of neurourology.

Amidst these collaborative endeavors, I had the pleasure of visiting Dr. Tomohiko Ueda's private office, where I experienced the innovative Toto toilet, a testament to Japan's technological ingenuity (**Figure 1.C**). The memories of that visit, along with other delightful experiences in Japan, including a Samurai Kembu lesson in Kyoto (**Figure 1.D**), remain etched in my heart.

As we celebrate the JCS's golden jubilee, I extend my heartfelt congratulations to this extraordinary society, and I raise a toast to the next 50 years of excellence and progress for the Japanese Continence Society.

Figure 1. A: With Professor Tomohiko Koyanagi. B: From left, Dr. Toyohiko Watanabe, My son David, Professor Hiromi Kumon and his wife. C: Toto uroflow toilet D: Samuri training.



歷代理事長

第 2 代理事長 神経因性膀胱学会から排尿機能学会へ



東京通信病院 名誉院長
河邊 香月

私は 1996 年 10 月から、1998 年 9 月まで「神経因性膀胱学会」理事長を拝命しています。当時の理事長は厳格な規約で選出されたのではなく、前理事長の島崎先生から、指名（推薦）されたもので、その役割も決められていなかった。言い訳めくがお飾りみたいなもので特別な任務はなかったと記憶します。

ただ、この学会ができるだいぶ前から、その名称に「神経因性膀胱」の名前を付けるのはふさわしくないという議論があって土田正義教授はこの名称ではアピールしにくいこと、寄付金が集まらないことなどを、またある教授は膀胱という名はカッコ悪い、というような理由をあげておられた。私は名称変更には大賛成で何とか変更を推進したいと考えていました。名称検討会では当初「神経因性膀胱」の名を捨てるのは、時期尚早であり、決定は先送りすべきとして、「研究会」を「学会」に変えるだけとされました。神経因性膀胱の研究を続けてこられた先生方の誇りが残っていたとみるべきですが、神経因性膀胱の臨床家、研究者からではなく、排尿障害にかかわるようになった後輩の私としては、あえてこの決定に反対できませんでした。しかし、神経因性膀胱以外の排尿障害の臨床研究が、すでに興味の大半を占めていたことは疑いようもなかったので、第 1 回の神経因性膀胱学会（1994）では、会長の白岩先生に僭越にもお願いして前立腺肥大症、腹圧性尿失禁を 2 大テーマとして選んでいただいたことが思い出されます。1996 年には（宮川会長）「日本排尿機能学会」と変更することに決まり、2002 年の上田会長から、正式にこの名称となって今日に至りました。私の在任中ではなかったのは残念ですが、満足しています。ちなみに私は「神経泌尿器科学会」を提唱しました。

第3代理事長 日本排尿機能学会 50周年を記念して



北海道大学 名誉教授
医療法人仁楡会 会長
小柳 知彦

この50年を思い出せる範囲で振り返ってみます。

なかば超凝り性と表されても仕方のない感の方達が始められたのが前身の神経因性膀胱研究会であったはず。その発足間もない頃に、丁度尿道機能検査を通じて排尿機能関係の仕事を始めた自分自身でしたが自身の研究内容を講演して欲しい旨の要請がありこれがきっかけで本学会とのつながりとなりました。会が重なるにつれメンバーも増え内容也多岐に渡るようになり会員の間から学会への移行が議論されるようになりました。同時に従来の名称では一般の方々の理解を得られず発展性に乏しいのではとの懸念が強まりました。丁度その頃研究会の代表を務めておった関係で名称変更へ取り組みました。全会員へのアンケート調査等を踏まえて、学会移行を機に現在の命名「日本排尿機能学会」と正式に名称変更となったはず。会員も医師に限らず、排尿機能全般を網羅する多くの医療職の方々へも門戸を広めたはず。丁度尿失禁の問題等、従来表に出せなかった（云わば in the closet と表される）問題も米国の Diokno 博士の来日をきっかけにオープンに討論されるようになり、また前立腺肥大症（BPH）へのコンセンサスカンファランス参画等が契機となって排尿機能全般への関心理解も深まり今日に至りました。

Prostatism とされた男性固有の症状の時代はとうに去り、今は「LUTS」と表される時代です。本学会英文機関誌も「LUTS」のはずですが、本学会がカバーする領域はまさしく Functional Urology（機能的泌尿器科学）とも呼称される泌尿器科学専門分野の1つのはずです。オンコロジー、エンドロロジー、腎移植・血管外科・小児等々、細分化の著しい泌尿器科学ですが、これ等に匹敵する専門分野の1つとして今後も益々進歩発展されんことを切に望んでおります。創立50周年真におめでとうございました。

第 5 代理事長 5 代目理事長の 4 年間を振り返って

医療法人藤森医療財団藤森病院泌尿器科
西澤 理

2006 年から 2010 年までの理事長任期中の事業は山口 脩 4 代目理事長が任期中であった 2003 年から 2005 年までを事務局長として二人三脚で取り組んできたことを継続して行った。特に思い出されるのは TAABO 試験と銘打った前立腺肥大症の蓄尿症状に対する α_1 受容体遮断薬と抗コリン薬併用療法に関する臨床試験である。無作為化群間比較試験による学会主導研究であり 2004 年 10 月に症例の組み入れを開始し任期中の 2009 年 3 月に終了することができた。

就任 1 年目の 2006 年 9 月には日本排尿機能学会 (JCS)、韓国禁制学会 (KCS)、台湾禁制学会 (TCS) の 3 学会をメンバーとして創設された環太平洋禁制学会 (Pan-Pacific Continence Society) の第 1 回学術大会 (図 1) が東京で開催され、以降 2009 年までソウル、台北、福岡で開催された。2006 年 12 月には排尿トラブルについて正しい理解を目指すための啓発活動の一環として過活動膀胱と前立腺肥大症に焦点をあてた朝日市民フォーラムに理事長として挨拶をする機会を得た。

2007 年 1 月には夜間頻尿に対する診療の質的向上を目指して、夜間頻尿診療ガイドライン委員会を立ち上げて作成に着手し 2009 年 4 月に刊行した。背景としては JCS が 2003 年に報告した 40 歳以上の排尿症状に関する疫学調査により、夜間頻尿 (1 回以上 / 3 回以上) の 頻度が 69.2%/13.5% であり、もっとも問題となる症状とされたことであった。夜間頻尿が多尿、夜間多尿、睡眠障害、膀胱蓄尿障害 (前立腺肥大症、過活動膀胱、間質性膀胱炎) など多様な要因により起こる病態であり、おのおのの要因に対する系統的な診療の進め方を示すことができた。2009 年には Lower Urinary Tract Symptom (LUTS) が山口 脩 編集主幹のリーダーシップのもとに JCS, KCS, TCS 3 学会の英文機関誌として創刊され、TAABO 試験の成績も 2011 年の 3 巻 1 号に掲載することができた。4 年間の任期中にガイドラインと機関誌の発行および国外学会との交流の面で着実に前進できたのは武田正之事務局長の尽力に依るところが大きかったと感じている。

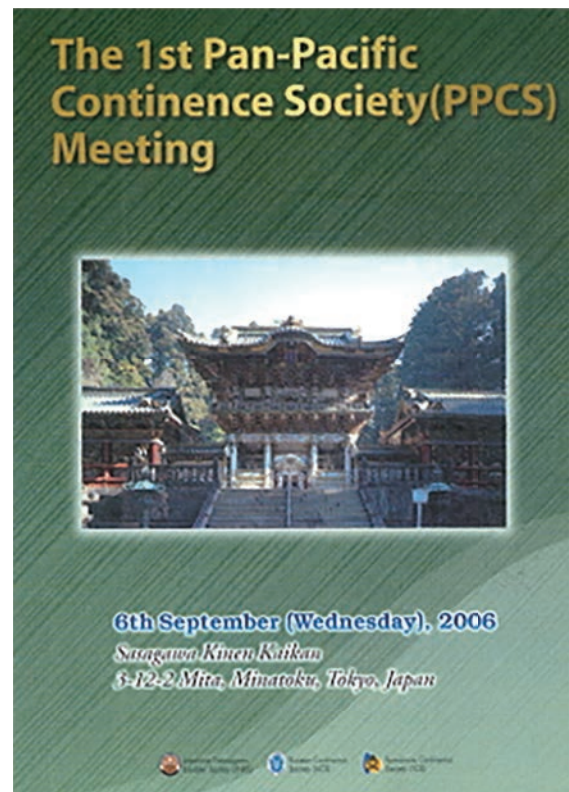


図 1

第6代理事長 ICS Trustee の経験と将来計画委員会



日本排尿機能学会 第6代理事長
山梨大学医学部 名誉教授(泌尿器科学講座)
武田 正之

理事長に就任した後、日本に2回目の国際禁制学会（ICS）学術総会を招致するなどの国際化を見据えてICSのTrustee（理事）に立候補し、アジアの泌尿器科医としては初めて2011年10月1日～2014年9月30日の3年間Trustee of ICSを務めました。この3年間では、ICS学術総会におけるTrustee Meetingおよび学会開催時とは別に複数回のTrustee Meeting、さらにはかなりの回数のTele-Conferenceに参加し、歴史ある国際学会の運営管理方法や事務局のあり方などを勉強しました。韓国、台湾、中国などアジア各国と連携して招致活動を行った結果、2016年のICS日本開催（本間之夫 東京大学泌尿器科名誉教授）が決定しました。私の次のアジアからのTrusteeとして、韓国のSamsung Medical Center 泌尿器科のKyu-Sung Lee教授が選ばれました。

日本排尿機能学会、日本泌尿器科学会も含めて日本の学会は法人化されても事業収益に対する税務負担義務があり、営利活動のための別会社の運営はできません。ところがICSは、英国法人法のもとでのNPO法人でありながら、営利を目的とした別会社であるICS Conticomを持ち非課税の資産管理と投資活動を行うことが許可されているため、資金はかなり潤沢でした。また、学術集会での利益がICSの運営を左右するため、PCO（Professional Conference Organizer 学術集会運営専門会社）として当時はIsraelに本社を置くKenes Internationalと長期間の独占契約を結び、かなりの収益を上げていました。この時期のICS理事長（General Secretary）はCanada Tront大学泌尿器科のSender Hershorn教授であり、実践的な方でした。かなり放漫経営であった財務管理を強化するとともに、学会運営に対して問題のあった学術兼教育委員長（Joint Scientific Chair/Education Committee Chair）をTrustee Meetingの最中に追放排除するなど、外見とは違った強烈な一面をお持ちの方でした。私の目の前で追放された研究兼教育委員長は、何とあの有名なPittsburgh大学のWerner Schaefer教授でした。

ICS Trusteeでの経験を参考にしながら日本排尿機能学会の将来の方向性を決めるための将来計画委員会などを立ち上げ、理事会の2回/年開催、学会の英語表記名（Japanese Continence Society：JCS）、2014年10月の学会法人化などの決定、各種ガイドライン作成・改定および専門医制度設置などの方針を立てて、次の横山修理事長、後藤百万理事長へと引き継ぎました。

私が理事長終了時には13種類の各種委員があり、現在もほぼ同様の構成です。



図1 2014年1月ChicagoのICS Trustee Meetingの集合写真
左から5人目がSender Hershorn理事長。
右から3人目が武田正之。

第 7 代理事長 学会法人化と専門医制度



日本排尿機能学会 第 7 代理事長
現福井大学 名誉教授、金沢大学 客員教授
横山 修

排尿機能学会の副理事長を 2006 年 4 月から 2010 年 3 月の 4 年、事務局長を 2010 年 4 月から 2014 年 8 月までの 4 年 4 ヶ月、そして理事長を 2014 年 9 月から 2018 年 8 月までの 4 年、計 12 年間務めさせていただいた。今思えば、ずいぶん長い間学会の仕事に従事させていただいた。大変感慨深い。

日本排尿機能学会は、2013 年 12 月に厚生労働省に「医療上必要性の高い未承認薬・適応外薬」として A 型ボツリヌス毒素の開発を要望した。海外ではすでに BOTOX 治療は難治性過活動膀胱の標準的治療として承認されており、海外との Drug lag を解消することは本学会長年の悲願であった。この時事務局長であった私は年末の忙しい時期に段ボール箱一杯分の資料を厚生労働省に送付したのを覚えている。これに至るまでに脊髄損傷、二分脊椎の患者会からの要望書を提出していただいたり、本邦における BOTOX の使用成績を調査したり、学会としてさまざまな活動をしてきた。その甲斐あって 2015 年 5 月 21 日に正式に企業に開発が要請され、受諾したグラクソ・スミスクライン株式会社は開発治験を開始した。その後 2019 年 12 月に薬事承認された。

学会の法人化については、学会規模の増大に伴い、受託事業・補助金事業を受ける場合において契約上法人化が必要とされることもあり、社会的信頼性などの観点からもニーズが高まった。2013 年 9 月の第 20 回日本排尿機能学会理事会で、本学会を一般社団法人化することが承認、2014 年 2 月の春季理事会において定款・細則が承認され、任意団体精算人および任意団体解散日が決定、5 月に代議員選挙、7 月に理事選挙を実施、9 月の第 21 回日本排尿機能学会時の理事会・総会において財産寄付、解散決議が採択され、新規理事が承認された。その年 10 月 1 日に登記を行い、本学会の一般社団法人設立が完了した。

そして 2014 年 10 月には一般社団法人日本排尿機能学会（The Japanese Continence Society : JCS）として再スタートした。

認定医制度創設に向けた準備は 2015 年から始まった。2015 年の代議員総会で、規則・細則の承認を得て以後、周知を行い 2016 年の 8 月から申請受付、試験なしの移行措置を 1 年設けて、2017 年から試験を含めた正式な措置を行った。1 回目の認定医は、2016 年 8 月からの認定とした。その後認定医は専門医へと名称を変更した。

第8代理事長 理事長・事務局長としての6年



当時：名古屋大学大学院医学系研究科泌尿器科学 教授
現在：独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院 院長
後藤 百万

私は神経因性膀胱研究会（NBS）に1986年に入会し、JCSでは2010年度から4年間の副理事長、2014年度から4年間の事務局長、2018年度から2年間の理事長を仰せつかり、10年間本学会運営にかかわり下部尿路機能領域の発展をサポートできたことは誠に光栄でした。2017年度までは事務局は事務局長の教室に交代で置かれ、選挙では事務局長が次期理事長に選ばれてきました。理事長と事務局長は密に連携し学会の舵取りを行います。実務は事務局長と事務局が行い、事務局長が重要な役割を担っていました。私の前は、横山修教授、武田正之教授、西澤理教授が4年ずつ事務局長を担当され、学会に大きな功績を残されました。忘れてはいけなのは各代事務局の優秀な秘書さんの存在です。しかし、4年ごとの事務局交代は限界となり、他学会でも事務局固定化が進んでいたなか私が理事長に選任される前の事務局長最後の仕事として、持ち回りの事務局を外委託し固定化しました。

事務局長就任時には学会資産額の少なさに危機感を覚えましたが、多くのガイドライン作成事業による印税、転載許諾費、会員数増加による収益増により理事長退任時には資産が3倍に増えました。2019年からJCS教育事業として尿流動態検査および骨盤底筋トレーニングのハンズオンセミナー、教育ビデオ作製を開始し現在に続いています。2016年創設のJCS認定医制度は本学会の専門性を普遍化する重要な事業ですが、日本専門医機構の2階建専門医制度への申請時、2019年に排尿機能「認定医」から「専門医」へ名称変更しました。JCSが基幹学会を務めるPan-Pacific Continence Societyは日本、台湾、韓国、中国に加え、2017年からオーストラリア・ニュージーランド、2020年からインドネシアが加わることになりました。当時、多大なご支援、ご協力を頂いた理事・監事、代議員・会員そして事務局スタッフに感謝いたします。

第 9 代理事長 日本排尿機能学会理事長を経験して

旭川医科大学腎泌尿器外科
柿崎 秀宏

2020 年 10 月から 2022 年 9 月までの 1 期 2 年間、日本排尿機能学会の理事長を務めさせていただきました。副理事長は関戸哲利教授、事務局長は高橋 悟教授でした。理事長に就任する前の役員経験として、2014 年から 4 年間は横山 修理事長のもとで副理事長を務め、2018 年から 2 年間は後藤百万理事長のもとで事務局長を務めました。2014 年に本学会は一般社団法人となりましたが、この法人化に向けては、当時の武田正之理事長、後藤百万副理事長、横山 修事務局長とともに、さまざまな作業に従事し、大変良い経験となりました。また、2016 年から認定医制度（その後、専門医制度に名称変更）が開始されましたが、認定医制度委員会委員長としてこの制度の立ち上げに貢献することができました。

理事長在任中に留意した点は、定款や役員候補者選挙細則の変更を通じての法人としての体制の整備、会員数の増加、排尿機能専門医の育成、学会の財政基盤の盤石化、教育活動の充実、PPCS を中心とする諸外国との国際交流などでした。企業から教育助成金を継続して獲得し、骨盤底筋訓練のハンズオンセミナー、ウロダイナミクスのハンズオンセミナーを開催するとともに、教育目的のビデオも作成して本学会のホームページに掲載しました。排尿機能専門医の育成においては、専門医制度の申請と更新の要件の見直し、JCS 専門医セミナーの充実、専門医試験問題作成委員の裾野を広げて試験問題の適正化をはかる努力などをしてきました。事務局長と理事長を務めた 2018 年からの 4 年間は、本当に忙しかったことを思い出します。2022 年 9 月の札幌での第 29 回日本排尿機能学会を終えて、私の理事長の任務も終了しました。私の後任として高橋 悟教授が新理事長に就任し、舩森直哉教授が新事務局長に就任しました。第 29 回の大会長でもあった舩森教授に学会場のホテルの最上階にある鉄板焼きレストランで旧役員の慰労会を開いていただきました。高橋教授とともにご馳走になり、大変楽しいひと時を過ごしました。

第 10 代理事長 日本排尿機能学会創立 50 周年を祝して



日本排尿機能学会 第 10 代理事長
高橋 悟

本学会の前身は 1973 年（昭和 48 年）に発足した神経因性膀胱研究会であり、1994 年に日本神経因性膀胱学会となりました。その後、前立腺肥大症、過活動膀胱、腹圧性尿失禁など神経因性膀胱以外の対象疾患の広がりに対応する形で、2002 年に日本排尿機能学会となりました。2014 年には法人化し、「一般社団法人日本排尿機能学会」（英語名：The Japanese Continence Society）となり、2023 年で 50 周年を迎えました。

会員数（2023 年 8 月 25 日現在）は 1,951 名で、医師 1,510 名、看護師・保健師 284 名、薬剤師 24 名、臨床検査技師 10 名、理学・作業療法士 57 名、その他の研究教育者、製薬企業研究開発者などの多職種で構成されています。日本は本領域の基礎研究で国際的に高く評価されており、それに呼応して日本企業の新薬開発は世界をリードしています。また、東アジア各国と連携して環太平洋禁制学会（Pan-Pacific Continence Society: PPCS）を発足させ、情報共有と国際協力を推進してきました。現在の PPCS 加盟国は、日本、台湾、韓国、中国、オーストラリア・ニュージーランド、インドネシアで、本学会の先輩方を中心に創設された英文学術誌「LUTS」（Lower Urinary Tract Symptoms の意）が PPCS Official journal です。

これまで本学会は下部尿路症状の診断・治療の普及・標準化を目的に、「過活動膀胱診療ガイドライン」、「夜間頻尿診療ガイドライン」、「男性下部尿路症状診療ガイドライン」、「女性下部尿路症状診療ガイドライン」などを刊行してきました。加えて、「二分脊椎に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン」、「脊髄損傷における下部尿路機能障害の診療ガイドライン」を刊行し、神経障害に伴う下部尿路機能障害の診断・治療の普及・標準化を推進してきました。2016 年には排尿機能専門医制度を発足させ、これらの実現に必要な人材を育成しています。また医療従事者向けに実臨床で役立つ骨盤底筋訓練ハンズオントレーニング、ウロダイナミクス（尿流動態検査）ハンズオントレーニングを開催し、排尿自立指導に関する解説ビデオを本学会ホームページに掲載しています。

超高齢社会の日本では、過活動膀胱、前立腺肥大症、夜間頻尿などの患者が急速に増加しています。特に最近「フレイル高齢者」への医学会横断的な対応が求められています。私が理事長に就任して以来、本学会は「フレイル高齢者」における排尿機能障害対策を提言・推進しており、日本医学会連合の共同宣言とマスメディアを通じて積極的に発信しています。また今後は前立腺がんや膀胱がんなどの泌尿器がん（治療）に伴う排尿機能障害の治療や進歩著しい前立腺肥大症低侵襲治療も積極的に推進したいと思います。現在本学会は 15 委員会と 3 小委員会を有し、学会活動におけるダイバーシティの推進（女性委員の割合 :25%）と多職種連携強化を進めています。

2023 年には 50 周年を記念して、20 年ぶりに本邦における大規模な下部尿路症状に関する疫学調査を行いました。20 歳代から 90 歳代まで約 6,000 名を対象にウェブ調査を行い、下部尿路症状の有症状率と背景因子・基礎疾患・性機能などとの関連を現在解析中です。今年 9 月の学術集会で中間報告、早期の論文文化を進めています。

今後は先輩方が 50 年間に築かれた実績を礎として、さらに社会に開いた学会活動を展開したいと考えています。排尿自立支援、在宅復帰・介護負担軽減支援、保険診療の環境整備などを通して、国民の健康増進に貢献してまいります。これからも皆様のご支援をお願い申し上げます。

歴代大会長

第 31 回神経因性膀胱研究会

千葉大学 名誉教授
島崎 淳

以前より皮膚泌尿器科として研究や診療を実施していたが 1960 年 7 月に分離独立して百瀬剛一が初代教授で泌尿器科が出発した。当時から女性の尿失禁は重要な研究および診療の主題であった。1975 年に島崎淳が二代目教授として従来の研究や診療を発展させた。当時より安田耕作講師が多くの教室員とともに排尿機能の研究や診療にあたった。

麻酔メス犬の尿道内圧を検討した結果、中部がもっとも高压であった。この部が排尿の禁制に重要なことが推測された。臨的にこの部の尿流の抵抗を高めるため、尿道の下から腹部まで糸で釣り上げる、または骨盤下部に保持剤を挿入して尿流を制御することが行われ、良好な結果が得られた。実施には尿流の状態の変化に注意が必要とされた。

男子の排尿に影響を与えるものとして、第一に考えられるものの 1 つは前立腺疾患である。前立腺肥大症に対して薬物療法では antiandrogen があり、肥大症の結節の縮小をまねき尿流増加、さらに残尿減少、自覚症状の軽減の発表が多い。Steroid 核をもつ化合物が多く、臨床的效果が報告された。植物製剤の効果も発表されたが、それによる効果はややおとる。ただし steroid 系薬剤より副作用が少ない。

外科的治療は Harris 法、Millin 法、その改良などが一般的であり、ついで内視鏡的切除が基本になった。これらの効果判定には、尿流が判定の基準となる。Uroflowmetry は排尿時の膀胱内圧と尿流速度を示すもので、この時期機械の改善が行われ、多くの発表があった。

膀胱癌や前立腺癌はその治療に際して、一義的には癌の治療が優先されるが、尿路が保存されたとき排尿機能の検索が必要となる。本学会でもそれに関する発表があり、患者の QOL は問題点であった。

膀胱機能について膀胱の機能にたいする薬理学的研究発表は数が多いが研究途上でありその結果は明日を待ちたい。さらに中枢の排尿機能におよぼす研究が加わってきた。これにより排尿機能の研究に局所的観点から、全身的観察が加わってきた。

第1回日本神経因性膀胱学会 日本神経因性膀胱学会こと始め



福島県立医科大学 名誉教授
白岩 康夫

私が福島県立医科大学に泌尿器科教授として赴任したのは昭和48年4月である。福島に来て何をしようかと迷った末、昔東北大学で始めた神経因性膀胱についての研究を復活させようとの思いに至り活動し始めた。

昭和48年に神経因性膀胱研究会が発足し、以来年2回の開催を続けてきたが会員数が600名を超えるほど大きくなり、演題数も多く会報を発行するまでに成長した。そこで名称を日本神経因性膀胱学会と変更し、第1回の学会を福島県立医科大学泌尿器科が担当することになったものである。期日を平成6年10月14日(金)・15日(土)と定め、会場は福島県文化センターとした。

一般演題数は57題、特別講演を秋田大学医学部生理学第二講座川谷正仁教授にお願いした。演題は「骨盤神経遠心路喪失後の機能回復機構の解明」であった。猫の一侧の仙随前根線維を切断したところ、排尿は一時困難となった。しかし1～2週間後にはほぼ回復した。この現象を電気生理学的に解明しようとする発表であった。

50年前に日本神経因性膀胱研究会として発足したこの学会が、今日の盛況を見せている様を見るに付け欣快の念を禁じ得ない。

第 3 回日本神経因性膀胱学会 開催地に京都を選んで



第 3 回神経因性膀胱学会 会長
宮川 征男

53 歳の若い私が会長に指名され、第 1 に考えたのが演題数を増やすこと。その結論が「初秋の京都」での開催でした。一応成果があったようです。演題数が例年より 30 題位増え、ほぼ 100 題に近づきました。当時学会賞は全発表の中から選んでいましたので、選考委員長から「選考が大変だ」と、うれしい悲鳴がありました。

学会内容です。特別講演は 2 題としました。前年の学会で外括約筋への討論が多かったと感じましたので、東京医科歯科大学 解剖学 佐藤達夫教授に「骨盤底部の局所解剖」をお願いしました。もう 1 題は、推薦してくださった先生から要望のあった 英国の Paul Abrams 先生です。ICS を引っ張っておられた先生です。面識もない大先生に厚かましく電話でお願いしました。ICS が翌年日本で開かれるということで、先生も日本の下調べをしたいという気持ちがあったと思います。引き受けていただきました。演題は The investigation of older men with lower urinary tract symptoms (LUTS)。

他はすべて一般演題として応募していただきました。テーマの多かった神経因性膀胱、Pressure Flow Study (PFS) から 20 題を選び、「脳血管障害の排尿障害」「神経因性膀胱治療」「PFS: 前立腺肥大症 診断上の必要性」「PFS の意義」に分類し、特別討議として 4 時間討論していただきました。まあこれがシンポジウムだったと思います。

一般演題では、武田正之先生が「ヒト膀胱排尿筋の β_3 受容体」という発表で「膀胱の β_3 受容体を介した弛緩反応が存在することが示唆された」と報告されていましたし、その他各種疾患の排尿障害の病態、NO やテストステロンの排尿への影響、間欠バルーンカテーテル留置、尿失禁への仙骨部電気刺激など現在に続いているテーマの検討が多数でした。本学会も排尿医療の進歩を促進する場であったと感じ嬉しく思っています。



第4回日本神経因性膀胱学会 ICS 学会中の神経因性膀胱学会



東京通信病院 名誉院長
河邊 香月

私は第四回の学会長を申しついていたが、すでに ICS を主催することが決まっていたので、島崎理事長の suggestion もあって、会場も同一とし、会期中のスキマを縫って大会を開催しようとした。というのは ICS 開催予定の Yokohama Pacifico Conference Center は ICS に付属する Standardization の meeting や私設の workshop などのため、4 日間会場を確保して余裕があり、余った会議場を本学会に充てるため、あえて期日を 1 日とし、複数会場に分けて発表していただいた。これによって費用を含めた主催者側の負担軽減を図ったつもりである。一方、日本の参加者に ICS という国際学会に多く参加していただく目的もあった。両学会に参加していただくのは負担が大きかったかもしれない。しかし私が期待したとおり、ICS にも多くの演題が採用され、神経因性膀胱学会も盛会であったと思う。

内容については、特記すべきものではなく、第一回から引き続いて前立腺肥大と腹圧性尿失禁が柱となった。Kari Bo 氏に特別講演をお願いしたところ、あまりうれしそうではなかった。氏の提唱する骨盤底筋体操は神経因性膀胱とは関係ない、ICS 期間中では講演時間がとれないなどという理由であった。日本の神経因性膀胱学会 (NBS) Neurogenic Bladder Society Meeting と訳したのがいけなかったと思い NBS は ICS の日本版であり、ICS と同じ建物でおこなわれると説明して承諾を得た。ほかには武田正之先生に BPH の概説をお願いした。会場が分かれ、演題を聞きにくい点は、会期を圧縮したためで、参加された先生方には事情を理解はしていただけたと思い感謝している。会議の懇親会は時間がなく、省略してしまったが、評議員会でも、ICS と連結して開催したことについてお詫びし、おかげさまで、ICS も成功したと思っている。

第 6 回日本神経因性膀胱学会 上越市で初めて会を開催して



第 6 回日本神経因性膀胱学会 会長
高木 隆治

私は第 3 回の神経因性膀胱研究会の頃より、研究会に参加していたと記憶しております。当時は宮崎一興先生（神奈川リハビリ）、今林健一先生（東北大）、小柳智彦先生（北大）、八竹 直先生（旭川医大）、安田耕作先生（千葉大）、福井準之助先生（信州大、聖路加）、などがご活躍でした。

研究会発足当初は、高位中枢、脊髄、末梢神経の障害による神経因性膀胱が主なテーマでしたが、その後、排尿機能、前立腺肥大症、腹圧性尿失禁、などテーマが徐々に広がっていきました。

第 6 回の学会は、排尿障害の基礎と臨床、神経因性膀胱、腹圧性尿失禁、前立腺肥大症に伴う排尿障害などが、主なテーマでした。

海外より Levin 先生、Malone 先生、および Chancellor 先生よりの講演をいただきました。特に Chancellor 先生の講演は現在にも通じる OAB の治療が話されていました。地方病院の部長でしかない私が、学会の会長になるのは、異例でありましたが、河邊香月先生（東大）、黒田一秀先生（旭川医大）、高橋公太先生（新大）にサポートしていただき、無事開催することが出来ました。

第7回日本神経因性膀胱学会の追想



旭川医科大学 名誉教授
八竹 直

日本排尿機能学会が50周年を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。

この学会の前身である日本神経因性膀胱学会の第7回学術集会を2000年9月7日から3日間旭川グランドホテルで開催させていただいた。当時の学会はまだ会員数約800名程度のコンパクトな組織であった。

9月7日は各種委員会と平行して同ホテル内で旭川医科大学泌尿器科橋本博講師と旭川厚生病院泌尿器科森達也部長による「わかりやすい前立腺肥大症の話」と題した市民公開講座を開催し300人超の参加があった。

9月8日から100題を超える口演発表があった。興味ある演題の聞き逃しを防ぐためすべての演題のポスター掲示も同時に会場前のロビーで行った。

またスライドを含め発表に工夫が認められた演者に good presentation 賞で表彰した。

教育講演として旭川医科大学解剖学第1講座木山博資教授に「神経再生における現状と展望」の講演をお願いした。末梢神経にとどまらず中枢神経系に関しても再生の可能性があるとの夢の多い話題であった。

特別講演は信州大学泌尿器科井川靖彦助教授により「神経因性膀胱患者の尿失禁に対する尿路機能再建術」と題して、外科手術による尿失禁の治療手技に関する最新の話をしていただいた。

シンポジウムは「糖尿病と排尿障害」をテーマに取り上げた。

この学術集会の排尿に関する神経生理学的、薬理学的、分子生物学的研究の進歩には目を見張るものがあったが、その後の日本排尿機能学会においては学術面の進歩だけでなく、多職種の研究者の参加・活躍には隔世の感がある。

しかし世の中は急速な超高齢化社会が進行し、それに伴う病態の変化も経験する。これらの解決のためこの学会の研究成果が益々期待され、学会の発展が望まれる。

第 10 回日本排尿機能学会



千葉大学 名誉教授・医療法人同和会 理事長
服部 孝道

私は千葉大学の同級生である安田耕作君の誘いで排尿障害の研究に入り、1980 年（昭和 55 年）から神経因性膀胱研究会に入会しました。当時、神経因性膀胱研究会は毎年 2 回会合があり、参加者はあまり多くなかったですが、会場は 1 ヶ所で、活発な意見交換がされており、いつも参加するのが楽しみでした。

その後、神経因性膀胱研究会は徐々に会員数が増え、日本排尿機能学会と名称を変え、私は第 10 回の日本排尿機能学会の会長を、2003 年 9 月に千葉市で務めさせていただきました。大会のテーマは特に持ちませんでしたが、前立腺肥大症で今日言う過活動膀胱が起こるかどうか疑問に思っていたので、シンポジウム 1 として取り上げ、獨協医科大学の安田耕作先生と鳥取大学の宮川征男先生に座長をつとめていただきました。さらにシンポジウム 2 として「尿排出障害の非観血的治療法」を取り上げ、山梨大学の武田正之先生と熊本大学の吉田正貴先生に座長をつとめていただきました。また特別講演にはロンドン大学の神経研究所の Clare J Fowler 教授をお呼びし、「Neural Control of the Bladder in Health and Disease」というテーマでご講演してもらいました。なおロンドン大学神経研究所は私が若い頃臨床神経学を学んだところですし、昨年（2023 年）第 30 回の日本排尿機能学会の会長を務める榊原隆次先生の留学先でもあります。さらにイブニングセミナーで、米国ペンシルバニア大学の Alan Wein 教授に「New Aspects of Etiology and Pharmacologic Treatment of LUTS」という講演をしていただきました。

第 10 回の日本排尿機能学会が行われた当時、種々の排尿障害治療薬が登場してきた時期でもあり、当学会の会員も増加しつつあり、一般演題として 129 題の発表があり、学会参加者も数百人を超え、おかげさまで盛会裏に終えることができました。



第11回日本排尿機能学会 日本排尿機能学会50周年記念に寄せて



第11回日本排尿機能学会大会長
滝本 至得

私が担当させていただいた第11回について、述べさせていただきます。

第11回大会は、2004年10月13日から15日までの3日間、東京大手町のサンケイプラザで開催させていただきました。学会のトピックスとして、韓国のKCSとのジョイントミーティングを企画いたしました。そして、学会のテーマの1つとして、「過活動膀胱の克服に向けて」と題し、「排尿障害における電気・磁気刺激」をシンポジウムにとり上げました。これには、英国からMichael Craggs教授をお迎えしました。招請講演としては、韓国のMyung Soo Choo助教授にTVT手術についてお願いいたしました。もう1つのテーマとして、「下部尿路機能再生」をとり上げ、神経再生について、日本大学医学部解剖学の越永守道助教授に特別講演をお願いしました。さらに、「膀胱機能再生へのアプローチ」というシンポジウムを企画いたしました。また、産学協調の見地から「排尿に関する創薬への挑戦」としてパネルディスカッションを組みました。6題のセミナーをランチョンでお願いし、さらに、モーニングセミナーとして、安田耕作先生に講演をお願いいたしました。一般演題としては、151題という、多数の応募をいただきました。大変盛りだくさんではございましたが、会員の皆さまのご期待に沿えられたものと、確信いたしております。



第 12 回日本排尿機能学会の思い出



医療法人藤森医療財団藤森病院泌尿器科
西澤 理

排尿機能学会（JCS）の主催はウロダイナミクスを研究テーマとしてきた信州大学医学部泌尿器科学教室・同門会として聖路加国際病院福井準之助先生による充実した 2001 年の第 8 回日本神経因性膀胱学会の 4 年後であり、さらなる発展をめざして教室・同門会をあげて準備を進めた。キーワードを国際的連携と創造的活動とし（図 1）、学会場は建築家伊東豊雄さんの設計による 2004 年に新たに開館した松本市民芸術館とし第一会場はオペラも上演できる 2 階の主ホールとした。昼食時のランチョンセミナーを行わずにエントランスから全長 45m の大階段をのぼりホワイエが回り込む先にある 2 階ロビーに食事を用意しオペラやコンサート開催時の幕間の休憩や社交の雰囲気を感じていただけるようにした。

演題採否の決定はプログラム委員会により行い、特別企画はシンポジウム 3 題、基調講演 1 題、特別講演 3 題、教育講演 7 題としたが可能な限り演者を海外から招待した。基調講演（図 2）は教室の 2 代目教授小川秋實先生が“Spina bifida: Thirty years' experience of urologic care and management”のタイトルで発表し低侵襲治療の意義を指摘していただいた。教育講演に海外から招待した演者の 7 名は教育講演 1 Anders Mattiasson（ルンド大学）、教育講演 2 Jae-Seung Paick（ソウル国立大学）、教育講演 3 Naoki Yoshimura（ピッツバーグ大学）、教育講演 4 Jean-Jacques Wyndaele（アントワープ大学）、教育講演 5 Francisco Cruz（ポルト大学）、教育講演 6 Ruud Bosch（ユトレヒト大学）、教育講演 7 William D Steers（バージニア大学）であった。基調講演、特別講演、教育講演は DVD にも収録し大好評であった。教室・同門会員による JCS の主催は 2005 年第 12 回以降も 2016 年第 23 回（井川靖彦教授）と 2021 年第 28 回（石塚 修 教授）とに行われていて今後も続くことを期待している。



図 1



図 2

第 15 回日本排尿機能学会



日本赤十字社医療センター 名誉院長
本間 之夫

期日は2008年9月11日（木）から13日（土）で、会場は大手町サンケイプラザでした。本学会は、筆者が日本赤十字社医療センター泌尿器科部長の時に会長指名を受けていました（2008年4月に東京大学に移籍）。その臨床にどっぷり漬かった思いを学会運営に反映させたく、主題を「Back to the future: What is new in continence medicine?（コンチネンス医学への回帰と発展）」としました。

ここでの回帰とは、「本学会が目指すのは一人一人の患者のContinenceだ」という原点に戻ることです。また発展とは、対象領域が神経因性膀胱からOAB・LUTS・排泄ケアへと、医学的手法が生理学から分子生物学や遺伝子学へと、関与する職種が医師だけから多職種へと、すべてが広がっていくことです。この分野を、泌尿器科を越えた学際的な学問（排泄学：Continenence Medicine）にしたいという思いも込めました。

主題の趣旨に則り、Realityのある一般演題を重視しました。そのため、招請講演は英国 Musgrove Park Hospital の Mark J Speakman と吉村直樹先生のお二人とし、シンポジウムもセミナー2題（尿意を科学する、夜間頻尿と睡眠障害）と控えめにしました。一方、一般演題数は224題（基礎70、臨床154）と過去最高の応募をいただきました。討論を活発にするために一般演題の発表会場にコメンテータを指名し、発表様式もポスター掲示と口演の両方として口演を聞き逃しても内容を確認できるようにしました。

最後に参加者に学会最終日まで残ってもらう工夫としてハイライト講演を設け、学会賞受賞演題の再発表と一般演題の総括を行ってもらいました。総括の担当者には大変な負担をおかけしましたが、聴衆には好評でした。今では本学会の慣習となっているようです。



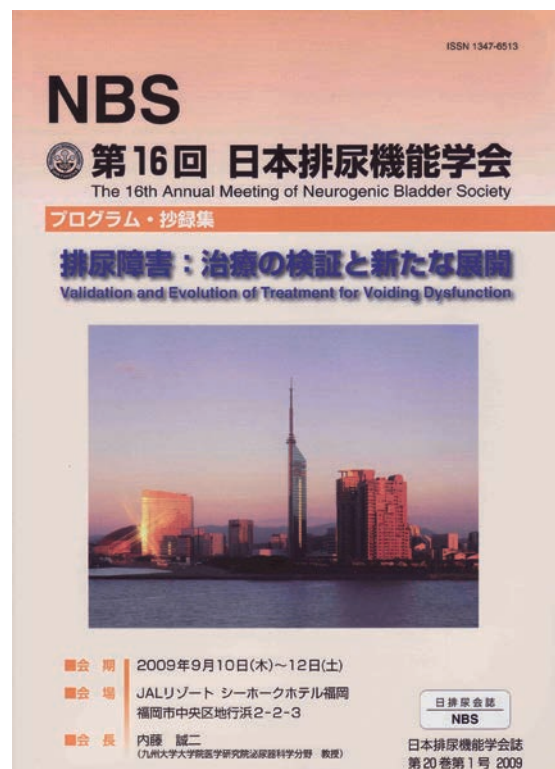
第 16 回日本排尿機能学会開催の思い出



第 16 回日本排尿機能学会 会長
九州大学 名誉教授 / 原三信病院 名誉院長
内藤 誠二

2009 年 9 月 10 日（木）～ 12 日（土）JAL リゾート シーホークホテル福岡（現 ヒルトン福岡シーホーク）において第 16 回 日本排尿機能学会を開催させていただきました。学会のテーマは、過活動膀胱に対する薬物治療（抗コリン剤）や BPH に対するレーザーを用いた低侵襲外科治療といった、当時排尿障害に対して臨床の現場に新たに導入された治療法に関して、その有用性と位置付けを客観的に検証し、そのさらなる可能性を探りたいと考えて、「排尿障害：治療の検証と新たな展開（Validation and Evolution of treatment in voiding dysfunction）」としました。招請講演として、Gopal H. Badlani 先生（Wake Forest Univ.）には「The Science behind Biomaterials in Female Stress Urinary Incontinence Surgery」、Karen McClosky 先生（Queen's Univ. Canada）には「Interstitial cells of Cajal in the bladder - form and function」、そして吉村直樹先生（Pittsburgh Univ. USA）には「CNS Control of the Lower Urinary Tract」というタイトルで最新のデータを交えた興味深い講演を行っていただきました。また、「女性下部尿路機能障害の評価と治療」、「前立腺肥大症の外科的治療法を検証する」、「夜間頻尿のエビデンスと治療の展望」と題したシンポジウム、「膀胱における情報伝達：最新のエビデンス」と題したワークショップでは活発な議論を交わしていただきました。さらに、Won Hee Park 先生（Inha University College of Medicine, Korea）には「Management of Overactive Bladder in Male (BPH/OAB) : Current Situation in Korea」、Alex Tong-Long Lin 先生（Taipei Veterans General Hospital, Taiwan）には「Videourodynamics in Female Functional Urology」と題した基調講演をしていただきました。学会初日には第 4 回 Pan-Pacific Continence Society (PPCS) を同時開催しましたので、アジアからの先生方を含めて、920 名の参加者、過去最高となる 248 もの一般演題をいただき、盛会裏に学会を終えることができました。ご参加いただいた皆様には排尿障害全般にわたる現状と展望に関する最新の情報を整理し、理解していただくとともに、海外の先生方も交えて会員相互の親交を深める良い機会になったのではないかと考えております。

2009 年はくしくも当教室開講 85 周年の記念すべき年でした。学会終了後は国内外からご参加の主要な先生方をお招きして、同門の先生方とともに教室スタッフの慰労を兼ねた祝賀会を催したのが懐かしく思い出されます。



第17回日本排尿機能学会 下部尿路医学の創造 ―飛躍の未来に向けて― Creation of Lower Urinary Tract Medicine -for a Growing Future-



第17回日本排尿機能学会 会長
山梨大学医学部 名誉教授(泌尿器科学講座)
武田 正之

会期：2010年9月29日(水)～10月1日(金)

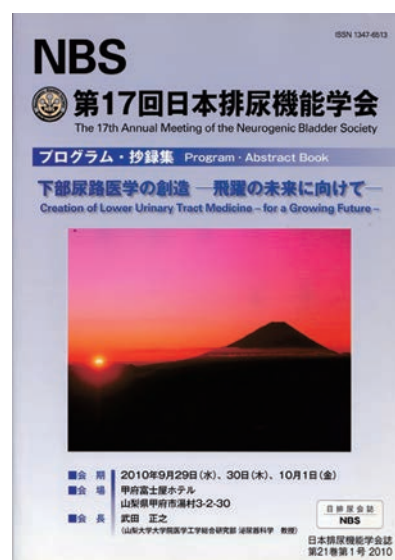
会場：山梨県甲府富士屋ホテル

参加者数約800名、一般演題230題をいただくことができ、皆様に感謝を申し上げます。招請講演・教育講演には、海外から多くの演者をお招きしました(表)。

シンポジウムは「下部尿路機能障害の薬物治療―現状と展望」,「ボツリヌス毒素治療の現況」の2つを、ワークショップは「求心性神経伝達と下部尿路機能」、「男性腹圧性尿失禁の治療」の2つでした。

表

演者(敬称略)	ご所属	演題名
Clare Fowler	London 大学	下部尿路機能と脳機能画像医学
吉村直樹	Pittsburgh 大学	膀胱痛症候群に対する最新治療法
Lori Birder	Pittsburgh 大学	尿路上皮と求心性情報伝達機構
Karl-Erik Andersson	Wake Forest 大学	神経成長因子の歴史、現況と将来
William Steers	Virginia 大学	How to manage the Journal of Urology
Roger Dmochowski	Vanderbilt 大学	Botox による最新の治療法
Guido Barbagli	イタリア国立尿道再建センター	新しい尿道再建術式
Craig Comiter	Stanford 大学	前立腺癌術後腹圧性尿失禁に対する最新治療
Claus Roehrborn	Texas 大学	前立腺肥大症に対する最新治療
富永真琴	岡崎統合バイオサイエンスセンター	機械的刺激センサーとしての TRP イオンチャネル



第 18 回日本排尿機能学会



第 18 回日本排尿機能学会 会長、現福井大学 名誉教授、金沢大学 客員教授
横山 修

第 18 回日本排尿機能学会は 2011 年 9 月 15 日から福井フェニックスプラザ、ホテルフジタ福井を会場として開催された。その年の 3 月 11 日、東日本大震災という未曾有の大震災があり、多くの方が被災し犠牲になられた。本学会も開催が危ぶまれたが、多くの方の励ましをいただき、開催にこぎつけた。

ボルトガルから Francisco Cruz 教授、オーストラリアから Chess-Williams 教授、福井大学村松郁延教授をお招きし、招請講演を行っていただいた。Cruz 教授は神経因性膀胱をターゲットにしたボトックスの有効性について、Chess-Williams 教授は尿路上皮自体が自発運動を示すという現象を示され、村松教授は尿路生殖器特異的なアドレナリン α_{1L} 受容体の提唱者として、表現型としての薬理学の重要性についてお話しされた。

この年は、「前立腺肥大症診療ガイドライン」や「慢性期脊髄損傷における排尿障害診療ガイドライン改訂版」が出版され、また過活動膀胱に対する世界初の治療薬 $\beta 3$ アドレナリン作動薬や尿失禁に対する新しい医療機器が承認され、本学会のテーマ「LUTS: Breakthrough to the Next Stage」に相応しい年であると思われる。本学会の会期中に $\beta 3$ アドレナリン作動薬ミラベグロンが世界に先駆けて本邦から発売されたことは大変印象深い。それにちなんで「LUTS 薬物治療の最新情報」「新時代の前立腺肥大症治療」と称するシンポジウムを企画した。さらに、福井大学のメインの研究テーマから、「夜間頻尿、特に夜間多尿に注目して；新たなエビデンスと治療の展望」「LUTS & ED - 基礎と臨床のかけ橋 -」「病態モデルの有用性と限界」という 3 つのシンポジウムも企画した。一般演題の中からも新しい病態モデルの開発や診断法の向上に貢献すると思われる 2 つの演題が学会賞を受賞した。名古屋市立大学の窪田泰江先生の「尿中 Stem Cell Factor (SCF) 値の測定は OAB の診断と治療効果判定に有用である」、サザンナイトラボラトリーの西島さおり先生の「トラニラスト投与による間質性膀胱炎モデルラットの作製とその発生機序の解析」は、まさに本学会の質の高さを示す内容であった。

今回の学会は私が福井へ来て 10 年目、節目の年、そしてあと 10 年。ちょうど中間地点 10 年で何ができなのか、何が足りないのか、振り返る意味でも貴重な機会を与えていただいた。



第 19 回日本排尿機能学会

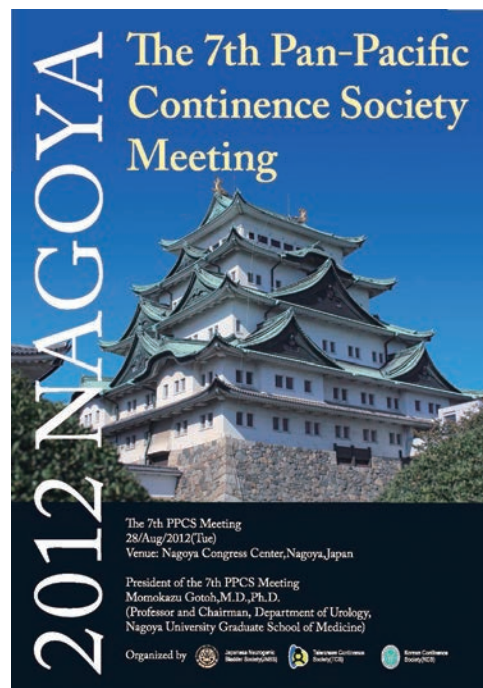


当時：名古屋大学大学院医学系研究科泌尿器科学 教授
現在：独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院 院長
後藤 百万

第 19 回日本排尿機能学会は名古屋大学泌尿器科学教室が主宰した。下部尿路機能障害の治療目的が QOL 向上にあること、本学会が伝統的に基礎研究、臨床研究いずれも重視し TR を推進してきたという観点から「基礎・臨床医学を結集した QOL 医療の発展」を学会テーマとした。会場は名古屋国際会議場、会期は 2012 年 8 月 29 日から 31 日で、さらに日本、韓国、台湾が毎年持ち回りで開催する PPCS (Pan-pacific Continence Society) annual meeting も前日 28 日に開催した。

一般演題は 247 題と過去 2 番目に多い応募を得た。会長講演では脂肪組織由来幹細胞を用いた尿道括約筋障害に対する再生治療の研究成果を報告した。韓国禁制学会会長 Kyu-Sung Lee 教授による基調講演、米国 Steven A Kaplan 教授、英国 Con J Kelleher 教授による招請講演、国際禁制学会前理事長のカナダ Jacques Corcos 教授による教育講演を行った。特別企画は「下部尿路機能における基礎研究の展望」のタイトルで、ピッツバーグ大学吉村直樹教授の基調講演、さらに同大学留学経験を持つ吉村門下 4 名の若手が研究成果を披露した。また、当時 OAB や BPH に押しやられて話題に上ることが少なくなった UDS、神経因性膀胱にフォーカスした教育セミナーを行った。さらに、将来に向けたテーマとして「膀胱血流と下部尿路機能障害」、「下部尿路機能障害の再生治療」を取り上げてシンポジウムを行い、本学会テーマに沿った最新の基礎と臨床について討論が行われた。会員懇親会では名古屋おもてなし武将隊の 6 武将（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、加藤清正、前田利家、前田慶次）が演武を行い、参加者が戦国時代にタイムスリップした。

PPCS は中国が本格参加する記念すべき学会となり、中国、韓国、台湾、日本から約 180 名と過去最多の参加者を得た。



第 20 回日本排尿機能学会を開催して



静岡県立大学 特任教授、大学院薬食研究推進センター長
山田 静雄

第 20 回日本排尿機能学会（「排尿学を考える：基礎研究と臨床医学の飛翔」）を 2013 年 9 月 18 ～ 21 日に静岡市で開催しました。特別講演は、2018 年ノーベル賞医学・生理学賞受賞者の本庶 佑先生に「幸福な生き方」をテーマに生物科学的な視点からご講演いただきました。第 20 回記念特別企画の鼎談「新薬開発の歴史を振り返る」では、故山口脩先生、河邊香月先生と竹中登一先生が α_1 遮断薬や抗コリン薬などの開発に至った経緯や創業戦略について語られ、アカデミアとの産学連携の重要性を強調されました。

海外からは、de Groat 教授、吉村直樹教授、Werner Schaefer 教授、Marcus Drake 教授、Jack Barkin 教授をお招きし、それぞれご専門領域の up-to-date な研究が紹介されました。シンポジウムや特別企画では、「排尿障害とチーム医療」、「排尿障害の臨床試験」や「排尿日誌（排尿記録）の有用性」などにつき熱心な議論がされ、協賛セミナーでは「排尿筋収縮不全」、「女性下部尿路症状診療の標準化」や「東日本大震災と排尿・排泄ケア」など、最近のトピックスが紹介されました。一般発表では、「国際セッション」として台湾と韓国からの研究発表や、過去最多の 264 題もの演題により国際交流を深めつつ大変充実した会となりました。

私は、薬物作用の基礎科学となる薬理学と薬物動態学を専攻し、排尿機能の基礎研究に加え、前立腺や膀胱などの下部尿路組織の受容体結合動態解析から薬剤の作用機序の解明や創薬研究に従事してきました。研究成果を本学会で発表し多くの先生方からご支援とご指導を賜り感謝申し上げます。

本学会の特長である「基礎と臨床の融合研究」の 50 年というこの節目をこれからの更なる発展の礎とされ、一層の繁栄と発展を遂げられますよう衷心から願っております。世界に先駆けて超高齢社会に突入したわが国において、他国の範となる「高齢者の排尿障害に対する適正な治療指針」に関する情報発信は世界が注目するところであります。本学会への期待は大きいと確信しています。

第 21 回日本排尿機能学会

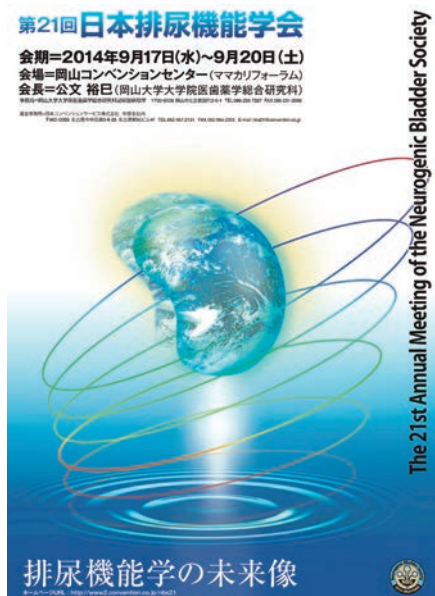


岡山大学 名誉教授、新見公立大学 学長
公文 裕巳

日本排尿機能学会が50周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。第21回日本排尿機能学会を2014年9月17～20日、岡山コンベンションセンターにおいて主宰させていただきました。「超高齢化社会に対応する課題解決先進国モデルの構築」は、日本の「健康・医療戦略」の最重要課題であり、排尿に関連する諸々の課題とその解決策は、高齢者のQOLの向上に直接寄与し、健康寿命の延伸に資する最大の要素です。排尿機能学を基盤とする泌尿器科学はもとより日本の臨床医学そのものの命題の1つであることから、『排尿機能学の未来像』をテーマとしました。

総会では、自治医科大学学長 永井良三先生の特別講演「これからの臨床医学研究」、Michael B Chancellor 教授の基調講演「排尿機能学の直面する課題とその解決策」を中心に据え、二つの特別シンポジウム 1)「生活習慣病と排尿機能～アンチエイジングを考える～」、2)「排尿機能の深化と医療イノベーション;日本の【学】発イノベーションの現状」を企画し、ヒューマンサイエンス振興財団 竹中登一先生、大阪大学 澤 芳樹教授を交えて討議しました。海外から、吉村直樹教授（米国）、Kyu-Sung Lee 教授（韓国）、Yao-Chi Chuang 教授（台湾）をお招きし、シンポジウム4題、特別セミナー、パネルディスカッション各1題、イブニングセミナー4題、ならびにランチョンセミナー10題、さらに一般演題も244題の発表をいただき、未来像を語るにふさわしい内容となりました。

本学会は、73年に神経因性膀胱研究会として発足以来、対象とする疾患を拡げ、多くの職種からエキスパートが参加する学際領域の学会として発展を続けています。今回は任意団体から一般社団法人に移行する節目の総会として、会期を通じて880余名の参加があり、学会そのものの未来像を検証する機会となりました。本学会の益々のご発展を祈念いたします。



第 22 回日本排尿機能学会を振り返って



旭川医科大学腎泌尿器外科
柿崎 秀宏

2015 年 9 月 9 日(水)～11 日(金)の 3 日間、京王プラザホテル札幌にて第 22 回日本排尿機能学会を開催し、総勢 700 名を超える参加者が集まりました。2002 年に日本排尿機能学会に名称変更した本学会は、2014 年には法人化の作業を終了し、2016 年からは日本排尿機能学会専門医制度が開始されました。下部尿路機能障害に対するトータルケアの実践に向けて、Continence Medicine の変遷と将来のチャレンジを展望する学会にしたいとの思いがあり、第 22 回日本排尿機能学会のテーマは、「Continence Medicine – Its Evolution and Challenge」とさせていただきました。第 22 回大会では、招請講演 3 題（富永真琴 教授、Lori Birdier 教授、Russ Chess-Williams 教授）、教育講演 1 題（吉村直樹 教授）、学会賞候補演題 7 題、一般口演 169 題、ポスター 63 題に加えて、シンポジウム 4 企画、ワークショップ 2 企画、ランチョンセミナー 10 題、イブニングセミナー 4 題が企画されました。

第 22 回日本排尿機能学会の開催に先行して、9 月 7 日(月)、8 日(火)の 2 日間、札幌コンベンションセンターにて第 10 回 Pan-Pacific Continence Society (PPCS) Meeting を開催しました。PPCS には、日本、韓国、台湾、中国、オーストラリアから約 240 名が参加して、盛会のうちに終えることができました。懇親会会場となった札幌ビール園では、各国の先生方がビールジョッキを酌み交わし、ジンギスカンを堪能しました。

2015 年 9 月 7 日からの 1 週間は、PPCS と排尿機能学会が続き、まさに Continence week と呼べる 1 週間でした。両学会の開催にあたり、多くの方々にご協力、ご支援を賜りました。この誌面を借りまして、改めて心より感謝申し上げます。

The 22nd Annual Meeting of The Japanese Continence Society

**第22回
日本排尿機能学会**

*Continence Medicine
"Its Evolution and Challenge"*

会期 **2015年9月9日(水)～11日(金)**
会場 **京王プラザホテル札幌**
〒060-0005 北海道札幌市中央区北 5 条西 7 丁目 2-1
会長 **柿崎 秀宏**
(旭川医科大学 腎泌尿器外科学講座 教授)

ウェブサイト <http://www.k-cav.com/nbs22>

学会事務局 旭川医科大学 腎泌尿器外科学講座
〒078-4510
北海道旭川市緑が丘 2 条 1 丁目 1-1
E-mail: urouro@asahikawa-med.ac.jp

編集事務局 株式会社 旭陽堂シーエーブイ
〒003-0004
北海道札幌市白石区東札幌 4 条 1 丁目 2-20 東宝ビル 5 階
TEL: 011-837-2155 FAX: 011-837-2212
E-mail: nbs22@mcav.co.jp

第 23 回日本排尿機能学会を振り返って



東京大学医学系研究科コンチネンス医学講座 特任教授(当時)
長野県立信州医療センター泌尿器科 部長
井川 靖彦

第 23 回日本排尿機能学会は、2016 年 12 月 6～8 日に東京国際フォーラムにて開催された。当初は、同年 9 月 13～16 日に同会場で開催される International Continence Society (ICS) の直前に同時開催を計画していたが、ICS 本部からの要請もあり、12 月に時期をずらしての開催となった。大会のテーマは、「コンチネンス医学：基礎と臨床の調和的発展」とし、コンチネンス医学の領域において、わが国の伝統的なお家芸ともいえる基礎研究の成果を結集して、いかに臨床に反映させるか、逆に、日々の臨床での課題をどのように臨床研究や基礎研究に反映させるかという課題を共に考え、明日のコンチネンス医学を調和的に発展させる道を探りたいという願いを込めた。

招請講演としては、Karl-Erik Andersson、Francisco Cruz、Marcus Drake の 3 氏をお招きして、それぞれ、“Future pharmacotherapy for lower urinary tract dysfunction”、“The sympathetic system in interstitial cystitis”、“Lower urinary tract function terminology state-of-the-art” というテーマでご講演いただいた。シンポジウムでは、「前立腺肥大症の成因に迫る」、「間質性膀胱炎の病態を探る」、「低活動膀胱の診断と治療標的」、「下部尿路機能と高次脳機能」といったテーマで、下部尿路機能障害の病態生理に迫り、新たな治療標的とともに探るべく、討論いただいた。さらには、その年（2016 年）4 月に「排尿自立指導料」が保険収載されたことから、「地域包括ケアシステムにおける排泄指導の課題」というテーマのシンポジウムで、地域包括ケアシステムの中での排泄指導の役割と課題について検討いただいた。

教育講演としては、本学会の認定医制度がちょうどその年からスタートしたことから、「JCS 認定医制度の骨子」と題して、認定医制度委員長の柿崎秀宏教授に、その概要を解説いただいた。さらに、同認定医申請教育プログラムを兼ねる教育ワークショップとして、「LUTS 時代における尿流動態検査の意義」、「ここがポイント！ 二分脊椎に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン」、「Female LUTS 診療 update」というテーマの 3 企画を実施した。一般発表としては、学会賞候補演題 8 題、一般口演 100 題、ポディウムポスター 78 題、ポスター 51 題、計 237 題の発表があり、活発な討論で盛り上げていただいた。



図 1 第 23 回日本排尿機能学会ポスター



図 2 会員懇親会にて海外招待者
前列両端：Anderson 教授夫妻、後列左から二人目：Drake 教授、右端：Cruz 教授とともに

第 24 回日本排尿機能学会



獨協医科大学排泄機能センター 主任教授
現：宇都宮脳脊髄センターシンフォニー病院
山西 友典

第 24 回日本排尿機能学会を 2017 年 9 月 28 ～ 30 日の会期で、東京台場（ビッグサイト TFT ホール）にて、「排泄学を極める～医学と医療のコラボレーション～」というテーマで、開催させていただきました。

一般演題では、講演 132 題、short oral 66 題、ポスター 46 題、計 244 題が集まりました。

招請講演では、Bristol 大学 Chris Fry 教授に“Role of mucosa in controlling bladder function”、Steven W Siegel 先生に“The role of sacral neuromodulation in urologic practice”というテーマでご講演していただきました（9 月から SNM が承認）。教育講演では、榊原隆次教授により、「パーキンソン病における下部尿路機能障害診療ガイドライン」につきご講演いただきました。

JCS セミナーでは、「粘膜から膀胱収縮を考える」というテーマで、橋谷光教授（名古屋市立大学）、Chess Williams 教授（ボンド大学、オーストラリア）、Fry 教授、相澤直樹先生（東京大学）に、また後藤百万教授（名古屋大学）、真田弘美教授（東京大学老年看護学）の司会により、「排尿自立指導の実践マニュアル」というテーマで、本間之夫先生（日本赤十字社医療センター）、武井実根雄先生（原三信病院）の司会により「間質性膀胱炎および過知覚膀胱の診断と治療」というテーマでご講演いただきました。

シンポジウムでは、「下部尿路機能への臨床検査学的アプローチ 尿と臨床検査」、「幼少児排尿機能障害の指導と管理」「下部尿路症状に関連する和漢診療」、「二分脊椎・脊髄損傷における下部尿路機能障害の病態診断と治療戦略」、「サーカディアンリズムと下部尿路機能」「女性下部尿路機能障害（低活動膀胱と女性の機能的下部尿路閉塞症を含めた）」「機能性食品は排尿障害を改善するか？」というテーマで 7 題ご講演していただきました。

またディベートとして、成島雅博先生（名鉄病院）には骨盤臓器脱の腹腔鏡下仙骨腔固定術（LSC）、嘉村先生（四谷メディカルキューブ）に TVM につき討論していただきました。

懇親会では、アトラクションとして旭中央病院中津先生、佐々木先生とともにジャズの演奏を致しました。



図 1 学会ポスター



図 2 懇親会でのジャズ演奏によるアトラクション（会長自らベースを弾いています）



図 3 河邊賞受賞式



図 4 懇親会後の集合写真

第 25 回日本排尿機能学会を振り返る



第 25 回日本排尿機能学会大会長
桜十字病院泌尿器科
吉田 正貴

第 25 回日本排尿機能学会を 2018 年 9 月 27 日～29 日の 3 日間、名古屋国際会議場にて開催しました。メインテーマは「健康長寿と下部尿路機能障害 - 新たなストラテジーの展開 -」でした。これは私が勤務していた国立長寿医療研究センターの病院理念「私たちは高齢者の心と体の自立を促進し、健康長寿社会の構築に貢献します」に沿った学会運営を目指したからです。

このテーマに沿ったシンポジウムとして「LUTS とフレイル・サルコペニア」を企画しました。LUTS の要因としてのフレイル・サルコペニアや LUTS の治療・ケアに際してフレイル・サルコペニアへの配慮の重要性などについて討論されました。これまでこのような視点からのアプローチがなく、参加者の関心も高かったことを覚えています。また、コ・メディカルを対象としたシンポジウム「高齢者の尿排出障害に対するベストプラクティス-フレイル、サルコペニア、認知症高齢者との向き合い方-」では、医師・看護師・理学療法士などから、尿排出障害に対する管理やケアについて、高齢者特有の状態を考慮することの重要性が議論されました。高齢者の下部尿路機能障害においてはコ・メディカルとの連携は不可欠であることが再認識されました。

もう 1 つ重要なシンポジウムとして「低活動膀胱 (UAB): 新しい疾患概念へのチャレンジ」がありました。低活動膀胱に関する定義や疫学は現在も曖昧で、薬剤治験も進んでいません。故) 山口脩先生が日本から疾患概念を作り上げ、それを世界に発信していこうとご提案され、企画しました。学会後この趣旨に沿ったコアワーキンググループが排尿機能学会で立ち上がり、「排尿筋低活動の非侵襲的な診断基準」を作成・報告しました。

その他の企画として Pros and Cons がありました。「 α_1 遮断薬 vs PDE5 阻害薬」、「抗コリン薬 vs β_3 作動薬」、「腹腔鏡下仙骨陰固定術 vs 経膈メッシュ手術、従来型手術」の 3 つについてそれぞれの立場から長所、短所や適応などについて活発なディベートがなされました。

また、本学会では初めての「学会抄集アプリ」を作成しました。抄録集を持ち歩かずにスマートフォン 1 つで身軽にご参加いただけたのではないかと思います。以降の本学会でも継続して使用されました。

全体で 1,100 名を超える出席者がありました。ご参加またご協力をいただきました先生方と多くの企業の方々に再度お礼を申し上げます。



第 26 回日本排尿機能学会総会を開催して



日本大学医学部泌尿器科学系 主任教授
高橋 悟

2019 年 9 月 12 ～ 14 日の 3 日間、第一ホテル両国に併設の KFC Hall & Rooms で第 26 回日本排尿機能学会を開催しました。当時 4 年間で 3 度東京での開催だったので趣向を変えて下町両国で開催しました。学会のポスターには、両国出身で世界で最も有名な日本人の 1 人である葛飾北斎の「富嶽三十六景」の「御厩川岸より両国橋夕陽見」と「凱風快晴」を配し、「北斎漫画」から「力士」に登場願いました。

メインテーマは、「排尿機能障害治療の先端と裾野」としました。排尿機能障害治療は最近の 30 年間に大きく進歩し、それに合わせて診療ガイドラインも順次改訂版が刊行されています。今後は排尿機能障害治療の裾野を広げて、先端をさらに高めて、バランスのとれた発展を目指す必要があるのではないかと考えました。

招請講演は、Roger R. Dmochowski 教授 (Vanderbilt University)、吉村直樹教授 (University of Pittsburgh)、Kyu-Sung Lee 教授 (Samsung Medical Center, Sungkyunkwan University)、Alex T. Lin 先生 (Taipei Veterans General Hospital) に、各分野の最新事情をご紹介いただきました。また特別講演は、武田正之教授 (山梨大学：当時)、本間之夫先生 (日本赤十字社医療センター：当時)、渡辺 決先生 (京都府立医大名誉教授：渡辺記念長命研究所) にお願しました。武田先生には卓越した Perspective をご披露いただき、本間先生には OABSS 開発や間質性膀胱炎研究の歩みをご紹介いただきました。渡辺先生は、「尿道の拡張機能の再認識と膀胱の水吸収の発見」というエキサイティングなタイトルで、目から鱗のお話をご披露いただきました。先生のご研究には私も関与しております。

また特別企画講演として、NHK 制作局の植松秀樹様に「再・NHK ドキュメント 72 時間が伝えるもの」をご講演いただきました。2017 年に開催した第 30 回日本老年泌尿器科学会に続き、今回も好評をいただきました。また 8 つのシンポジウム、3 つのケースディスカッションを企画しました。お陰様で、260 演題の応募と 1,100 名を超える参加者をいただきました。

11 日の会長招宴は墨田川の屋形船で行い、80 名を超える先生方につかの間の下町情緒を楽しんでいただきました。一時はどうなるかと心配した雷雨もあがり、デッキに出てお台場の夜景を楽しんで頂けました。このわずか 3 ヶ月後に日本でのコロナ禍が屋形船から始まったわけです。会員懇親会では日大が誇る応援リーダー部「DIPPERS」のパフォーマンスで大いに盛り上げていただきました。

最後に改めて、ご参加の皆様、ご協力頂いた関係各位の皆様に、厚くお礼申し上げます。

第26回日本排尿機能学会
The 26th Annual Meeting of The Japanese Continence Society

会期 2019年9月12日(木)～14日(土)
会場 KFC Hall & Rooms (第一ホテル両国 併設)
〒130-0015 東京都墨田区横網一丁目8番1号
会長 高橋 悟 日本大学医学部 泌尿器科学系 主任教授

排尿機能障害治療の先端と裾野

主催 日本大学医学部 泌尿器科学系
〒130-0015 東京都墨田区横網一丁目8番1号
E-mail: jcs@u-n.ac.jp

共催 日本大学医学部
〒130-0015 東京都墨田区横網一丁目8番1号
E-mail: jcs@u-n.ac.jp

協賛 日本コンベンションサービス株式会社
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
E-mail: jcs@jcs.co.jp

URL <https://jcs2.convention.co.jp/26jcs>

第27回日本排尿機能学会 日本排尿機能学会50周年を記念して



第27回日本排尿機能学会(2020年)大会長
東京女子医科大学附属足立医療センター骨盤底機能再建診療部泌尿器科
巴 ひかる

日本排尿機能学会50周年おめでとうございます。

私はCOVID-19の感染拡大で東京オリンピックが延期となる中、2020年10月15～17日にTKPガーデンシティ品川にて第27回日本排尿機能学会を開催させていただきました。本学会史上初のハイブリッド型開催(現地・全指定講演のオンデマンド・第1会場のライブ配信)となり、慣れない準備に追われました。

また、第1回神経因性膀胱研究会から47年、69回目にして初の女性大会長でもあり、絶対に失敗できないというプレッシャーがありました。

学会のメインテーマは「下部尿路機能障害における性差医療」、同時開催を予定していた第15回Pan-Pacific Continence Societyを踏まえ(結局2021年に延期)サブタイトルを「臨床を究め、アジアから世界へ」としました。

基調講演は本望修教授(札幌医科大学神経再生医療科)に脊髄損傷の再生医療、招請講演はLori A. Birder教授(Pittsburgh大学)に間質性膀胱炎、Marcus Drake教授(Bristol大学)に再発性腹圧性尿失禁をオンラインで、また吉村直樹教授(Pittsburgh大学)に低活動膀胱を現地でご講演いただきました。特別講演は老年医学の第一人者である大内尉義先生(前東京大学老年内科教授)に高齢社会における医療と社会のあり方、清水達也教授(東京女子医科大学先端生命医学研究所)に細胞シートを用いた再生医療をご講演いただきました。またPMDAから中村梢氏に承認審査業務についてご発表いただきました。

特別企画講演は私の心の師、世界的マットペインターでスターウォーズやダイ・ハードなど数多くの映画を手掛ける上杉裕世氏(オムニバスジャパン VFX スーパーバイザー)にお願いしました。彼の「目標を高く持つ。それに向かうプロセスをおろそかにしない。」が私の座右の銘です。

コロナ禍で会員懇親会を開催できなかったことが心残りですが、指定演題86題、一般演題209題(口演149題、ポディウムポスター60題)の計295演題の発表があり、801名に参加登録(うち現地参加383名)していただくことができ、閉会の辞では感謝と緊張が解け、涙が出そうになりました。





第 28 回日本排尿機能学会を開催して



第 28 回日本排尿機能学会 会長
信州大学医学部泌尿器科学教室 名誉教授
石塚 修

2021 年 9 月 9 日から 9 月 11 日に、長野県松本市のホテルブエナビスタにおいて、第 28 回日本排尿機能学会を開催させていただきました。開催地となった松本市のキャッチコピーは 3 つのガク都（学都、岳都、楽都）です。

学都の意味は、学問の都としての学です。松本市には旧制松本高校の校舎がそのまま残されており、信州大学へと移管され「あがたの森公園」となっております。平成 2 年に小川秋實元教授が旧制高校の講堂にて、神経因性膀胱研究会を開催しております。

岳都の意味は、日本アルプスの玄関口であることを意味し、山岳の岳です。有名な上高地は松本市に属しております。

楽都の意味は、指揮者の小澤征爾さんが、1992 年にセイジ・オザワ松本フェスティバルを創立し、毎夏、世界中から優れた音楽家たちが結集して多彩な演目が披露されることに由来しております。音楽の楽からきた楽都ですが、今回の楽は、みんなが集まって楽しむの楽も意味させていただきました。

COVID-19 蔓延のため、なかなか集まることができなかった排尿機能に関心を持つ皆様方が、松本の地に集まり、排尿に関する学問、久方ぶりの交流、松本の街、日本アルプスを楽しんでいただきたいとの思いで、メインテーマを「Welcome to ガク都（学都・岳都・楽都）！」といたしました。開催時の松本市の新型コロナ感染警戒レベルは 5 で、9 月 12 日まで集中対策期間となった状況下での開催でした。760 名の御参加を頂きましたが、現地参加が 242 名の約 30% でした。しかし、皆様、ハイブリッド開催形態に大分慣れておられ、排尿機能障害治療の基礎および臨床の先端的な Update に加え、実臨床における排尿機能障害治療についてのホットな議論、情報交換、また連携が深まったのではないかと感じた次第です。

なお、ハイブリッド形式となりましたが、本学会に引き続き、PPCS2021 も松本にて開催されました。

ISBN1347-6513

第28回
日本排尿機能学会
The 28th Annual Meeting of The Japanese Continence Society
プログラム・抄録集

Welcome to
ガク都(学都・岳都・楽都)!

現地開催・LIVE 配信
2021.9/9 (Thu) - 11 (Sat)
オンデマンド配信 2021.10/1 (Fri) - 29 (Fri)
会場: ホテルブエナビスタ (松本市)
会長 石塚 修
信州大学医学部泌尿器科学教室 教授
<https://site.convention.co.jp/28jcs/>

第 29 回日本排尿機能学会(2022 年)大会長を仰せつかって



札幌医科大学医学部泌尿器科学講座 教授
舩森 直哉

2022 年 9 月 1 日～3 日に第 29 回日本排尿機能学会を札幌で開催しました。COVID-19 の第 7 波のピークとほぼ重なってしまいましたが、約 350 題の演題が登録され、現地 638 名、ウェブ 292 名の計 930 名の方にご参加いただきました。小規模ですが懇親会も開催させていただき、久しぶりに顔を合わせた皆様の笑顔と感謝のお言葉が忘れられません。

メインテーマは「新時代における下部尿路機能学」でした。下部尿路機能にかかわる研究は、ゲノム情報、AI、ビッグデータの使用など、まったく新しい局面を迎えております。これと連動して、下部尿路機能障害に対するケアや治療成績が向上していることは明らかです。一方で、感染症の蔓延に伴い、日常臨床のみならず基礎研究や予防医学の遂行にも大きな影響が及んでいます。このように、「新時代」との言葉には、進歩との positive な側面と感染症との negative な側面の 2 つの意味を込めました。サブタイトルは、「すべての人々の幸せを願って」としました。本会の願いは、下部尿路機能障害の適切な予防、診断、治療により、いまだに疾患を発症していない一般の方を含め、患者さんやその家族に幸せになってもらうことだと思います。この願いを实践するために、市民公開講座を企画しました。本学会において市民公開講座を正式なプログラムとして組み込んだのはおそらく今回が初めてではないかと思っております。

また、プログラムの構成に当たっては、ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン (DEI) を最大限に考慮しました。ダイバーシティ特別企画「10 年後の日本排尿機能学会を見据えて：多様化のメリットと今後の課題」は出色のワークショップでした。泌尿器科のみならず泌尿器科以外の医師、基礎研究者、看護師などのメディカル・スタッフから構成される多様性に富んだ集団である日本排尿機能学会は今後すべての学会における DEI 実現のお手本になるべき学会だと再認識した次第です。本会の今後の益々の発展を祈念しています。

第 29 回
日本排尿機能学会

テーマ
新時代における下部尿路機能学
～すべての人々の幸せを願って
Science of Lower Urinary Tract Function in the New Era
～Wishing for Happiness for Everyone

会期 | 2022 年 9 月 1 日(木)～9 月 3 日(土)
会場 | 京王プラザホテル札幌
会長 | 舩森 直哉 札幌医科大学医学部泌尿器科学講座
学会サイト | <https://site2.convention.co.jp/29jcs/>

【学術委員会事務局】
札幌医科大学医学部泌尿器科学講座
〒060-0813 北海道札幌市中央区南 1 条西 5 丁目 1 番 1 号
【運営事務局】
日本コンベンションサービス株式会社内
〒060-0813 北海道札幌市中央区南 1 条西 5 丁目 1 番 1 号
TEL: 011-230-1111 FAX: 011-230-1112 E-MAIL: info@jcs-jp.com

第30回日本排尿機能学会 in 千葉



* 1 脳神経内科津田沼 / (前) 東邦大学医療センター佐倉病院
脳神経内科

* 2 東邦大学医療センター大橋病院泌尿器科

榊原 隆次*1

関戸 哲利*2

2023年9月7日から3日間、日本排尿機能学会 in 千葉を、盟友の関戸先生と共に開催させていただきました。日本排尿機能学会は、1973年に神経因性膀胱研究会としてスタートした学会であり、2023年は創立50周年、学会設立後30周年となる節目の年に当たります。メインテーマを「**神経因性膀胱 REVISITED! ~患者さん中心の排尿医療を目指して~**」とさせていただきました（本学会の輝かしい50年の歴史の中で、脳神経内科の担当は、2003年恩師の千葉大学 服部孝道教授に続いて、今回が2回目[20年振り]となります）。千葉大会はhybrid形式とし、現地670名WEB150名、計820名、口演161題ポスター63題、計224題と、多数の演題をいただきました。第30回記念プログラムとして、「**日本排尿機能学会 JCS の歴史**」（西澤理先生）、「**国際禁制学会 ICS（Glasgow 発祥）と国際神経泌尿器科学会 INUS（スイス発祥）の歴史**」（2022 ICS 大会長・INUS 前理事長 Helmut Madersbacher 先生）、「**国際合同セミナー with ICS「泌尿器科医はいつ神経因性膀胱を疑うか？」**」（演者の Marcus Drake 先生、Sanjay Sinha 先生は、私が属します ICS の Neurourology Promotion Committee メンバーです）、「**国際合同セミナー with INUS「基礎からみた下部尿路**」を Lori Birdier 先生、「**臨床からみた下部尿路**」を Madersbacher 先生にいただき、ビッツバーグの吉村直樹先生、Jalesh Panicker 先生、Blayne Welk 先生にも特別講演をいただきました。2003年本間先生の集計から20年振りとなる下部尿路症状の全国疫学調査が、JCS 記念事業として行われ、高橋悟先生・三井先生から報告がなされました。全員懇親会では、柏和太鼓を楽しみながら、会員先生方大いに盛り上がりまして、本当に有難うございました。



国際禁制学会大会長

アジアで初の ICS meeting



東京通信病院 名誉院長
河邊 香月

第 27 回 ICS 会長 (Chairman, Organizing Committee) は大会の行われる 4 年前 (私の場合は Rome での 23 回 Meeting、1993) に決められた。ちょうど浜松医科大学から東京大学に配置換えになった年で、西澤理先生や土田正義先生に熱心に勧められ、国際学会長を一度くらいは経験できたら光栄と思って引き受けた。東京でなく横浜に決めたのは専ら費用の関係である。1993 年以前に ICS の General Secretary として力のあった、Paul Abrams 先生に私の意志を伝えたこともあったが、それほど熱心に選挙運動をしたわけではない。ただ、アジアでは最初の開催であるし、日本もようやく学会に演題が通り始めたこともあって、Abrams 先生からは好意的な反応があった。西澤先生は 1980 年頃から ICS に出席されておられたようだが、私は初めて ICS に出席したのが Arhuus オーフス 1990 で、横浜の前は 7 回出席したに過ぎない新参者なので、日本の多くの先生方のご支援を仰いだこと、Rome でパンフレットを沢山頒布したこと、薬業界の方々と、新しい α ブロッカーの宣伝を兼ねて外国を行脚したことなどが関連したこととして思い出される。資金調達については、Pharmacia がかなりの部分を補助してくれることになっていたものの、自分でも集めねばならない。ICS が日本では知名度がないことから、企業のガードは固く苦勞した。ちょうど円高になっており、ICS では約 \$300 と決められた registration fee では Reception、Gala Dinner、Chairman's Dinner、ランチ、会場費、学会事務費等の費用を賄えないおそれがあった。そのころ円が高く、\$1 $\equiv$ ¥80 だったので、収入減を恐れて registration fee を事前会員登録 ¥30,000 とさせてもらった。会期は 1997 年 9 月 24 日から 26 日までの 3 日間であったが、Standardization Committee、私設の Workshop を含めて会場を取らねばならなかったのも、苦肉の策として余った会場を第 4 回日本神経因性膀胱学会に使った。演題の選考は慣行通り、4 月に東京で 3 日かけて、Constantinou (USA)、Fowler (UK)、Lindstorm (Sweden)、Langer (Israel) と西澤、本間の諸先生にお願いした。Plenary Session や Discussion Poster で口演できるのは 1/4 位の確率で日本人は少なかった。しかし state-of-the-art-lecture は河谷 (秋田大学)、井川 (信州大学)、服部 (千葉大学) とすべて日本人エキスパートの先生を選んで、日本で行われる ICS として、誇りを出したつもりである。

学会誌の発行が出版社の不手際で遅れて参加者の手元に行き渡らないという予期せざる事態が起こったのは誠に不本意なことだった。Gala Dinner に当たって不条理な苦情や、その他の ICS の運営に、私の至らぬところに気を配っていただいた Abrams 先生のガバナンスは実に立派なものだった。

ちなみに、学会準備会を立ち上げる際に、恩師の高安先生からは 100 万円、鈴木金治財団より 50 万円、安田耕作先生には神経因性膀胱学会に呼びかけて、200 万円を集めていただいた。最終的には黒字になったのは本間先生の辣腕による。また黒字分の一部は「河邊賞」の原資となった。



ICS 2016 in Japan



日本赤十字社医療センター 名誉院長
本間 之夫

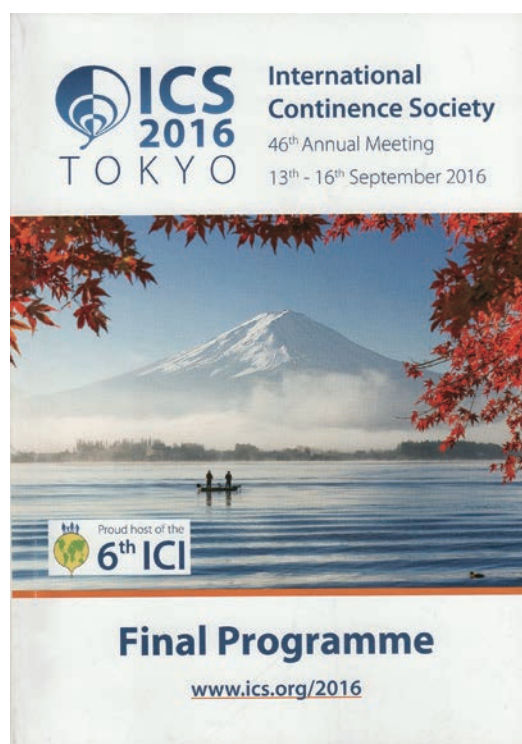
期日は2016年9月13日～16日、会場は東京国際フォーラムでした。日本での初回開催は1997年（河邊香月会長、パシフィコ横浜）で、今回は2回目でした。国際学会は招致合戦が熾烈で、4年前からICS招致準備委員会を設けて国内外で招致運動を行いました。対抗はトルコでしたが、各方面の協力をいただき結果は圧勝でした。招致が決まると今度は本部から強い経営的圧力がかかり、参加者増やスポンサー獲得に奔走しました。

応募演題は963題（日本は133題）で、査読や委員会を経て885題が採用となりました。State-of-the-Art lectureは3題、Roundtable sessionは12題でした。参加者は2,146名（日本544、続いて英国150、米国130、台湾106など）で、前年のMontreal（1,510）を十分に超えました。会期中にInternational Consultation on Incontinenceが開催されたことも幸運でした。Social programはWelcome Reception（余興は阿波踊り）とGala dinner（椿山荘、Dance Party）で、いずれも盛況でした。

本大会では演題数・参加者数がV字回復し、決算も黒字であり、アジア地域の参加者が増え、学術的なレベルが高まるなど、ICS学会の再活性化に貢献できたと確信しています。

お世話になった方々は国内外に多数ですが、武田正之先生（JCS理事長として国内の意見調整、ICSのTrusteeとして国際的支援の獲得）、吉村直樹先生（Local Scientific Chairとして人脈と英語力を活かした協力）、井川靖彦先生（会長の傍にあって実務的に多方面で補助）の3先生への恩義は忘れません。JCS本部（助成金、役職者の手配）と東京都（助成金、無償の日本文化の紹介企画）からも支援もいただきました。

なお詳細は、Urology Today 2017; 24:56-59 や排尿障害ブ
ラクティス 2016; 24: 156-163などを参照ください。



ご寄稿

名誉会員

研究会発足当時のこと



信州大学 名誉教授
小川 秋實

1970 年頃までは、神経因性膀胱といえば脊損に関することが主だった。私は東京大学在職中に、二分脊椎児が多数入所している施設（整枝療護園）から尿路管理の相談を受け、脊損とは異なる尿路管理が必要だと感じた。この問題を黒田一秀教授（福島医科大学）や宮崎一興博士（神奈川県リハビリセンター）などと話し合っているうちに、神経因性膀胱について話し合う研究会を作ろうということになった。1973 年千葉大学主催の日本泌尿器科学会のさいに、10 名ほどの学会員が集まり研究会を発足することにした。年間 2 回開催、毎回世話人を決め、世話人が会場と話題提供者を選び、参加者はざっくばらんに話し合うことにした。

私が話題提供者になったのは第 2 回で、残尿を話題にした。当時、残尿はあってはならないとされたが、私は、上部尿路に異常がなく、ある量を排尿できれば、残尿はあっても放置してよいという意見を述べた。大いに議論があったように思う。

この頃より少し前、米国のラビデス医師が間欠自己導尿法を提唱し、私も早速この方法を、上部尿路に拡張がある場合や溢流性尿失禁がある場合に実施した。患者自身が数時間ごとに消毒を一切せずにネラトン・カテーテルで導尿する。カテーテルは導尿後水洗して保存、破損しない限り使い続ける。この方法で、何十年も異常を起こさずに経過した二分脊椎患者が何人もいる。この間欠導尿は、導尿に無菌的操作を要さないという画期的なものだった。ところが、いまだにカテーテルを消毒液に漬けておく導尿キットが市販され、導尿時に消毒をする方法が行われている。この問題を学会で議論したらよいと思う。

ざっくばらんな話し合いの会合は第 8 回くらいまでで、以後は現在の学会形式で運営されるようになった。学会は、症例や研究結果の発表の場だけでなく、対面で率直に意見を交わす場であることが最も大切だと思う。ぜひそのような会議運営がされることを期待している。

日本排尿機能学会の 50 周年に寄せて



北腎会坂泌尿器科病院／北海道 21 世紀総合研究所
塚本 泰司

本学会が、1973 年にその前身として活動を開始した神経因性膀胱研究会（研究会）から数えて、今年で 50 年を迎えたということです。私もこの年に泌尿器科医としてのスタートを切りました。

本学会の 50 周年をお祝いすると同時にこれまで学会の発展にご尽力された関係の先生方の熱い思いに敬意を表します。

私の排尿機能に関する基礎・臨床研究の師匠は西澤理先生（信州大学名誉教授）ですが、あまり良い教え子ではなく研究会への参加もとびとびでした。研究会は当時、年 2 回行われていたのですが、とても毎回出席できるような研究成果はあるわけもなく、当時の研究会に対しては、「わき道」からこっそり「本通り」を覗き見るといった感じで、その結果、けっこう敷居が高かったことを思い出します。

そもそも私たちの排尿機能へのアプローチは 1980 年代前半に開始した前立腺肥大症の疫学を嚆矢とするもので、当時も今も主流である排尿の神経生理学とはかなり縁遠い状況でした。それでも α_1 アドレナリン受容体遮断薬が出始めた 1980 年代後半からは前立腺肥大症の治療を主体とした臨床研究で、ようやくこの学会の真の一員として参加することができるようになりました。研究会が日本神経因性膀胱学会となった第 1 回の会（1994 年）では、「前立腺肥大症と排尿障害」のシンポジウムで私たちの疫学の研究成果を幸運にも披露することができました。その後も臨床研究を主体として、2002 年に大きく衣替えした日本排尿機能学会にも参加してきましたが、当時の教室員が 2008 年には臨床部門の学会賞、また、舩森直哉教授になってから東京大学に国内留学していた教室員が、本間之夫、井川靖彦両教授（当時）のご指導のもとで 2018 年の基礎部門の学会賞を受賞したことは大きな励みになりました。

そして昨年、舩森教授会長のもと第 29 回の本学会を札幌で開催できたことは 50 年間の経過を知る者にとっては、ある意味でようやくここまで来たという達成感を得たところです。

今回の学会では西澤先生が特別講演で本学会のこの 50 年間の歩みと将来を発表することになっています。これまでに構築されたプラットフォームを土台とし、新しい発展を展望できる建造物ができあがってくるでしょう。本学会がさらに global に展開されることを期待しています。

学会と北大泌尿器科教室



北海道大学 名誉教授
野々村克也

この度、日本排尿機能学会 50 周年おめでとうございます。

北大泌尿器科は美唄のせき損センターでの診療に携わっていたことから、神経因性膀胱研究会には発足当時より深く関わってきました。以前より泌尿器科教室では俗称 NB 班という研究グループがあり、このグループが中心となって研究会とともに歩んできました。当初からのリーダーは言うまでもなく小柳先生で、大学・せき損センターを中心に膀胱内圧測定、排尿時膀胱尿道造影、外尿道括約筋筋電図等々にて、DSD などの診断・治療に多くの業績をあげられ、教授になられた数年後に研究会が日本神経因性膀胱学会となりました。

その後、日本排尿機能学会と改名してからは（この翌年、小生が教授として教室を主宰）、排尿機能のみならず畜尿機能の研究がさらなる飛躍を遂げ、この 20 年で世界に冠たる学会の 1 つとして発展して来たものと理解しております。

以上のように、北海道大学の NB 班は学会に深く関わってきました。この場を借りて歴代の主たる教室のメンバーを掲載させていただきます。

辻一郎教授、小柳知彦教授、丸彰夫助教授、信野祐一郎講師（前小樽市立病院院長）、柿崎秀宏講師（現旭川医科大学教授）、飴田要助手（現北海道泌尿器科記念病院院長）、田中博講師（現市立札幌病院副院長）、三井貴彦講師（現山梨大学教授）、橘田岳也講師（現旭川医科大学准教授）、垣渕（旧姓 菅野）由紀子助教（現山梨大学助教）、千葉博基助教などがあります。

これからも、日本排尿機能学会と北大泌尿器科教室がともに手を携え、さらなる発展を遂げることを期待しております。

神経因性膀胱研究会から神経因性膀胱学会、そして排尿機能学会へ



東北大学 名誉教授
荒井 陽一

日本排尿学会設立 50 周年をお祝い申し上げます。私は 1978 年医学部卒ですが、前立腺肥大症や前立腺癌根治手術を通して膀胱や括約筋機能の奥深さに惹かれ、早い時期から神経因性膀胱研究会に入会しました。1993 年に京都での日本泌尿器科学会総会時に神経因性膀胱研究会（吉田 修会長）が開催されました。当時、本研究会は規模も小さく総会などと合わせて開催されるのが通例でした。日本性機能学会の前身である I M P 研究会も確か総会との並列開催だったと記憶しています。京都大学泌尿器科の教官で本研究会の会員は私ひとりだけであり、吉田会長の下で事務局を担当することとなりました。特別講演はピッツバーグ大学の de Groat 教授でした。同大研究室にはその後、吉村直樹先生を初め多くの日本の泌尿器科医が留学することになり、日本における排尿機能研究の一大勢力となりました。研究会は翌 1994 年には神経因性膀胱学会となります。

東北大学泌尿器科学教室は本学会と浅からぬ縁があります。東北大学の初代穴戸仙太郎教授のテーマは神経泌尿器科学でした。その関係で神経因性膀胱研究会の事務局は長く東北大学泌尿器科にありました。性機能研究のルーツも東北大学泌尿器科にあり、まさに排尿・性機能研究の中心的存在でした。2002 年に日本排尿機能学会となりましたが、初代理事長の山口 脩先生（当時、福島県立医科大教授）は穴戸門下生のお 1 人です。私は山口理事長のご推薦で、学会設立と同時に理事に就任させていただきました。その後も長く本学会で勉強することができましたことにあらためて感謝申し上げます。

本学会は今や日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会に次ぐ規模のサブスペシャリティ学会に成長しました。排尿機能領域は基礎から臨床まで世界でも先端的な研究を行ってきた歴史があります。若い泌尿器科医の力でさらに発展することを願っています。

基礎研究者

基礎研究者として



高知大学医学部薬理学講座 教授
齊藤 源顕

私が排尿研究に携わり 30 年近くになります。神経因性膀胱研究会、神経因性膀胱学会そして排尿機能学会と名称が変わり研究範囲も少しずつ拡大してきましたが、一貫して基礎研究が盛んな学会であることは間違いないと思います。私が研究を始めた頃の排尿研究は欧米に比べて一歩遅れていた印象がありましたが、現在では AUA、EAU や ICS などの国際学会に参加すると日本発のレベルの高い基礎研究の演題数が大変多く、決して他国と比べても遜色ないと言えます。約 30 年前の排尿研究では「平滑筋自体」の研究が全盛の頃であり、各種受容体の尿路平滑筋の発現や機能解析などが盛んに行われていました。その後膀胱の血流や末梢（特に求心性）神経の重要性が確認され（私も多少貢献?!）、過活動膀胱との関わりが解明されてきました。その中で特筆すべきものは β_3 受容体の研究、特にヒト膀胱平滑筋での β_3 受容体の役割を本学会員が主体となり解明しました。 β_3 受容体刺激薬「ミラベグロン」を過活動膀胱治療薬として世界に先駆けて開発したことは記憶に新しいと思います。

今後の喫緊の課題として、末梢では低活動膀胱の病態解明と創薬、そして中枢神経系に作用する排尿治療薬の開発だと考えています。低活動膀胱は、いまだに国際的な定義が存在せず治療法も有効なものが少ないと思います。また、古くから下部尿路を支配しているのは中枢神経だと知られており、排尿に関する中枢神経の基礎研究は少しずつ進歩していますが、残念ながら創薬に結びついていないのが現状です。今後本学会の若手研究者が中心となって斬新なアイデアでこれらの難問を解決していただきたいと願っています。

私は医学部で長年教育を行ってきましたが、最近の傾向として医学博士（研究）よりも専門医・臨床医志向が顕著になっているように見えます。医学部入試において地域枠の導入により臨床義務年数を課されている医師が多く存在することは事実ですが、臨床現場で日々生じる疑問を解明することが研究です。研究を行うのに年齢は関係ありませんので、是非基礎研究でも臨床研究でも良いので「研究」を行ってください。将来の排尿研究、本学会の屋台骨を支えるのは若手の君たちです。

日本排尿機能学会 50 周年記念誌寄稿



名古屋市立大学医学研究科細胞生理学分野 教授
橋谷 光

日本排尿機能学会 50 周年を、会員の 1 人として心より喜び申し上げます。本学会には神経因性膀胱研究会であった 1992 年から参加しておりますが、同年の第 39 回大会は名古屋医師会会館の一室での開催であったと記憶しております。今日の学会の隆盛、規模は想像もできず、泌尿器科医だけでなく他の臨床科やパラメディックに会員を拡げてこられた歴代役員の、先見の明とご尽力の賜物と存じます。

私自身は、当初数回の臨床演題を除いては生理学の立場から演題発表しておりますが、基礎研究者の視点での本学会の大きな特徴として、質の高い基礎研究の要素が脈々と受け継がれ共有されていることが挙げられます。学術集会での質疑応答は、自身の研究内容をブラッシュアップして論文レベルまで高めることに大いに役立ち、また国内外の研究者との交流やその後の共同研究の機会をいただいて参りました。基礎と臨床の垣根が低いというよりも区別をすることに意味を感じない程に、多くの臨床科の会員が基礎研究に非常に熱心に取り組んでおられます。臨床医から基礎研究者に転じた後も、引き続き排尿（障害）を研究主題としている研究者が少なくないことにも、本学会および排尿研究の魅力が表現されていると思われます。

そのような本学会で基礎研究者が果たすべき役割を考えると、やはり各演題が論文として発表されることに少しでも論理的に貢献することであると考えます。本学会には学会賞が設けられており、多くの会員が ICS など国際学会で発表され、受賞もされております。しかし演題発表や抄録における研究内容の評価は限定的であり、研究成果は論文化されてさらには評価（引用）されることで完結します。昨今は資金獲得競争や業績評価の負の影響もあり、話題性を意識した研究や泡沫雑誌も少なくありません。会員におかれましては、発表後も長年にわたり引用されるような論文を、引き続き目指していただきたいと願っております。

基礎の立場から排尿機能学会 50 周年に思いを馳せて



琉球大学大学院医学研究科システム生理学講座
宮里 実

私が排尿機能学会（前身の神経因性膀胱学会）に入会したのは、1996 年の年に遡る。当時、泌尿器科医として駆け出しであったが、1993 年から 2 年間研修先であった東京の清瀬小児病院で二分脊椎に伴う小児神経因性膀胱に出会ったことがきっかけとなっている。不思議なことに、その時の上司（自治医科大こども医療センター 中井秀郎名誉教授）に連れられて第 42 回神経因性膀胱研究会に参加している。地道なウロダイナミクス検査がなぜか私の性に合った。後付かもしれないが、病態を考えながら検査に没頭できることに魅力を感じた。帰沖後、勤務した病院で整形外科での脊椎疾患術前後のウロダイナミクスの所見をまとめ第 3 回神経因性膀胱学会（京都）で初めて発表した。発表のことはよく覚えていないが、ニッチな排尿研究の専門家が集まり、基礎から臨床まで激論が交わされていたことを今でも鮮明に覚えている。その後、ルールが敷かれていたかのように、排尿基礎研究の道に進むことになった（当時琉球大学泌尿器科助教授であった菅谷公男先生）。アメリカ泌尿器科学会、国際尿禁制学会と訪れたい街を選びながら排尿研究に触れた（不純な動機ながらやりがいも感じた）。日本人の基礎研究者が世界の基礎研究を牽引していることも肌で感じ、まさに羨望の眼差しであった。反面、自身は学会に参加する度に非力を感じたものである。もっと世界も見てみたい、発信できる英語力を身に着けたいと、2006 年から 2008 年までピッツバーグ大学に留学することになった（吉村ラボ）。当時、吉村直樹先生、チャンセラー先生の 2 人の PI がおられ、de Groat 先生も現役であった時である。論文、教科書でしか見たことがない、Griffith 先生、Schafer 先生、Andersson 先生に内外のミーティングで直に会える機会はまさに夢心地であった。縁あって、2019 年から生理学講座の道に進んだが、排尿研究に携ってきた実績で、生理学、自律神経学、神経科学の教鞭を取ることができている裾野の広さには自らも驚いている。最近の排尿機能学会は、神経疾患に伴う神経因性膀胱に限らず、さまざまな泌尿器科疾患、フレイル、認知に伴う排尿障害とさらに裾野は広がり、多分野、多職種の学会となっている。排尿研究を志した若かりし頃はニッチに惹かれたが、多層化されたこの現状は、排尿が陽のあたる場所になったことと歓迎している。現状を誇らしく思うと同時に、反面、排尿の基礎研究を志す若手が減ってきていることは危惧している。この 50 年で培ってきた排尿機能学会の発展は、日本の最先端の排尿基礎研究が礎になっていることは間違いない。次なる 50 年に向け、排尿基礎研究を先導する担い手になることを誓いつつ、排尿機能学会が私達基礎研究者の伴走者であることを切に願う。排尿しない人間はいないのだから。この度の 50 周年誠におめでとうございます。

排尿機能学会 50 周年 基礎研究者として



名古屋市立大学
窪田 泰江

私は名古屋市立大学を卒業し、すぐに泌尿器科に入局しました。研修医の頃から身近に色々な研究グループの先生がおり、「実験の手伝いしてくれない？」と声がかかることも多くありました。そんな中、印象に残っているのが宇宙空間での生殖に関する実験です。実際に疑似的な宇宙空間を作る航空機にみなで乗り、無重力空間を経験したことは印象的で、よく覚えています。

その後、出産したことがきっかけとなり、大学の基礎医学教室での研究時間をいただきました。すでに泌尿器科の先輩女性医師が育児をしながら研究されており、私のロールモデルとなりました。消化管平滑筋の研究をされていた鈴木光教授のもとで、最初はモルモットの胃を使って細胞内電位記録法を学びました。その後は精嚢や膀胱組織を使用して実験を行い、鈴木先生の後任となられた橋谷光先生にもご指導いただきました。2人目を出産して半年後に学位審査を受けましたが、周囲の支えがあってなんとか乗り切れたと思っています。当時オックスフォード大学薬理学教室に留学されていた橋谷先生が帰国する際、膀胱平滑筋研究の第一人者であった Brading 教授のラボに入れ替わりで留学しないか？というお話をいただき、当時2歳と0歳児を連れて家族でイギリスに留学するという経験もしました。保育園代を含めた留学費用はかなり高額で、大変でしたが、当時一緒に留学をしていた台湾の泌尿器科医やトルコの薬理学研究者とはいまだに交流がありますし、現在は国際医療福祉大学福岡薬学部教授となられた梶岡先生にもお世話になりました。イギリスでの最先端の研究のみならず、医療制度や3人目の妊娠中は海外での妊婦健診を経験する良い機会にもなりました。

帰国後はまた大学に戻りましたが、基礎研究のみというわけにいかず、以後は臨床応用や臨床研究を考えるようになりました。こんな私が基礎研究者として…ということで寄稿するのがお恥ずかしい限りですが、基礎研究をしてきたから見えた色々な世界があり、それは私の礎になっています。さらなる本学会の発展に少しでも貢献できれば幸いです。

日本排尿機能学会 50 周年を祝して



三井記念病院産婦人科
中田 真木

私は 1991 ～ 93 年にフランス政府給費留学生としてパリ第 6 大学産婦人科学教室と関連のパリ市病院施設で腔式手術と骨盤底機能障害を研修した。2 年間の研修の終わる頃、手術については一定の達成感があったものの、神経泌尿器科学や電気生理学などやや複雑な分野は依然として未消化だった。そこで私は、帰国後さっそく神経因性膀胱研究会に入会を願い出た。

渡航の前に旧知の先輩泌尿器科医が同窓の大先輩の河邊香月先生に引き合わせてくださっていたのが、この学会への最初のご縁であった。このご縁はその後、女性骨盤底医学会などでも大いにお世話になった山口脩先生や、コンチネンス関係者と合同勉強会を始めた本間之夫先生へと広がって行く。そして時代は新世紀を迎え、会の名称は日本排尿機能学会（JCS）に刷新された。

JCS は国際禁制学会（ICS）とは異なり、泌尿器科医らがほぼ全体をコントロールする専門性の高い学会組織である。山口脩先生とアフターファイブに「コンチネンスに対峙するのであれば女性の場合婦人科医の参入なしには前進は難しいのでは」というようなおしゃべりをしたことがあるが、最近は泌尿器科でも骨盤臓器脱の診療が一定量行われるようになっており、女性のコンチネンスを追究する泌尿器科医らの熱意と取り組みに敬服するばかりである。

産婦人科医も女性下部尿路の医療にもっと注力すべきとは思いますが、JCS の発展という観点からは、婦人科医との合同という課題はさほど重要ではないだろう。学術集会においては学問的にわくわくするコンテンツを探求し、臨床医学の本来の方向性に沿う話題を増やしていけばよいのではないかと感じている。

3人寄れば文殊の知恵

原三信病院脳神経内科
藤木富士夫

排尿機能学会は、半世紀前の神経因性膀胱研究会に始まり、神経因性膀胱学会を経て今日まで発展してきた。遡ること20数年前「神経疾患による排尿障害ハンドブック」を片手に泌尿器科の先生と症例検討していた駆け出しの頃、すでに多くの先人はこうした研究会や学会活動を通して初学者向けの執筆活動など社会貢献をしていたのだと、改めてその歴史の重みに畏敬の念を覚えてしまう。

この半世紀の間に、日本は未曾有の超高齢化社会を迎えた。痴呆症を認知症と改め、後期高齢者やフレイルなど馴染みのなかった言葉に違和感がなくなり、同じように下部尿路症状（LUTS）、過活動膀胱（OAB）という言葉にも慣れてきた感がある。高齢化と比例するように増加した排泄トラブル、本人だけでなく介護者の負担が大きいのしかかる。この病態解明や新たな治療法開発など排尿機能学会の貢献は大きく、その学術的な進歩は目を見張るものがある。また、診療科の垣根を超えた連携のみならず、看護や介護にかかわる多職種の連携にも大きく貢献し、患者さんやその家族の目線に立った具体的で実践的な取り組みにも携わってきた。脳神経内科医は、認知症やパーキンソン病などの変性疾患、脳血管障害、脊髄疾患、末梢神経障害などと下部尿路機能障害の病態関与や治療上の留意点を多職種と共有し、時には家族や地域住民の教育などにもかかわってきた。

下部尿路機能障害は、単一の治療法で解決することが難しい複雑な病態である。ゆえに全人的な観点からさまざまな専門分野の知識を持ち寄り、連携して最適な治療を提供することが重要となる。この50周年を機に、脳神経内科医や泌尿器科医のみならず、これまで以上に多くの内科医、心療内科医や精神科医、睡眠を専門とする医師、婦人科医、外科医などの参加を募り、その成果がさらなる医療の進歩につながり、患者の健康と生活の質の向上に寄与することと期待したい。

看護師

日本排尿機能学会 50 周年に寄せて 看護師として



コンチネンス・ジャパン
西村かおる

1986 年、私は 4 年間の訪問看護経験後、英国で制度化されていた訪問看護コースを学びました。そこで、コンチネンスアドバイザーの存在を知り、訪問看護コース終了後、コンチネンスアドバイザーコースを履修するとともに、地域、施設、病院といった特徴的なコンチネンスアドバイザーについて実地研修を積みしました。その間 1987 年に Bristol で開催された International Continence Society に初めて参加し、日本からの先生方にお目にかかりましたが、全員が神経因性膀胱研究会会員でした。当時の私は下部尿路だけでなく日本の実情も、まったく理解していませんでしたが、先生方はとても親切に色々と教えてくださいました。そして翌年のオスロでの ICS で近藤厚生先生、福井準之助先生をはじめとする先生方がお集まりくださり、私の帰国後の活動を検討してくださいました。そして故・宮崎一興先生にご紹介くださり、今日の私だけではなく、NPO 法人日本コンチネンス協会の礎となりました。先生方は「この分野には専門ナースが絶対に必要だし、排尿ケアの重要性を社会に訴えていく必要がある」という信念で、私の活動を支援してくださいさり、それは神経因性膀胱研究会の志の 1 つなのだろうと思いました。今もご支援に心からの感謝でいっぱいです。

帰国後、神経因性膀胱研究会、神経因性膀胱学会に参加し、2016 ～ 2020 年には、当時排尿機能学会の理事長でいらした横山修先生のお声かけで理事も務めさせていただきました。研究会、神経因性膀胱学会の頃の参加者は熱心な泌尿器科の医師ばかりで、看護師に会うことはなく、場違いな自分を意識しました。しかし、徐々に看護師だけでなく、リハビリ職の参加、演題発表が増えてきて、広がりを感じていますが、まだ医師が大半です。また神経因性膀胱は排便障害を伴うことも多く、今後は排便領域も含め、更なる多職種の参加により発展して欲しいと願っております。

日本排尿機能学会 50 周年に看護師として思うこと



愛知医科大学看護学部老年看護学
横山 剛志

日本排尿機能学会 50 周年、誠におめでとうございます。本学会の多くの諸先輩方による排尿機能に関する基礎・臨床研究を推進し、発展してきたことに深い敬意を表します。

私が本学会の会員になった頃（2009 年）は、看護師の会員は現在のように多くなく、学会での研究発表もまばらだったと記憶しています。ただし、排尿機能検査士制度（2004 年）が発足したこともあってか、年々看護師の参加や研究発表が増えているのを感じていました。2016 年の排尿自立指導料（現・排尿自立支援加算、外来排尿自立指導料）の新規保険収載後は、これまで以上に本学会での看護師の存在が大きくなったと感じています。また、排尿自立支援のエビデンス構築、啓発活動には本学会の看護師も大きく貢献しており、今後の期待も大きいものと思います。

看護師の学会への参加が増えた要因として考えられる排尿機能検査士制度の発足や排尿自立指導料の保険収載に関しては、本学会の先生方の多大なるご尽力があったことは言うまでもありません。排尿機能を専門とする看護師の 1 人として、感謝の念に堪えません。

私事ですが、2018 年の第 25 回日本排尿機能学会（会長：吉田正貴先生）では、事務局を担当するという貴重な経験もさせていただきました。プログラムの作成において、下部尿路機能障害に対するケアのシンポジウムや看護師が参加しやすいようなプログラム構成等の検討や工夫をしました。結果として、看護師を含めたコメディカルからの研究発表も多く、活発な討議がなされました。

今後、下部尿路症状に対する治療へのニーズはさらに増すことが予測されます。超高齢社会における下部尿路機能障害のケア・治療の先導者として、本学会が大きな役割を果たし、今後の益々の発展と充実を祈っております。

理学療法士

日本排尿機能学会創立 50 周年に寄せて —理学療法士の立場から—



名古屋大学大学院医学系研究科総合保健学専攻
予防・リハビリテーション科学
井上 倫恵

日本排尿機能学会創立 50 周年、誠におめでとうございます。

初めて学会に参加させていただいた当時はまだ大学院生で、医師・看護師などの多職種が集まる歴史ある学会での発表は、非常に緊張したことを覚えています。発表終了後に座長の巴ひかる先生が論文化をお薦めくださったことは、私にとって、忘れられない大切な思い出です。

あれから十数年が経ち、日本における「排尿」と「理学療法」を取り巻く状況は一変しています。尿失禁に対する骨盤底筋トレーニング（pelvic floor muscle training：PFMT）は、診療ガイドラインで推奨グレード A とされつつも、本邦では診療報酬の適用となっておらず臨床現場で実践することは困難でした。しかし近年では、自費診療として PFMT 指導を行う医療機関が増え、グローバルスタンダードに近づきつつあるように感じています。さらに、平成 28 年度の診療報酬改定で排尿自立指導料が新設されて以降は、排尿ケアチームの一員として他職種と協働し、包括的な排尿ケアに携わる理学療法士が飛躍的に増加しています。このような状況の変化から、PFMT ハンズオンセミナーの継続やセラピスト向け e-learning による教育の充実、ジョイントセッションの企画などが期待されます。

海外ではこの分野に理学療法士が積極的に参画しており、International Continence Society（ICS）に参加すると、そのプレゼンスに圧倒されます。ICS のシンポジウムで「この症例に必要な治療は何か？」と投げかけられると、会場内から「Physio（理学療法）！」の声と大きな拍手。この出来事に、私は衝撃を受けるとともに、嬉しく誇らしい気持ちにもなりました。今後も日本排尿機能学会が多職種に開かれた学会であり続け、いつか日本でもこのような場面を見られる日が来ることを願い、研究成果を発信し続けていきたいと思っています。

日本排尿機能学会において作業療法士が果たした役割 ―作業療法士も『排尿ケアの一翼を担う職種』へ―



新潟医療福祉大学リハビリテーション学部作業療学科
今西 里佳

このたびは、日本排尿機能学会創立 50 周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。今回、日本排尿機能学会において、作業療法士（以下、OT）が果たした役割を述べさせていただきます。

1. 学術集会での演題発表

私は 1992 年から、OT 担当初日に下部尿路症状の有無を把握し、医師及び看護師と行動療法を計画し、その実践と排泄動作練習を行う OT 主導の排尿自立支援を実践してきました。2004 年、大学院生になると同時に本学会に入会し、2005 年から泌尿器科学分野で研究を開始し、2007 年から本学術集会と ICS で演題発表を開始いたしました。その頃、OT の姿は見えませんでした。20 年が経過した今、OT の参加や演題が増えていきます。

2. 学術集会シンポジウムでの OT の役割解説

排尿自立指導料算定のための排尿ケアチームに OT が職名追記されるよう、私は日本作業療法士協会会長・副会長と共に厚生労働省へ要望活動を行い、2017 年春、OT も排尿ケアチームのメンバーとして認められました。その後、シンポジウムにて、数名の OT が排尿ケアチーム内での役割を解説してきました。現在、各施設の排尿ケアチームで活躍する OT が増えています。

3. 教育関連

近年、教育セミナーにおいて、OT が登壇する機会が増えています。直近 10 年で 5 名の OT が発表の機会を得ました。一步一步、OT も『排尿ケアの一翼を担う職種』として認められつつあると感じています。2022 年、JCS 教育ビデオ集で「排尿自立支援における作業療法」が公開されました。同年、私は学術集会の JCS 専門医セミナーで「下部尿路機能障害に対する行動療法」を解説させていただきました。

4. 委員会活動

私は 2021 年からダイバーシティ推進委員として活動をさせていただいています。現在、本学会の代議員の 98% が医師です。今後、代議員に非医師枠を設定していただければ、と期待しています。

本学会のさらなるご発展をお祈り申し上げます。

日本排尿機能学会の主要な事業

過活動膀胱診療ガイドライン第3版 2022



作成委員会 委員長、山梨大学医学部 名誉教授(泌尿器科学講座)
武田 正之

1. 過活動膀胱診療ガイドライン第2版 2015 から第3版 2022 への経緯

過活動膀胱診療ガイドライン第2版 2015（作成委員長 武田正之）¹⁾の刊行以降に新たな薬剤や薬物併用療法に関する多くのエビデンスが蓄積され、難治性過活動膀胱に対する新規治療法としての「ボツリヌス毒素膀胱壁内注入療法」や「仙骨神経刺激療法」が健康保険適用となりました。また、フレイル・認知機能低下との関連で過活動膀胱診療を見直す必要性も増してきました。このような背景から、2022年9月に過活動膀胱診療ガイドライン改訂第3版が刊行されることとなりました²⁾。改定の主なポイントは以下の通りです。

2. 主な修正内容

- 1) 基礎知識と新しい用語基準:最新の ICS 用語基準³⁾と日本排尿機能学会標準用語集第1版⁴⁾に準拠しました。そのため、過去に発刊された前述の下部尿路症状に関する診療ガイドライン^{1, 5~8)}で使用されている用語と一部異なる場合があります。
- 2) 診療アルゴリズム
 - ①一般医向けアルゴリズムの改定:感染症治療内容を詳述しました。
 - ②専門医向けアルゴリズムの改定:女性骨盤底障害の鑑別経路を追加しました。
 - ③小児用のアルゴリズム:初めて小児用のアルゴリズムを作成しました。
- 3) クリニカル・クエスチョン (CQ):合計 52 個を作成し、そのうち 31 個は新規の内容です。

3. 主な新規の作成内容

- 1) 過活動膀胱とフレイル・認知機能低下の関係
 - ①第1章「過活動膀胱とフレイル・認知機能低下の関係」を新設。
 - ②フレイルのスクリーニング検査:「フレイル高齢者・認知機能低下高齢者の下部尿路機能障害に対する診療ガイドライン 2021」⁹⁾、日本語版フレイル基準¹⁰⁾、簡易フレイル インデックス^{11, 12)}、など。
 - ③フレイル評価と関連する基本チェックリスト¹³⁾
基本チェックリスト¹³⁾は厚生労働省により作成され、介護予防把握事業の一部として導入されたチェック票です。
 - ④認知症のスクリーニング検査:日本老年医学会によるものです。
 - ⑤第3章「一般医家向け診療アルゴリズム」「専門医向け診療アルゴリズム」に「高度なフレイル、高度な認知症」を追記しました。
 - ⑥第7章「診断」に、「フレイル患者、認知症患者のスクリーニング検査」を追加しました。
- 2) 高齢過活動膀胱患者に対する治療
第8章「治療」に、「7 高齢過活動膀胱患者に対する治療」を新設しました。

3) 低活動膀胱に伴う過活動膀胱

第9章「低活動膀胱に伴う過活動膀胱」を新設しました。

排尿筋低活動の診断のために、内圧尿流検査を行わない臨床的診断基準^{14, 15)}が提唱されていますが、あくまで参考です。

文献

1. 過活動膀胱診療ガイドライン[第2版]。リッチヒルメディカル、2015。
2. 過活動膀胱診療ガイドライン[第3版]。リッチヒルメディカル、2022。
3. ICS Standards 2022. International Continence Society (ICS).
4. 日本排尿機能学会標準用語集 第1版。中外医学社、2020
5. 男性下部尿路症状・前立腺肥大症診療ガイドライン。リッチヒルメディカル、2017。
6. 女性下部尿路症状診療ガイドライン[第2版]。リッチヒルメディカル、2019。
7. 間質性膀胱炎・膀胱痛症候群診療ガイドライン。リッチヒルメディカル、2019。
8. 夜間頻尿診療ガイドライン[第2版]。リッチヒルメディカル、2020。
9. フレイル高齢者・認知機能低下高齢者の下部尿路機能障害に対する診療ガイドライン 2021。ライフサイエンス出版、2021
10. The revised Japanese version of the Cardiovascular Health Study criteria(revised J-CHS criteria). Geriatr Gerontol Int 2020; 20: 992 – 993
11. 介護予防ガイド。平成30年度老人保健事業推進費等補助金(老人保健健康増進等事業)「介護予防の取り組みによる社会保障費抑制効果の検証および科学的根拠と経験を融合させた介護予防ガイドの作成」。2019 <https://www.ncgg.go.jp/ri/topics/documents/cgssl.pdf>
12. Predictive value of frailty scores for healthy life expectancy in community-dwelling older Japanese adults. J Am Med Dir Assoc 2015; 16: 1002.e7 – e11
13. 老年医学の展望。基本チェックリストとフレイル。日老医誌 2018; 55: 319 – 328
14. UAB コアワーキンググループ。日本排尿機能学会 UAB コアワーキンググループ報告書。日排尿機能会誌、30: 407 – 411、2019。
15. A report from the Japanese Continence Society working group on underactive bladder, Low Urin Tract Symptoms,13(1):13-16, 2021.

過活動膀胱症状スコア (OABSS) 作成



日本赤十字社医療センター 名誉院長
本間 之夫

国際標準とされる症状質問票は主に英米で作成されています。例えば IPSS は、AUA からの提案が 1999 年の Monaco の BPH 会議で国際標準の質問票として認定されました。その認定を受けて、日本語版の妥当性の検証作業が JUA の認定の下で行われ（日泌尿会誌 2002; 93: 669-680）、日本で使用されているわけです。同様に OAB の質問票も英米から提示されると予想されました。

ところが、その提案がありません。彼らは排尿記録で効果を測定し質問票の必要性を感じなかったようです。しかし、JCS 主導で OAB 診療ガイドライン（GL）を作成するにあたり、日常診療で使用する質問票がやはり必要と考えられました。そこで開発されたのが 4 項目の簡便な OABSS です。

OABSS の作成過程は原著（Urology 2006; 68: 318-323）を参照ください（先行した疫学研究の資料が極めて有用でした）。完成後には各国から翻訳の申し込みがありました。中国、台湾、韓国、インドネシア、タイ、インド（ベンガル語）、トルコなどです。翻訳に便利のように米語での標準版も作成しました（IJU 2014; 21: 229）。ただし、欧米からはスペインだけです。どこか抵抗感があるのでしょうか。

遅まきながら最近、EAU が中心となって OAB の質問票（OAB-BAT）を開発しました（Eur Urol Focus 2021; 7: 1176-1183.）。また余談ですが、OABSS の発表とほぼ同時に米国から同名の（しかし、内容は異なる）質問票が発表されています。この件は、著者から日本発の OABSS の方が先行していることを認めていただいております。

「夜間頻尿診療ガイドライン 第2版」の改訂にかかわって



夜間頻尿診療ガイドライン作成委員会 委員長
桜十字病院泌尿器科
吉田 正貴

夜間頻尿は多くの高齢者を悩ませる代表的な下部尿路症状で、加齢とともに増加し、生活の質（QOL）の低下に強く関与しています。初版の夜間頻尿診療ガイドラインは2009年に刊行されていたので、10年以上が経過していました。その間に新しいエビデンスの構築や治療薬の開発が行われ、夜間頻尿診療が変化してきました。そのような中、改訂により、実臨床に沿ったより適切な夜間頻尿の診療の指針の提示とその普及に貢献することを目指しました。改訂には多くの先生方にご協力をいただき、2020年5月に発刊されました。

本ガイドラインの主な改訂のポイントは次の5点です。

①第1版では1つだった診療アルゴリズムを「泌尿器科専門医向け」と「一般医向け」に分けた。②泌尿器科専門医向けのアルゴリズムでは、排尿日誌の重要性を強調するために、これを必須基本評価項目に設定し、多尿、夜間多尿の有無と膀胱蓄尿障害の有無を最初に鑑別することとした。③夜間頻尿に関する解説文に加えて、第1版にはなかった29個のClinical questionを設け、より実用的なものとした。さまざまな専門医への紹介の目安などについての項目も加えた。④治療においては行動療法の重要性を考慮して、高い推奨グレードをつけた。⑤男性の夜間多尿に伴う新規夜間頻尿改善薬（デスマプレシン）の使用の位置づけに配慮した。

本邦からも多くのエビデンスが本ガイドラインに引用されていますが、特に推奨グレードの設定などに影響をおよぼしたものとして、下記のものがありました。

- ・ Nakagawa H et al. J Urol 2010; 184: 1413-1418: 夜間頻尿と死亡率との関係についての縦断的研究。
- ・ Matsuo T et al. Int J Urol 2017; 24: 384- 389: 夜間頻尿と塩分制限の関係を明らかにした研究
- ・ Yamaguchi O et al. Low Urin Tract Symptoms 2020; 12: 8-19: 本邦におけるデスマプレシンの有用性を検証した研究。

夜間頻尿の実地診療は難しい側面も多く、いろいろとご意見もあろうかと思いますが、今後も定期的な改訂を行っていく予定です。

女性下部尿路症状診療ガイドライン初版・第2版を刊行して



女性下部尿路症状診療ガイドライン作成委員会 委員長
高橋 悟

女性下部尿路症状 診療ガイドライン初版は、2013 年 11 月 15 日に刊行され、女性下部尿路症状診療を包括的に扱ったガイドラインとしては世界初の画期的なものでした。本ガイドラインの対象患者はなんらかの下部尿路症状を訴える成人女性としました。利用者としては、泌尿器科医師を中心に、広く下部尿路症状を訴える患者の診療に携わる医師・看護師・保健師などの医療従事者を想定しました。したがって、本文の記述は日本泌尿器科学会認定専門医（専門医）を含む医師のレベルとする一方、「初期診療」と「専門的診療」のための2つの診療アルゴリズムを収載しました。

女性下部尿路症状の特徴は、腹圧性尿失禁、切迫性尿失禁、混合性尿失禁、頻尿といった蓄尿症状が主体であると同時に、排尿・排尿後症状も少なくないことがあげられます。また尿路感染症、間質性膀胱炎、骨盤臓器脱に伴う症状も重要であり、これらを網羅したガイドラインとしました。手前味噌ですが、本ガイドラインは本邦の女性下部尿路症状診療の普及・標準化に貢献したと考えています。また世界初のガイドラインとして、英文ダイジェスト版が LUTS 誌に掲載されました（Takahashi S, et al, low urin tract symptoms 8 : 5-29, 2016）。

女性下部尿路症状診療ガイドライン第2版は、初版を基に5年ぶりに内容を改訂し、2019 年 9 月 30 日に刊行されました。第2版は新しい病態の知見、診断方法、治療法を掲載するとともに、新しい症状症候群である Genitourinary syndrome of menopause (GSM) を紹介しました (P62)。また骨盤臓器脱に対する経膈メッシュ手術への FDA 警告や海外の情勢、本邦での状況を紹介するとともに、TVT・TOT などの尿道スリング手術への影響と最新のエビデンスを提示しました (CQ22, P45)。英文ダイジェスト版は、IJU 誌に掲載されました (Takahashi S, et al, Int J Urol doi:10.1111/iju.14492, 2021)。

今後も本ガイドラインが国内外で利用され、女性下部尿路症状診療の普及・標準化に貢献できれば幸いです。

脊髄損傷における下部尿路機能障害の診療ガイドラインの歴史と今後の展望



脊髄損傷における下部尿路機能障害の診療ガイドライン[2019年版]作成委員会 委員長
関戸 哲利

本ガイドラインの初版は、2005年8月30日に発刊された「過活動膀胱診療ガイドライン」（非売品）に収載された10ページ弱の付録「慢性期脊髄損傷における排尿障害の診療ガイドライン」です。その後、2011年9月15日に112ページからなる「脊髄損傷における排尿障害の診療ガイドライン」が、単独の冊子として刊行されました。こちらは作成委員会委員長を務められた総合せき損センター泌尿器科部長（当時）木元康介先生のリーダーシップの下、2名の脊髄障害の方、Minds部長（当時）吉田雅博氏、リハビリテーション科医師、看護師を外部委員に加え、全編が44のCQのみで構成される（総論的解説部分なし）、当時としては画期的なガイドラインでした。その後、小職が委員長を務めさせていただき、2019年7月25日に219ページからなる「脊髄損傷における下部尿路機能障害の診療ガイドライン [2019年版]」が刊行されました（発刊後にIJUでサマリーを出版、2020年と2023年にアップデート内容をJUA/JCSホームページで公開）。重要臨床課題、重大および重要なアウトカムを明示し、“尿路合併症の防止、（社会的）尿禁制の獲得、生活の質の改善を主な診療アウトカム”として改訂するという方針をアルゴリズムにも反映させ、さらに、医療経済的な問題に配慮し、“脊髄損傷の診療におけるコストベネフィット”に関するセクションも設けました。ガイドラインの構成としては、ある程度教科書的な記載があった方が良いという作成委員の意見が多く、総論的解説と21のCQとの折衷様式となっております。なお、評価委員には、泌尿器科医以外に、2名の脊髄障害の方、脊髄外科、脳神経内科、リハビリテーション科の医師、看護師を加えています。Mindsの評価も受審していますが、「作成の厳密さ」などの分野でやや厳しい評価を受けました。「バックグラウンドクエスチョンは総論部分にまとめ、CQ・推奨と区別する方が良いでしょう」などのコメントは次回に生かしていただければと思います。

外傷性／非外傷性脊髄損傷に特化した下部尿路機能障害の診療ガイドラインは国際的にも少ないので、その点で、本ガイドラインは貴重なものと考えられます。一方、AUAやEAUは神経因性下部尿路機能障害全般に対する診療ガイドラインを作成しています。1つのガイドライン作成に要する労力が年々過大になっていきますので、神経因性下部尿路機能障害分野のガイドラインに関して、本ガイドラインの次回改訂を契機としてJCSとしての方向性を検討する時期に来ているようにも思います。いずれにしても、今後ともJCS会員の皆様の叡智が結集された、この分野のガイドラインが継続的に発刊されることを祈念しております。



ガイドライン初版
(2005年版)の
冊子の表紙



ガイドライン初版
(2005年版)の
中表紙



2011年版の表紙



2019年版の表紙

二分脊椎に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン[2017 年版]の発刊を振り返って



同診療ガイドライン作成委員長，長野県立信州医療センター泌尿器科
井川 靖彦

二分脊椎は、小児における神経因性下部尿路機能障害（NLUTD）の代表的な基礎疾患である。脊髄髄膜瘤を代表とする開放性二分脊椎の患児は、その 90% 以上が NLUTD をきたし、腎機能障害や症候性尿路感染を合併しやすいため、新生児期・乳児期からの適切な尿路管理を必要とする。他方、閉鎖性（潜在性）二分脊椎では脊髄脂肪腫等による低位脊髄円錐が確認される場合には、NLUTD をきたすリスクが高いため、開放性二分脊椎の患児に準じて、NLUTD の評価とそれに基づく尿路管理が必要となる。このような背景を踏まえて、本ガイドラインは、二分脊椎に伴う NLUTD の診断と治療に関する標準的指針を提供することを目的として、日本排尿機能学会（JCS）と日本泌尿器科学会（JUA）が共同編集したものである。作成したガイドラインの評価は、これら 2 学会に加えて、日本脊髄障害医学会並びに日本小児泌尿器科学会の協力を仰いで最終化した。本ガイドラインは、2005 年に JCS が編集し、JUA の推薦を受けて発刊された「二分脊椎症に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン」の改訂版に相当する。作成委員会（五十音順）は、井川靖彦、柿崎秀宏、木元康介、後藤百万、関戸哲利、武田正之、中井秀郎、浪間孝重、野口 満、三井貴彦、百瀬 均、山崎雄一郎、山西友典、横山 修の 14 名で構成された。

今回の改訂版では、臨床重要課題として、①腎機能の保時、②症候性尿路感染の防止、③尿禁制の獲得の 3 つをあげ、これらを解決するための診療指針を、診療アルゴリズム、基礎知識（疫学、病態、診断、治療）、クリニカル・クエスチョン（CQ）（CQ1～18）の 3 部構成として提示した。さらに、診療アルゴリズムは、前述の患者背景を踏まえて、新生児期・乳児期に診断された二分脊椎患児と晩期に発見された閉鎖性（潜在性）二分脊椎患者に大別して提示している。発刊から 6 年が経過し、近く、改訂が望まれるところである。

パーキンソン病における下部尿路機能障害診療ガイドライン

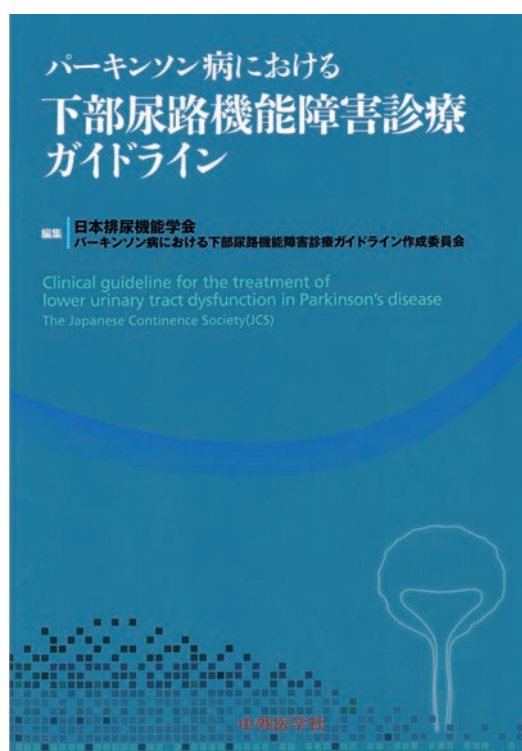


編集：日本排尿機能学会 パーキンソン病における下部尿路機能障害診療ガイドライン作成委員会
発刊 2017 年 4 月 中外医学社

医療法人同和会 顧問
脳神経内科津田沼，同和会千葉病院
榊原 隆次

日本排尿機能学会（JCS）では、横断的なガイドライン（GL）として、過活動膀胱診療 GL、男性下部尿路症状診療 GL、女性下部尿路症状診療 GL 等が作成されています。一方、個別のガイドラインとして、（脊髄）脊髄損傷における排尿障害の診療 GL、（脊髄下部）二分脊椎症に伴う下部尿路機能障害の診療 GL が作成され、広く利用されてきました。パーキンソン病における下部尿路機能障害 GL は、本邦で初めての、脳疾患による下部尿路機能障害 GL として、2013 年に JCS 内に委員会が立ち上がり、2017 年に発刊されました。

本 GL は、下部尿路機能障害で悩むパーキンソン病（PD）患者の治療について、2つのアルゴリズムと 13 のクリニカル・クエスチョンで、泌尿器科医・神経内科医他に有用な情報を提供するとともに、PD の下部尿路機能障害 LUTD に関する総論的な事項を紹介するものです。この中で、PD 患者の LUTD の頻度や機序・合併症、PD 治療薬であるドパミンの下部尿路機能に対する影響、PD の LUTD で選ぶと良い治療薬とケアについて、分かりやすく示されています。国際的には、国際禁制学会 ICS から「A guideline for the management of bladder dysfunction in Parkinson's disease and other gait disorders」（2016 年）が発刊され、その内容が上記 GL にも反映されています。日本発のエビデンスとしては、中枢ドパミン・PD と LUTD の基礎・臨床研究が両 GL に反映されました（Araki I 他 . 2000, Ogawa T, Sakakibara R, Ishizuka O, Kitta T, Yoshimura N 他 . 2017）。今後、脳卒中・認知症などについても、GL 作成とケアが発展するものと思います。



ワーキンググループ

「低活動膀胱に関するコアワーキンググループ」の軌跡



低活動膀胱に関するコアワーキンググループ 委員長
桜十字病院泌尿器科
吉田 正貴

経緯：これまで、排尿筋低活動（Detrusor underactivity：DU）や低活動膀胱（Underactive Bladder：UAB）には多くの関心が寄せられていますが、定義があいまいなため、正確な疫学調査もなされておらず、薬剤治験も進んでいません。故）山口脩先生が日本からこの疾患概念を作り上げ、それを世界に発信していこうとご提案され、第 25 回日本排尿機能学会で「低活動膀胱（UAB）：新しい疾患概念へのチャレンジ」というシンポジウムを企画しました。学会後この趣旨に沿ったコアワーキンググループを排尿機能学会で立ち上げていただき（メンバーは山口脩、関戸哲利、松川宜久、米納 誠の先生方と吉田正貴）、内圧尿流検査を行わない「排尿筋低活動診断の非侵襲的アプローチ」の提言の作成に取り組みました。

作業経過：UAB については国際禁制学会（ICS）ですでに定義が作成されていたため、UAB の背景にあるとされる DU の診断基準の作成を目指しました。これまで DU は内圧尿流検査を行って診断するとされていましたが、ワーキンググループのミッションはこの侵襲的検査を行わない診断基準を作成することでした。各メンバーで DU/UAB にかかわる論文の検索を行い、会議を重ねて報告書として「DU の臨床的診断基準」を日本排尿機能学会誌（日排尿会誌、30（2），2019：407-411）に発表しました。さらに国際的発信を目的として、Special report として LUTS 誌に公表されました（Low Urin Tract Symptoms. 2021;13（1）：13-16.）

診断基準と今後：提案した診断基準は次です。① ICS で定義されている UAB 症候群の症状がある。② PVR の増加（>100 mL）、排尿効率の低下（<90%）、Qmax の低下（<12 mL/sec）を伴う。③男性では前立腺腫大がない（<30 mL）および有意な IPP がない（<10 mm）。④女性では有意な骨盤臓器脱を除外できる。

この診断基準はあくまで文献的考察から導き出されたものであり、まだ妥当性が検討されてはいません。これまでこの基準の妥当性を示唆しているいくつかの報告がありますが、現在この基準の妥当性を検証する前向き臨床試験が進行中であり、その結果が期待されます。

排尿に関する疫学的研究



日本赤十字社医療センター 名誉院長
本間 之夫

本研究は本邦初の本格的な排尿に関する疫学研究で、疫学の専門家を含む10名からなる委員会をJCSに特設して2002年から2003年にかけて実施しました。その時期はOveractive bladder (OAB) 旋風が吹いており、OABの罹患率を知るのも大きな目的でした。某製薬会社からの資金援助もありました。

調査対象者は40歳以上の10,096名で、うち4,570名が解析対象となりました（応答率45%はかなり高い）。対象者の選定は、調査地域を地域別・人口規模別に2段階で無作為に抽出し、さらにその地域の住民台帳を閲覧して住民を無作為抽出しました。実務では、その地域の役所に出向いて台帳から住所と氏名を抜き書きし（コピー不可）、そこへ調査票を郵送し回収して集計するというものです。このような人海戦術的な方法は二度と実施できないでしょう。

主な結果としては、9個の症状の頻度、尿失禁の種類別・重症度別の頻度、最も影響のあった症状の頻度が、各年代層で明らかとなりました。有症状者の受診率や受診しない理由も分かりました。OAB関連では、OABの有病率は全体で12.4%、日本における推定患者数810万人という数字でした。OABwetは6.4%、430万人、OABdryは6.0%、380万人となりました。いずれも加齢とともに頻度は上昇しました。これらの結果は海外の報告とほぼ同様でした（日排尿会誌2003;14: 1-12, Urology 2006; 68: 560-4）。

総じて予想した通りであり、新規性という観点では平凡な研究でした。しかし、具体的な数字が示されたこと、その数字の信頼性が高いことは重要でした。学術集会での注目や論文の引用だけでなく、マスコミや多くの媒体に広く取り上げられました。OABが国民病の1つとして認識され、併せて排尿障害の重要性を認識してもらう機会ともなりました。

本邦における下部尿路症状に関する疫学調査



疫学調査実行委員会 委員長
三井 貴彦

日本排尿機能学会の歴史の中で、社会的な貢献の1つとして下部尿路症状に関する疫学調査の実施とその結果をもとにした「下部尿路症状」という概念の普及があげられます。2002年当時、本邦における下部尿路症状の実態に関する正確な疫学情報が十分でなかったこともあり、日本排尿機能学会の下部組織として本間之夫先生を委員長とした10名で構成される「排尿に関する疫学調査委員会」が組織されました。無作為に抽出された全国の40歳以上の男女10,096名を対象に郵送法で調査が行われ、2003年には回答が有効であった4,570通に対して解析が行われています。この結果につきましては、本学会の学会誌をはじめ、BJU Int (Homma, et al. 2005)、Urology (Homma, et al. 2006) に報告されていますので、過活動膀胱をはじめとする下部尿路症状の重要な実態として広く知られ、さらに下部尿路症状の診療を行う上で大きく貢献しています。

その一方で、その後日本全体を対象とした学会主導の下部尿路症状に関する疫学調査が行われていなかったこともあり、高齢化が進んだ本邦における下部尿路症状の現状や20年間の変化を調査する必要性がありました。そのため、本学会の50周年記念イベントの1つとして、10名の委員で構成される疫学調査実行委員会を立ち上げ、2023年6月に20年ぶりに下部尿路症状に関する疫学調査を行っています。20年前と比べて社会的な情勢が大きく変化したこともあり、前回のように住民台帳を基にした郵送による調査を行うことはできませんでしたが、20歳から99歳までの方を対象に、総務省統計局国勢調査の人口比率に基づき、性別、年代別、地域別などで割付を行ったインターネットリサーチを行っています。結果的に、6,210名（男性3,122名、女性3,088名）からのアンケート調査の結果が得られ、現在解析を進めているところです。今回の結果も、本邦における下部尿路症状の診療に大きく影響を与えるものと考えています。

このように、本学会の下部尿路症状に関する研究を通じた社会的貢献は大きいものであり、高齢化を迎えている本邦において今後も重要な役割を担っていくものと考えます。

編集委員会委員長として

高知大学医学部薬理学講座 教授
齊藤 源顕

日本排尿機能学会雑誌編集委員長を拝命している高知大学医学部の齊藤です。私が本職についてから3年が過ぎ、第33巻の編集作業がひと段落ついたところです。本雑誌第14巻からがちょうど私の手元にあり、その内容を見ていますと総説・原著が中心で各巻10編弱ですが、後に教授となられた著名な先生の質の高い投稿の多さに目を見張るものがございます。それ以前は数編の論文数で移行していたようですが、今読んでも大変質の高い読み応えのある論文が多いです。令和の時代になり、本雑誌に投稿論文数増加の大きな転機が訪れたのは前編集委員長の小島祥敬教授が第29巻で学会特集号を組んだ時です。日本排尿機能学会の発表内容を論文化し、掲載論文数の大幅な増加となりました。さらに第32巻からは完全にonline化されて現在に至ります。会員の方ならonlineで過去の論文を見ることができます。

このように論文投稿数が増加している本雑誌ですが、編集委員長として心掛けていることがございます。投稿論文はできるだけ建設的に評価・査読を行い、より質の良いものに修正して世に出すということです。私自身としては採択率は100%でも構わないと思っています。そしてより多くの医師を含めた多くの他職種の方々に投稿いただきたいと願っています。本雑誌に投稿するのが初めての論文作成という方もおられると思いますが、査読委員・編集委員会の皆様におかれましてはその点に留意するようよろしくお願いいたします。

最後に、最近の研究離れとそれに伴い論文作成能力が低下しているように感じています。研究の発想は素晴らしいのですが、その方法論と論文化に多少問題がある事例を見受けます。今までは各大学の医局が中心となって指導してきた論文作成ですが、医師の医局離れや他職種の方の参加に伴いうまく機能していないと感じています。今後は排尿機能学会主導で抄録や論文の作成のワークショップやセミナーなどの教育活動を行う必要があると実感しております。また将来的には本学会に研究や論文作成の相談を受けるような部署が必要なのかもしれないと思っています。

Lower Urinary Tract Symptoms 編集長として



旭川医科大学腎泌尿器外科
柿崎 秀宏

2021 年 5 月から Lower Urinary Tract Symptoms (LUTS) 誌の編集長を務めております。初代編集長であった故・山口脩先生（福島医科大学名誉教授）から編集長のバトンを受け取りました。JCS、KCS（韓国）、TCS（台湾）の 3 つの学術団体が連携して LUTS 誌が誕生し、2009 年 6 月に第 1 号が発刊されました。最初の 3 年間は増刊号を除いて年 2 号の発刊でしたが、その後は年 3 ～ 4 号に増え、2022 年からは年 6 号の発刊となっています。LUTS 誌のインパクトファクターは年々上昇し、2020 年には 1.592 と最高値を記録しましたが、その後はやや低下し、2022 年は 1.3 となっています。LUTS 誌は JCS の official journal であるとともに、PPCS の official journal でもあります。

LUTS 誌はその名の通り、下部尿路症状・下部尿路機能障害に特化した国際学術雑誌であり、世界各国から論文投稿されています。投稿論文の総数も、2020 年以降は 300 を超えています。論文のアクセプト率は、ここ最近では 19% となっています。国別にみると、トルコからの投稿論文が最多で、次に中国、日本、米国、イランなどの各国が続きます。

国際禁制学会（ICS）は official journal として、Continence および Continence Reports という雑誌を発刊しています。これらの雑誌は LUTS 誌の良きライバルです。LUTS 誌のインパクトファクターを上昇させ、認知度をさらに上げるためには、JCS 会員の協力が不可欠です。英文論文は LUTS 誌への投稿を最優先し、文献を引用する際には LUTS 誌の論文の引用をお願いします。また、投稿論文の査読を JCS 会員に依頼することも少なくないため、査読への協力もよろしくお願いします。

下部尿路機能に特化したユニークな専門誌である LUTS 誌のさらなる発展のために、JCS 会員の皆様のご支援をよろしくお願いします。

日本排尿機能学会における教育事業の歴史・現状

福島県立医科大学医学部泌尿器科学講座
小島 祥敬

本学会の発足から半世紀の歴史の中で、排尿機能学（下部尿路機能学）という学問体系が複雑・多様化していることから、より充実した教育活動が必要とされてきた。また排尿機能専門医の創設も相まって、近年教育の重要度が増している。特にこの数年、本学会における教育活動が充実しつつあり、4つの事業を中心にその歴史と現状について述べたい。

1. JCS 専門医セミナー

平成 28 年度の排尿機能専門医制度設立とともに、専門医取得のためにはセミナー 3 回、更新のためには 2 回受講することが義務付けられた。そこで、平成 27 年から教育セミナー、平成 29 年に JCS セミナー、平成 30 年に JCS 認定医セミナー、平成 31 年に JCS 専門医セミナーと名称の変遷を経ながら、学術大会内に教育を目的としたセミナーが開催されている。また、専門医セミナーの企画運営は、講義内容が毎年偏ることなく専門医育成に相応しい内容とすることを目的として、令和 3 年より教育委員会主導で行うこととなった。

2. ハンズオンセミナー

平成 30 年から、学術大会終了後に実習形式のハンズオンセミナーによる教育活動も行っている。骨盤底筋トレーニングハンズオンセミナーと尿流動態検査ハンズオンセミナーを中心に行っている。特に前者については、対象を医師のみならず medical staff に広げ、幅広い教育活動を展開している。

3. 教育ビデオ

令和 2 年から、学会ホームページからいつでも最新の情報が得られるように、また各種ガイドラインの普及による診療の標準化を目的として、教育ビデオを作成している。これまでに、排尿自立指導、女性下部尿路症状、夜間頻尿、低活動膀胱、尿流動態検査、フレイル・認知機能低下高齢者への排尿自立支援、過活動膀胱をテーマとして作成した。

4. JCS サマースクール

令和 4 年に排尿機能を専門とする若手泌尿器科医の育成を目的とした JCS サマースクールを初めて開催した。学問だけではなく若手会員の相互交流をもとにして、排尿機能学を専門とする若手会員の増加と育成につなげていく必要がある。

専門医制度

専門医制度委員会前委員長として



信州大学医学部泌尿器科学教室 名誉教授
石塚 修

専門医制度は平成 28 年度から開始されました。その趣旨は、「急速に少子高齢化が進む中、令和 7 年（2025 年）にいわゆる“団塊の世代”が全て 75 歳以上となる超高齢社会を迎えます。～中略～ 排尿障害に関するより質の高い診療の普及、特に高齢者の排尿管理などの要請に応えるため、日本排尿機能学会では専門医制度を発足することになりました。日本排尿機能学会専門医制度は、適切な排尿障害診療の普及と発展を通じて社会に貢献しようとするものです。～後略～」です。

本趣旨で開始された制度ですが、平成 29 年度（29 名合格 / 29 名受験）、平成 30 年度（11/11）は合格率が 100%でしたが（令和元年度は未実施）、令和 2 年度は 88.5%（23/26）、令和 3 年度は 64.7%（11/17）と下降し、受験者の減少対策も含め、制度改革の必要が生じてまいりました。

そのため、①試験問題の出題基準を明確にする、②過去の受験者数、合格率を公表する、③過去の試験問題集を作成し、勉強しやすくすることが早急の課題となりました。中でも、問題集作成については、過去の問題・解説の再確認、文章の統一など、委員の諸先生、および学会事務局には多大な労力をお願いすることとなりました。問題集の値段も、本制度の広い普及の意味も含め、赤字覚悟の値段に抑えました（表紙デザイン・装丁など、自前でデザインし予算削減）。初版は 100 部印刷でしたが、すぐに増刷したことや、令和 4 年度の試験合格率が 100%（26/26）になったことは喜ばしいことでした。現在、総計 271 名の方が専門医として活躍されています。徐々にではありますが、世の中に周知されればよいと思います。

また、COVID-19 蔓延下での試験実施にあたっては、受験者の所属する都道府県ごとに会場を設置して試験を施行する異例の事態もありました。各地の試験会場を担当された先生方に感謝申し上げる次第です。

下部尿路機能に関する用語基準



日本赤十字社医療センター 名誉院長
本間 之夫

本研究は、2002年の国際泌尿器科学会（ICS）標準化部会報告の翻訳です。この報告の特徴は、初めて症状を詳細かつ明確に定義したことです。泌尿器科診療はもちろん一般社会への影響も大きいとして、JCSの事業として翻訳を行いました。著者3名が数回集まり、一言一句あれこれ議論しながら行いました。最近亡くなった山口先生とも熱い議論を楽しく交わしました。

症状の総称としては Lower Urinary Tract Symptoms（LUTS：下部尿路症状）が導入され、Voiding symptom（排尿症状）、Storage symptom（蓄尿症状）、Post micturition symptom（排尿後症状）の3つに分類されました。Voiding symptom の訳では、排尿症状は広く排尿に関する症状（LUTS または Urinary symptom に相当）の意味もあることから、排出症状、尿排出症状、排尿相症状、排尿時症状などが代案とされました。しかし、原文との対応、発語の容易さなどから、この訳になりました。今も排尿症状が Voiding symptom か Urinary symptom かで時に混乱しますが、実際には文脈で理解されているようです。

Syndrome（症候群）とは、症状の集合体で通常の診療では明確な原因が同定できない機能的異常とされました。その1つに Painful bladder syndrome（PBS、後に Bladder pain syndrome（BPS）に変更）があり、脚注で PBS を Interstitial cystitis（IC：間質性膀胱炎）より望ましい用語としています。つまり、ICの使用を避けるべきとしたのです。これが今なお続く IC と BPS の混乱の原因の1つでしょう。

原著（日排尿会誌 2003; 14: 278-289）は JCS 会員必読です。他にも多数の論点が今後の課題として残されています（IJU 2008; 15: 35-43）。

日本排尿機能学会標準用語集第 1 版の編集を振り返って



初代用語委員長
長野県立信州医療センター泌尿器科
井川 靖彦

臨床や学術活動の場での互いの情報交換のためには、共通して使用できる標準用語基準が不可欠である。下部尿路機能とその障害に関する標準用語としては、International Continence Society (ICS) が 2002 年に標準用語基準を報告し、本学会が 2003 年にその日本語訳の用語基準を発刊している。その後、ICS は領域別にさまざまな標準用語報告書を改訂発表し、国際的に共通して使用できる標準用語基準を更新提示してきたが、2018 年当時、2002 年以降の ICS による用語改訂については日本語訳の作成がなされておらず、喫緊の課題となっていた。このような背景から、2018 年秋の本学会理事会で、これまでの「学術・用語委員会」を分離して、それぞれ独立した「学術委員会」と「用語委員会」として設置することとし、用語委員会は主な活動として、「標準用語集」の編集にあたることとなった。委員長は私が務め、委員（五十音順）は、青木芳隆、鈴木康之、関戸哲利、谷口珠実、藤村哲也、三井貴彦、宮里 実の各氏が務めた。

編集目的は、下部尿路機能障害の診療・研究に携わる本邦の専門家を対象として、学術活動の場で国内外を問わずに共通して使用できる標準用語基準を提供することとした。そこで、これまで ICS から報告されてきた標準用語報告書の中から、比較的最近発表されており、重要度が高いと思われる 3 編（Male LUTS, Neurogenic LUTD, および Nocturia に関するもの）を選出し、International Children's Continence Society (ICCS) から報告されている Children and Adolescents に関する用語基準 1 編を加えて、1 冊の標準用語集としてまとめる方針となった。構成は、ICS からの報告書に倣って、成人については、症状、徴候、検査、診断、治療の章に分け、小児については別個に章を設け、小児に関する特有な用語を抽出掲載することとした。

2019 年 5 月に掲載する用語を抽出し、日本語訳の分担執筆、相互査読、全体会議による検討を重ねて、2020 年 1 月に委員会内での最終案を完成し、理事による閲覧、パブリックコメント募集とそれに対応した修正を行い、理事会の承認を経て、「標準用語集第 1 版」として、2020 年 5 月 15 日に発刊となった。

会員諸氏が本用語集を活用して、優れた研究成果を国内外に発信していただければこの上ない喜びである。同時に、発刊から 3 年が過ぎていることから、近い将来、改訂版が発刊されることを期待したい。

日本排尿機能学会のあゆみ

年表

1973 年	神経因性膀胱研究会 発足
1973 年 6 月 1 日	第 1 回神経因性膀胱研究会 開催
1990 年 4 月 20 日	神経因性膀胱研究会誌 発行
1994 年 6 月 30 日	日本神経因性膀胱学会誌 改称
1994 年 10 月	日本神経因性膀胱学会 設立
1994 年 10 月 14 日 ～15 日	第 1 回神経因性膀胱学会 開催
1994 年 10 月	学会賞授与開始
1997 年 9 月 23 日 ～26 日	The 27th meeting of the International Continence Society (ICS1997)
2001 年 9 月 15 日	日本排尿機能学会への名称変更
2001 年 9 月	河邊賞授与開始
2002 年 10 月 2 日 ～4 日	第 9 回日本排尿機能学会 開催
2002 年 10 月	日本排尿機能学会誌 改称
2002 年 11 月 ～2003 年 3 月	排尿に関する疫学的研究
2003 年 12 月 20 日	下部尿路機能に関する用語基準：国際禁制学会標準化部会報告
2005 年 8 月 30 日	過活動膀胱診療ガイドライン
2005 年 8 月 30 日	慢性期脊髄損傷における排尿障害の診療ガイドライン
2005 年 8 月 30 日	二分脊椎症に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン
2006 年 9 月 6 日	The 1st Pan-Pacific Continence Society Meeting
2008 年 9 月 20 日	男性下部尿路症診療ガイドライン
2009 年 4 月 30 日	夜間頻尿診療ガイドライン
2009 年 6 月 25 日	Lower Urinary Tract Symptoms 発行
2009 年 9 月 10 日	The 4th Pan-Pacific Continence Society Meeting
2011 年 9 月 15 日	脊髄損傷における排尿障害の診療ガイドライン
2012 年 8 月 28 日	The 7th Pan-Pacific Continence Society Meeting
2013 年 11 月 15 日	女性下部尿路症状診療ガイドライン
2014 年 10 月 1 日	日本排尿機能学会法人化
2015 年 4 年 30 日	過活動膀胱診療ガイドライン[第 2 版]
2015 年 9 月 7 日 ～8 日	The 10th Pan-Pacific Continence Society Meeting
2016 年 2 月 26 日	新ロゴマーク制定
2016 年 9 月 13 日 ～16 日	The 46th meeting of the International Continence Society (ICS2016)
2017 年 3 月 5 日	排尿機能認定医 初回認定
2017 年 4 月 25 日	パーキンソン病における下部尿路機能障害診療ガイドライン
2017 年 9 月	JCS セミナー 初回開催
2017 年 10 月 1 日	二分脊椎に伴う下部尿路機能障害の診療ガイドライン[2017 年版]
2019 年 6 月	排尿機能専門医へ名称変更
2019 年 6 月 15 日	骨盤底筋トレーニング(PFMT)ハンズオンセミナー 初回開催
2019 年 7 月 25 日	脊髄損傷における下部尿路機能障害の診療ガイドライン[2019 年版]
2019 年 9 月 14 日	ウロダイナミクス検査(UDS)ハンズオンセミナー 初回開催
2019 年 9 月 30 日	女性下部尿路症状診療ガイドライン[第 2 版]
2020 年 5 月 15 日	標準用語集[第 1 版]
2020 年 5 月 25 日	夜間頻尿診療ガイドライン[第 2 版]
2020 年 5 月 30 日	UAB コアワーキンググループ報告書
2021 年 9 月 11 日 ～12 日	The 15th Pan-Pacific Continence Society Meeting
2022 年 9 月 1 日	過活動膀胱診療ガイドライン[第 3 版]
2023 年 5 月 ～2023 年 6 月	下部尿路症状に関する疫学調査

歴代理事長一覧

歴 代	任 期	氏 名
初代理事長	1994 年 10 月 ～ 1996 年 9 月	島崎 淳 (千葉大学)
第 2 代	1996 年 9 月 ～ 1998 年 9 月	河邊 香月 (東京大学)
第 3 代	1998 年 9 月 ～ 2002 年 10 月	小柳 知彦 (北海道大学)
第 4 代	2002 年 10 月 ～ 2006 年 9 月	山口 脩 (福島県立医科大学)
第 5 代	2006 年 9 月 ～ 2010 年 9 月	西澤 理 (信州大学)
第 6 代	2010 年 9 月 ～ 2014 年 9 月	武田 正之 (山梨大学)
第 7 代	2014 年 9 月 ～ 2018 年 9 月	横山 修 (福井大学)
第 8 代	2018 年 9 月 ～ 2020 年 10 月	後藤 百万 (名古屋大学)
第 9 代	2020 年 10 月 ～ 2022 年 9 月	柿崎 秀宏 (旭川医科大学)
第 10 代	2022 年 9 月 ～	高橋 悟 (日本大学)

歴代世話人および歴代大会長一覧

第 1 回神経因性膀胱研究会(1973年)～第 42 回神経因性膀胱研究会(1994年)

会 期		世 話 人		会 場
第 1 回	1973 年 6 月 1 日	宮崎 一興	(神奈川リハビリ病院)	箱根仙石原 富士見荘
第 2 回	1973 年 9 月 15 日	岩佐 賢二	(大阪労災病院)	六甲ホテル
第 3 回	1974 年 3 月 31 日	小川 秋實	(東京大学)	農林年金会館
第 4 回	1974 年 11 月 23 日	生駒 文彦	(兵庫医科大学)	兵庫医科大学
第 5 回	1975 年 6 月 29 日	宮崎 一興	(神奈川リハビリ病院)	神奈川リハビリ病院
第 6 回	1975 年 10 月 10 日	斉藤 博	(東海大学)	東海大学病院
第 7 回	1976 年 5 月 22 日	横川 正之・牛山 武久	(東京医科歯科大学)	東京医科歯科大学
第 8 回	1976 年 11 月 20 日	今林 健一	(東北大学)	東北大学長陵会館
第 9 回	1977 年 5 月 17 日	豊嶋 穆	(神奈川リハビリ病院)	帝京大学医学部
第 10 回	1977 年 11 月 4 日	生駒 文彦	(兵庫医科大学)	兵庫医科大学
第 11 回	1978 年 4 月 7 日	島崎 淳	(千葉大学)	神奈川県民ホール
第 12 回	1978 年 9 月 21 日	土田 正義	(秋田大学)	秋田シティーホール
第 13 回	1979 年 4 月 7 日	今林 健一	(東北大学)	日本青年会館
第 14 回	1979 年 11 月 3 日	近藤 厚生	(名古屋大学)	ホテルニュー名古屋
第 15 回	1980 年 4 月 5 日	桜井 昶	(大阪厚生年金病院)	神戸貿易センタービル
第 16 回	1980 年 10 月 19 日	白岩 康夫・伊達 智徳	(福島医科大学)	あぶくま会館
第 17 回	1981 年 5 月 24 日			群馬県民会館
第 18 回	1981 年 10 月 25 日	平賀 聖悟	(東京医科歯科大学)	東京医科歯科大学
第 19 回	1982 年 4 月 11 日	豊嶋 穆	(帝京大学)	農協ビル
第 20 回	1982 年 11 月 8 日	近藤 厚生	(名古屋大学)	名古屋大学鶴友会館
第 21 回	1983 年 4 月 4 日	栗田 孝	(近畿大学)	大阪市中央公会堂
第 22 回	1983 年 11 月 9 日	宮崎 一興	(神奈川リハビリ病院)	神奈川県社会福祉会館
第 23 回	1984 年 4 月 2 日	白岩 康夫	(福島医科大学)	福島県郷土文化会館
第 24 回	1984 年 11 月 3 日	岩坪 暎二	(総合せき損センター)	九州大学医学部同窓会館
第 25 回	1985 年 4 月 3 日	平賀 聖悟	(東京医科歯科大学)	都市センター
第 26 回	1986 年 4 月 13 日			広島医師会館
第 27 回	1986 年 10 月 5 日	折笠 精一	(東北大学)	東北大学医学部臨床大講堂
第 28 回	1987 年 5 月 14 日	佐藤 昭太郎	(新潟大学)	ホテル・イタリア軒
第 29 回	1987 年 11 月 22 日	豊嶋 穆	(帝京大学)	明治製菓本社講堂(東京都)
第 30 回	1988 年 5 月 19 日	大堀 勉	(岩手大学)	盛岡市総合福祉センター
第 31 回	1988 年 10 月 31 日	島崎 淳	(千葉大学)	千葉市民会館
第 32 回	1989 年 4 月 20 日	桜井 昶	(大阪厚生年金病院)	大阪国際交流センター
第 33 回	1989 年 9 月 30 日	岩坪 暎二	(総合せき損センター)	九州大学医学部同窓会館
第 34 回	1990 年 6 月 17 日	小柳 知彦	(北海道大学)	札幌市教育文化会館
第 35 回	1990 年 9 月 30 日	小川 秋實	(信州大学)	あがたの森文化会館(松本市)
第 36 回	1991 年 5 月 14 日	久住 治男	(金沢大学)	石川県立社会教育センター
第 37 回	1991 年 10 月 20 日	島崎 淳	(千葉大学)	食料会館(東京都)
第 38 回	1992 年 4 月 18 日	阿曾 佳郎	(東京大学)	日本都市センター(東京)
第 39 回	1992 年 10 月 10 日	近藤 厚生	(名古屋大学)	愛知県医師会館
第 40 回	1993 年 4 月 12 日	吉田 修	(京都大学)	国立京都国際会館
第 41 回	1993 年 10 月 9 日	土田 正義	(秋田大学)	秋田県総合保険センター
第 42 回	1994 年 4 月 8 日	熊澤 浄一	(九州大学)	ホテルニューオータニ博多

第 1 回～第 8 回日本神経因性膀胱学会 (1994～2001年)				
会 期		学 会 長		会 場
第 1 回	1994 年 10 月 14 日、15 日	白岩 康夫	(福島県立医科大学)	福島県文化センター
第 2 回	1995 年 9 月 1 日、2 日	島崎 淳	(千葉大学)	千葉市民会館
第 3 回	1996 年 9 月 27 日、28 日	宮川 征男	(鳥取大学)	京都会館
第 4 回	1997 年 9 月 23 日	河邊 香月	(東京大学)	パシフィコ横浜
第 5 回	1998 年 10 月 1 日～3 日	栗田 孝	(近畿大学)	千里ライフサイエンスセンター(豊中市)
第 6 回	1999 年 9 月 23 日～25 日	高木 隆治	(新潟労災病院)	上越文化会館
第 7 回	2000 年 9 月 7 日～9 日	八竹 直	(旭川医科大学)	旭川グランドホテル
第 8 回	2001 年 9 月 13 日～15 日	福井 準之助	(聖路加国際病院)	聖路加国際病院・聖路加看護大学
第 9 回～第 31 回日本排尿機能学会 (2002～2024年)				
会 期		学 会 長		会 場
第 9 回	2002 年 10 月 2 日～4 日	上田 昭一	(熊本大学)	ホテル日航熊本
第 10 回	2003 年 9 月 12 日～14 日	服部 孝道	(千葉大学)	グリーンホテル千葉中央
第 11 回	2004 年 10 月 13 日～15 日	滝本 至得	(日本大学)	大手町サンケイプラザ
第 12 回	2005 年 10 月 5 日～7 日	西澤 理	(信州大学)	まつもと市民芸術館
第 13 回	2006 年 9 月 6 日～8 日	安田 耕作	(獨協医科大学越谷病院)	笹川記念会館(東京)
第 14 回	2007 年 10 月 4 日～6 日	山口 脩	(福島県立医科大学)	ホテルリステル猪苗代
第 15 回	2008 年 9 月 11 日～13 日	本間 之夫	(東京大学)	大手町サンケイプラザ
第 16 回	2009 年 9 月 10 日～12 日	内藤 誠二	(九州大学)	J A L リゾートシーホークホテル福岡
第 17 回	2010 年 9 月 29 日～10 月 1 日	武田 正之	(山梨大学)	甲府富士屋ホテル
第 18 回	2011 年 9 月 15 日～18 日	横山 修	(福井大学)	ホテルフジタ福井、フェニックスプラザ
第 19 回	2012 年 8 月 29 日～31 日	後藤 百万	(名古屋大学)	名古屋国際会議場
第 20 回	2013 年 9 月 18 日～21 日	山田 静雄 大園誠一郎	(静岡県立大学) (浜松医科大学)	グランシップ(静岡市)
第 21 回	2014 年 9 月 17 日～20 日	公文 裕巳	(岡山大学)	岡山コンベンションセンター
第 22 回	2015 年 9 月 9 日～11 日	柿崎 秀宏	(旭川医科大学)	京王プラザホテル札幌
第 23 回	2016 年 12 月 6 日～8 日	井川 靖彦	(東京大学)	東京国際フォーラム
第 24 回	2017 年 9 月 28 日～30 日	山西 友典	(獨協医科大学)	ビッグサイト T F T ホール(東京)
第 25 回	2018 年 9 月 27 日～29 日	吉田 正貴	(国立長寿医療研究センター)	名古屋国際会議場
第 26 回	2019 年 9 月 12 日～14 日	高橋 悟	(日本大学)	KFC Hall & Rooms(第一ホテル両国 併設)
第 27 回	2020 年 10 月 15 日～17 日	巴 ひかる	(東京女子医科大学東医療センター)	TKP ガーデンシティ品川 (SHINAGAWAGOOS1 階)
第 28 回	2021 年 9 月 9 日～11 日	石塚 修	(信州大学)	ホテルブエナビスタ(松本市)
第 29 回	2022 年 9 月 1 日～3 日	舩森 直哉	(札幌医科大学)	京王プラザホテル札幌
第 30 回	2023 年 9 月 7 日～9 日	榊原 隆次 関戸 哲利	(東邦大学医療センター佐倉病院) (東邦大学医療センター大橋病院)	京成ホテルミラマーレ(千葉市)
第 31 回	2024 年 9 月 5 日～7 日	小島 祥敬	(福島県立医科大学)	ビッグパレットふくしま

学術大会ポスター一覧

日本排尿機能学会の学術大会のポスターに関しては、色々と手を尽くしてその収集を試みました。しかしながら、想定外にポスターあるいはチラシが残っておらず、一部の学術大会に関しては、ポスターあるいはチラシを掲載させて頂くことが叶いませんでした。なお、ポスターあるいはチラシが入手出来なかった学術大会の内、抄録集の表紙が学術大会オリジナルの表紙であったものに関しては、抄録集の表紙を掲載させて頂きました。関係各位におかれましては、以上の点につきまして、どうかご理解、ご寛恕の程、お願い申し上げます。



第 2 回



第 3 回



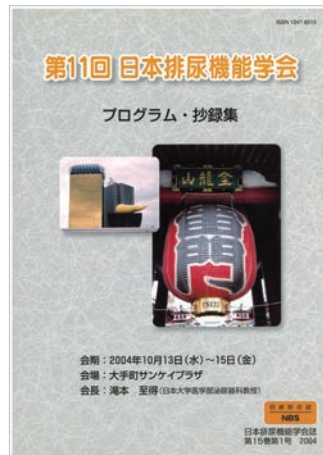
第 8 回



第 9 回



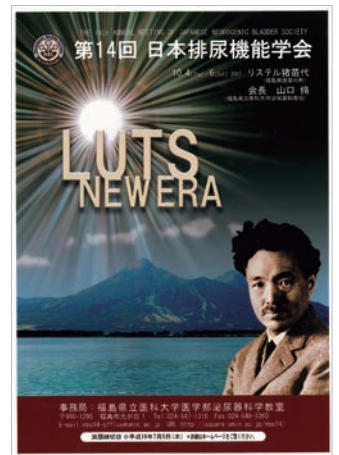
第 10 回



第 11 回



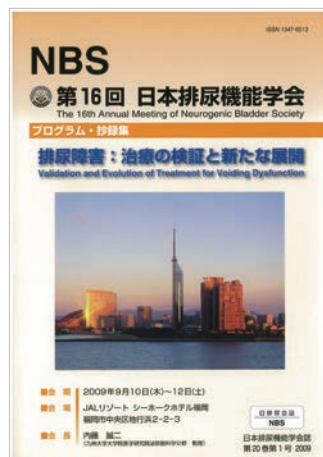
第 12 回



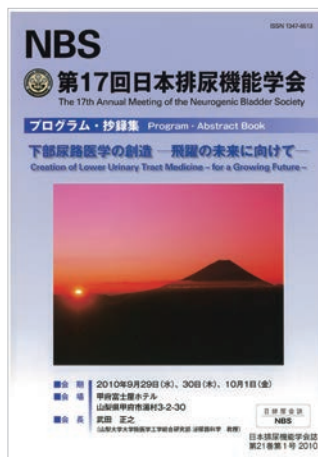
第 14 回



第 15 回



第 16 回



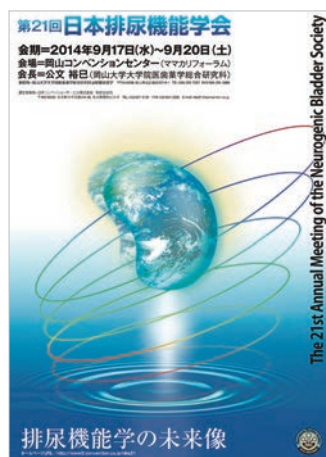
第 17 回



第 18 回



第 19 回



第 21 回



第 22 回



第 23 回



第 24 回



第 25 回



第 26 回



第 27 回



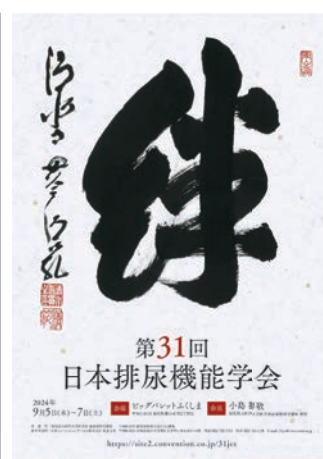
第 28 回



第 29 回



第 30 回



第 31 回

学会賞 受賞者一覧

年度	学術大会	部門		氏名	所属	論文名
1994 年度	第 1 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	並河 正晃	近江温泉病院	立位、仰臥位および伏臥位排尿における健康青壮年男性の平均尿流量値の比較・検討
			基礎部門	大村 政治	名古屋大学	虚血のラット膀胱機能におよぼす影響
		論文部門		橋谷 光	総合せき損センター	脊損患者の自己導尿：10 年間の追跡調査
1995 年度	第 2 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	成島 雅博	中部労災病院	腹圧性尿失禁に対する定量的膀胱頸部挙上術と 394 症例の手術長期成績
			基礎部門	吉村 直樹	京都大学	パーキンソン病に伴う排尿筋過反射に対する各種ドーパミン受容体作動薬の効果
		論文部門		菅谷 公男	秋田大学	脳疾患と排尿障害：動物実験から
1996 年度	第 3 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	武井実根雄	原三信病院	加齢にともなう下部尿路機能の変化について - Pressure flow study による検討 -
			基礎部門	井川 靖彦	信州大学	覚醒下正常および脊髄損傷ラットの反射性膀胱収縮に対する脊髄内ニューロキニン 1 受容体の関与の解明
		論文部門		関戸 哲利	筑波大学	尿流動態検査時の腹圧測定に影響する因子に関する実験的検討
1997 年度	第 4 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	宮田 昌伸	旭川医科大学	歩行負荷膀胱内圧測定による腰部脊椎管狭窄症の排尿筋反射亢進の診断
			基礎部門	柴田 隆	北海道大学	発達に伴うラット脊髄副交感神経細胞における NMDA 型グルタミン酸受容体の発現変化
		論文部門		森田 隆	東京医科歯科大学	前立腺肥大症における α 、 β -adrenoceptor の変化
1998 年度	第 5 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	柿崎 秀宏	北海道大学	原因不明の小児神経因性膀胱の臨床像
			基礎部門	花井 楨	近畿大学	雌ラット尿道狭窄における膀胱壁の可溶性画分の正常ラット培養膀胱平滑筋細胞の増殖に対する影響
		論文部門		斉藤 政彦	名古屋大学	二分脊椎患者の排便管理
1999 年度	第 6 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	小澤 秀夫	岡山労災病院／岡山大学	経会陰超音波ドブラを用いた下部尿路機能検査における下部尿路閉塞の診断
			基礎部門	石郷岡 学	山形大学	前立腺炎症候における神経学的機序の関わりについて
		論文部門		水沢 弘哉	信州大学	神経因性膀胱患者に対する清潔間歇的導尿法の臨床的検討
		特別賞(コメディカル部門)		吉岡 愛子	信州大学	アンケートによる膀胱内圧測定検査における患者の意識調査と看護への考察
2000 年度	第 7 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	松浦 忍	北海道大学	Positron Emission Tomography (PET) を用いたヒト脳蓄尿反射中枢に関する検討
			基礎部門	吉田 正貴	熊本大学	尿道平滑筋の adrenergic と nitrergic nerve の相互作用の検討
		論文部門		緒方 敦子	鹿児島大学	過活動型神経因性膀胱への塩酸プロピペリンの効果と QOL の改善について
2001 年度	第 8 回日本神経因性膀胱学会	学会発表	臨床部門	齊藤 源顕	鳥取大学	ラット膀胱における虚血・再灌流時の一酸化窒素合成酵素(NOS)阻害剤の予防効果について - アボトシスとの関係
			基礎部門	浮村 理	京都府立医科大学	新しい膀胱知覚機能検査としての Neurometer による求心路の繊維選択的な定量的機能評価方法
		論文部門		論文部門	浜松医科大学	ラット膀胱筋切片で ATP 刺激に対してみられる後収縮(post-washout contraction)と prostaglandin 関連物質の検討

年度	学術大会	部門		氏名	所属	論文名
2002 年度	第 9 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	梶原 充	広島大学	本邦学童児における昼間遺尿症の疫学調査
			基礎部門	三井 貴彦	北海道大学	不死化神経幹細胞移植によって脊髄損傷ラットの排尿機能は改善するか？
		論文部門		後藤 百万	名古屋大学	老人施設における高齢者排尿管理に関する実態と今後の戦略：アンケートおよび訪問聴き取り調査
2003 年度	第 10 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	杉本 周路	日本大学医学部泌尿器科	パーキンソン病の排尿障害に対する脳深部刺激法の効果
			基礎部門	長袋 洋	武田薬品工業株式会社	新規アセチルコリンエステラーゼ阻害薬 TAK-802 のモルモットにおける尿流動態に対する作用
		論文部門		本間 之夫	東京大学医学部泌尿器科	尿失禁 QOL 質問票 日本語版の妥当性の検討
2004 年度	第 11 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	小島 祥敬	名古屋市立大学腎泌尿器科学	前立腺肥大症に対するゲノム薬理学からみたオーダーメイド医療 - $\alpha 1$ アドレナリン受容体サブタイプの発現量と選択的 $\alpha 1$ 遮断薬の効果との相関 -
			基礎部門	関 聡	信州大学医学部泌尿器科	脊髄後角ニューロキニン I 受容体発現神経細胞の選択的破壊による脊髄損傷ラット排尿筋過活動抑制効果
		論文部門		田島 純子	長崎大学医学部腎泌尿器科	自己導尿患者における精神状態と Quality of life についての検討
2005 年度	第 12 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	本田 和也	福島県立医科大学泌尿器科	$\beta 3$ アドレナリン受容体遺伝子変異の過活動膀胱における関連性 - 過活動膀胱患者とボランティアとの比較 -
			基礎部門	市野みどり	信州大学医学部泌尿器科	乳幼児原発性 VUR の自然改善因子の検討：Video-urodynamic study による解析
				都 書棋	山梨大学医学部泌尿器科	ラット膀胱上皮の伸展刺激による ATP 放出メカニズムに対するアミロライド感受性イオンチャネルの関与
		論文部門		松本 成史	近畿大学医学部泌尿器科	ラット大脳上位中枢破壊モデルを用いた排尿反射の検討 - anterior cingulate cortex は排尿知覚中枢なのか？ -
2006 年度	第 13 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	中西 公司	獨協医科大学泌尿器科	前立腺全摘術後の尿失禁における骨盤底電気刺激療法と骨盤底筋体操の併用療法 - sham 刺激を用いた二重盲検比較試験 -
			基礎部門	佐野 洋	北海道大学医学部腎泌尿器科	下部尿路閉塞ラット膀胱における SDF 1 α 遺伝子発現と骨髄由来細胞遊走の関連性
		論文部門		鈴木真由美	静岡県立大学薬学部薬剤学教室	ラットの排尿機能及び下部尿路受容体に対するノコギリヤシ果実抽出液の薬理作用
2007 年度	第 14 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	夏目 修	奈良県総合リハビリテーションセンター泌尿器科	血圧上昇や体液量増加は夜間多尿の増悪の要因になるのではないか？：血漿浸透圧変化による抗利尿ホルモン分泌反応性を含む夜間頻尿の検討
			基礎部門	橘田 岳也	北海道大学医学部腎泌尿器科	中脳水道中心灰白質(PAG)における排尿反射に伴う神経伝達物質調整機構の追及 - 無麻酔無拘束ラットを用いた脳内微小灌流法による検討 -
		論文部門		副田二三夫	熊本大学医学部薬学研究部環境分子保健学	膀胱侵害刺激による Fos タンパクの脳内排尿反射関連核における発現とそれに対するデキストロメトルファンの作用
2008 年度	第 15 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	福多 史昌	札幌医科大学泌尿器科	前立腺肥大症に対する将来の治療を予測する因子 - 北海道島牧村 15 年の縦断的調査結果より -
			基礎部門	宮里 実	ピッツバーグ大学泌尿器科	脊髄損傷ラットの過活動膀胱に対するヘルペスウイルス GABA 産生酵素遺伝子導入治療
		論文部門		阿部 桃子	宮城大学看護学部看護学科	脳卒中通院患者における下部尿路症状(LUTS)の実態と生活機能(functioning)との関連

年度	学術大会	部門		氏名	所属	論文名
2009 年度	第 16 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	速見 浩士	鹿児島大学病院血液浄化療法部	九州地方における間質性膀胱炎の臨床的検討 –九州泌尿器科連合地方会、第 16 回共同研究–
			基礎部門	吉田 徳	静岡県立大学薬学部薬剂学教室	小動物 Positron Emission Tomography (PET) を用いた抗コリン薬の脳内受容体結合活性の評価
		論文部門		伊藤 由彦	静岡県立大学薬学部薬剂学教室	プロピペリンおよびオキシブチニンのバニロイド受容体 (TRPV1) に対する作用
2010 年度	第 17 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	高橋 則雄	太田西ノ内病院泌尿器科	末梢動脈疾患と Male LUTS – 頸動脈エコー、脈波伝播速度 (PWV)、足関節上腕血圧比 (ABI) による検討 –
			基礎部門	丹羽 里実	名古屋市立大学大学院薬学研究科細胞分子薬効解析学	前立腺肥大症におけるカルシウム活性化カリウムチャネル阻害薬の効果
		論文部門		山西 友典	獨協医科大学泌尿器科	Ambulatory urodynamics in Asymptomatic, young, healthy male volunteers
2011 年度	第 18 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	窪田 泰江	名古屋市立大学大学院 腎・泌尿器科学分野	尿中 Stem Cell Factor (SCF) 値の測定は OAB の判断と治療効果判定に有用である
			基礎部門	西島さおり	サザンナイトラボラトリー-LLP	トランシト投与による間質性膀胱炎モデルラットの作製とその発症機序の解析
		論文部門		大谷 将之	にしくまもと病院泌尿器科	Neuronal Nitric Oxide Synthase Gene Transfer into the Rat Prostate Using In Vivo Electroporation
2012 年度	第 19 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	宋 成浩	獨協医科大学大学越谷病院泌尿器科	OAB、難治性夜尿患者の 3 次元データから原因解析
			基礎部門	宮本 達也	山梨大学医学部泌尿器科	膀胱上皮に存在する Piezo は、尿意を伝える新しいメカノセンサーである
		論文部門		古田 昭	東京慈恵会医科大学泌尿器科	大腸・子宮の TRPA1 刺激を介した骨盤内臓器間感作による間質性膀胱炎様モデルの確立
2013 年度	第 20 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	濱川 隆	名古屋市立大学大学院 腎・泌尿器科学分野	炎症性サイトカイン IL-18 が前立腺肥大の間質過形成を促す
			基礎部門	小倉 啓司	大津赤十字病院 泌尿器科	$\alpha 1$ -ブロッカーが有効であった Male LUTS に対する投薬中止の長期成績
		論文部門		伊藤 敬志	松戸市立病院神経内科	Is major depression a risk for bladder, bowel, and sexual dysfunction?
2014 年度	第 21 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	伊藤 悠城	東京大学大学院医学系研究科コンチネンス医学講座	ラット膀胱の加齢性収縮能減弱とそれに対する長期カロリー制限による予防効果の背景因子の検討：脂質酸化ストレスおよび線維化の関与
			基礎部門	佐竹 洋平	東北大学大学院医学系研究科泌尿器科学分野	術前 MRI における骨盤底所見は、前立腺全摘出術後尿禁制の予測因子となる
		論文部門		石塚 修	信州大学医学部泌尿器科学教室	Nocturia potentially influences maintenance of sexual function in elderly men with benign prostatic hyperplasia.
2015 年度	第 22 回日本排尿機能学会	学会発表	臨床部門	松尾 朋博	長崎大学病院泌尿器科・腎移植外科	食塩摂取量が排尿症状に及ぼす影響に関して – 特に夜間頻尿との関連に注目して –
			基礎部門	渡邊 成樹	旭川医科大学腎泌尿器外科	TRPM7 の尿路上皮細胞間結合の形成への関与
		論文部門		二宮 早苗	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻	Single-Arm Pilot Study to Determine the Effectiveness of the Support Power of Underwear in Elevating the Bladder Neck and Reducing Symptoms of Stress Urinary Incontinence in Women

年度	学術大会	部門		氏名	所属	論文名
2016 年度	第 23 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	(該当者なし)	—	—
			基礎部門	秦 淳也	福島県立医科大学泌尿器科学	前立腺筋線維芽細胞の経時的変化からみた前立腺肥大症メカニズムの解明
		論文部門		相澤 直樹	東京大学大学院医学系研究科コンチネンス医学講座	URB937, a peripherally restricted inhibitor for fatty acid amide hydrolase, reduces prostaglandin E2-induced bladder overactivity and hyperactivity of bladder mechano-afferent nerve fibres in rats
2017 年度	第 24 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	羽賀 宣博	福島県立医科大学医学部泌尿器科学講座	骨盤内動脈硬化による血流障害を介した前立腺腫大(BPE)発症メカニズムの解明－ヒト前立腺血管および前立腺全摘標本を用いた検討－
			基礎部門	稲村 聡	福井大学医学部泌尿器科	前立腺の慢性炎症と下部尿路症状－高内皮細静脈 HEV-like vessel による慢性炎症の定量化と下部尿路症状との関連－
		論文部門		清水 孝洋	高知大学医学部薬理学講座	A stress-related peptide bombesin centrally induces frequent urination through brain bombesin receptor types 1 and 2 in the rat
2018 年度	第 25 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	吉田美香子	東京大学大学院医学系研究科	ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術後の尿禁制回復に 対する、経会陰超音波画像を用いた術前骨盤底リハビリ テーションの有効性検証
			基礎部門	清水 翔吾	高知大学医学部薬理学講座	ストレス反応性脳内神経伝達物質アンジオテンシンⅡ による排尿反射亢進の分子機構解明・排尿反射亢進に 対する脳内アンジオテンシンⅡタイプ1 受容体を標的 とした治療効果の可能性
		論文部門	臨床部門	新美 文彩	国立国際医療研究センター泌尿器科	Diagnostic value of urinary CXCL10 as a biomarker for predicting Hunner type interstitial cystitis
			基礎部門	市原 浩司	札幌中央病院泌尿器科	Toll-like receptor 7 is overexpressed in the bladder of Hunner-type interstitial cystitis, and its activation in the mouse bladder can induce cystitis and bladder pain
2019 年度	第 26 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	大前 憲史	福島県立医科大学臨床研究イノベーションセンター	ADL の自立した健康高齢者における過活動膀胱罹患指標としての身体的フレイル測定の意義：地域住民の健康医療データベースを用いた分析的横断研究
			基礎部門	望月 孝規	山梨大学医学部泌尿器科学教室	排尿に関わる前帯状回の機能：マウス大脳前帯状回周囲マッピングおよびC a M k Ⅱ依存性アデノ随伴ウイルスを利用した光遺伝学の応用
		論文部門	臨床部門	志村 寛史	山梨大学医学部付属病院泌尿器科学講座	Metabolomic Analysis of Overactive Bladder in Male Patients: Identification of Potential Metabolite Biomarkers
			基礎部門	井原 達矢	山梨大学大学院総合研究部医学域泌尿器科学講座	The time-dependent variation of ATP release in mouse primary-cultured urothelial cells is regulated by the clock gene
				今村 哲也	信州大学医学部泌尿器科学講座	Biofabricated Structures Reconstruct Functional Urinary Bladders in Radiation-Injured Rat Bladders
2020 年度	第 27 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	鳥本 一匡	奈良県立医科大学泌尿器科	就寝中に膀胱が尿を吸収して容量を調整し、睡眠維持に寄与することを証明する研究 (ABSORB 試験)
			基礎部門	嘉手川豪心	株式会社サザンナイトラボラトリー/ 沖縄協同病院泌尿器科	実験的自己免疫性間質性膀胱炎モデルラットの特性と病因
		論文部門	臨床部門	吉良 聡	山梨大学総合研究部泌尿器科学講座	Liquid chromatography-mass spectrometry identification of serum biomarkers for nocturia in aged men
			基礎部門	関 雅也	福井大学医学部泌尿器科学	Role of Corticotropin-Releasing Factor on Bladder Function in Rats With Psychological Stress

年度	学術大会	部門		氏名	所属	論文名
2021 年度	第 28 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	赤井畑秀則	福島県立医科大学医学部 泌尿器科学	Male LUTS 患者における前立腺質的变化の意義と下部尿路症状発症機序の解明－遺伝子発現プロファイリング解析による MRI/ADC 値を規定する遺伝子群の同定－
			基礎部門	関井 洋輔	大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学講座(泌尿器科学)	新規夜間多尿動物モデルを用いた夜間多尿の病態解明：腎臓内 RAS 系-SPAK-NCC 経路の過剰活性化によるナトリウム排泄抑制が夜間多尿をひきおこす
		論文部門	臨床部門	河原 崇司	横浜市立大学附属市民総合医療センター	The impact of smoking on male lower urinary tract symptoms (LUTS)
			基礎部門	山本 雅樹	高知大学医学部小児思春期医学講座	Brain hydrogen sulfide suppresses the micturition reflex via brain GABA receptors in rats
2022 年度	第 29 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	上田 朋宏	泌尿器科 上田クリニック	人工知能(AI)による機械学習アルゴリズムを用いた間質性膀胱炎におけるハンナ病変の膀胱鏡診断をめざして
			基礎部門	岡田 紘一	大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学講座(泌尿器科学)	前立腺腫大は前立腺細菌叢と関連するか：前立腺細菌叢のプロファイリング
		論文部門	臨床部門	竹澤健太郎	大阪大学医学部泌尿器科	Decreased renal function increases the nighttime urine volume rate by carryover of salt excretion to the nighttime
			基礎部門	大江 秀樹	市立敦賀病院泌尿器科	Urinary reabsorption in the rat kidney by anticholinergics
2023 年度	第 30 回日本排尿機能学会	発表部門	臨床部門	内山 智之	国際医療福祉大学	過活動膀胱に対する低反応レベルレーザー照射療法の単盲検ランダム化比較試験
				佐々木貴之	独立行政法人労働者健康安全機構総合せき損センター中央リハビリテーション部	脊髄損傷運動完全麻痺患者における尿路管理法と清潔間欠導尿の獲得に必要な上肢機能
		論文部門	基礎部門	岡部 彩美	九州大学医学研究院泌尿器科学分野	ヒト乳歯歯髄幹細胞を用いた間質性膀胱炎に対する根治的治療法への挑戦
			臨床部門	嶋谷 公宏	兵庫医科大学泌尿器科	Why upright standing men urinate more efficiently than in supine position: A morphological analysis with real-time magnetic resonance imaging
			基礎部門	木村 信吾	東北大学病院泌尿器科	Low-energy shock wave therapy ameliorates ischemic-induced overactive bladder in a rat model

河邊賞 受賞者一覧

年度	学術大会	氏名	所属	演題名
2001年度	第8回日本神経因性膀胱学会	大川 麻子	北里大学	TVT OPERATION: IS IT EFFECTIVE FOR TYPE III INCONTINENCE?
		柴田 隆	北海道大学	MORPHOLOGICAL ANALYSIS OF SPINAL CORD PATHOLOGY IN MICE WITH SPINA BIFIDA, WITH PARTICULAR REFERENCE TO THE SPINAL MICTURITION CENTER.
2002年度	第9回日本排尿機能学会	内山 智之	千葉大学	Evaluation of the peripheral motor pathways innervating detrusor muscle by magnetic stimulation of the sacral roots in patients with diabetes mellitus.
		野宮 正範	福島県立医科大学	A QUANTITATIVE ANALYSIS OF mRNA EXPRESSION OF $\alpha 1$ - AND β -ADRENOCEPTOR SUBTYPES AND THEIR FUNCTIONAL ROLES IN HUMAN NORMAL AND OBSTRUCTED BLADDERS.
2003年度	第10回日本排尿機能学会	松本 成史	近畿大学	Opioid receptors in the midbrain periaqueductal gray region regulate volume-evoked micturition.
		関 聡	信州大学	Detrusor overactivity induced by increased levels of nerve growth factor in bladder afferent pathways in rats.
2004年度	第11回日本排尿機能学会	石濱 寛子	秋田大学	Alpha-1 antagonists inhibit the primary afferent activity from the irritative bladder of the rat.
		中村 靖夫	秋田大学	Is alpha-1D adrenergic receptor responsible for storage symptoms in mice? Effects of acetic acid on bladder function in mice lacking alpha-1D adrenergic receptor.
2005年度	第12回日本排尿機能学会	羽賀 宣博	福島県立医科大学	The effect of oxybutynin and edrophonium on the afferent excitability induced by bladder irritation in rat.
		小川 輝之	信州大学	Effects of IP75L, ajulemic acid, on bladder overactivity induced by bladder irritation in the rat.
		咲間 隆裕	日本大学	Dedifferentiated fat (d fat) cells can differentiate into bladder smooth muscle cells in vitro and in vivo.
2006年度	第13回日本排尿機能学会	今村 哲也	信州大学	Mouse Bone Marrow-Derived Cells Can Reconstruct Muscle Layer-Like Structures in Injured Urinary Bladder Walls.
		中井 正治	福井大学	The role of prostaglandin E2 (PGE2) in cerebral infarction associated with detrusor overactivity. An experimental study on the occurrence of neuroplasticity.
		西島 さおり	琉球大学	Restoration of bladder function by bone marrow cell transplantation in rats with underactive bladder by bladder outlet obstruction.
		吉田 浩士	京都市立病院	Multiple-Chemical Sensitivity: Is This Condition Related to Painful Bladder Syndrome?
2007年度	第14回日本排尿機能学会	丸山 修治	静岡県立大学	In vivo analysis of brain muscarinic receptor occupancy after oral oxybutynin in conscious rhesus monkey by using positron emission tomography (PET).
2008年度	第15回日本排尿機能学会	嘉手川豪心	琉球大学	Effects of intrathecal infection of serotonin on bladder activity, urethral activity, and amino acid levels in the lumbosacral cord of rat.
		和田 直樹	旭川医科大学	Is pressure-flow study useful to predict the outcome of transurethral resection of prostate?
2009年度	第16回日本排尿機能学会	善積 克	秋田大学	Role of supraspinal and spinal A1-adrenergic receptor subtypes in the micturition reflex in conscious rats.
		小川総一郎	福島県立医科大学	The effect of Aging on Nitric Oxide and Noradrenalin Release in Isolated Rabbit Prostate.
		宮本 達也	山梨大学	The expression of transient receptor potential (TRP)V4, A1, and V1 in the human bladder mucosa of normal and bladder outlet obstruction – A novel mechanism in the obstruction- induced bladder overactivity.
		望月 勉	山梨大学	Functional role of the TRPV4 cation channel in stretch-evoked Ca ²⁺ influx and ATP release in mouse urothelial primary cultures.
		青木 芳隆	福井大学	Relationship between nocturia and metabolic syndrome.
2010年度	第17回日本排尿機能学会	土山 克樹	福井大学	Impaired bladder emptying in geriatric patients: clinical significance of the evaluation of physical mobility.
		山口 千晴	千葉大学	Normal micturition and detrusor overactivity related real time change of activation in prefrontal cortex: a functional near-infrared spectroscopy (FNIRS) study.
		相澤 直樹	東京大学	Effects of L-arginine, an NO donor, on the primary afferent activity with or without acrolein-treated rat bladder.
		藤原 敦子	京都府立医科大学	Comparison of the Efficacy of Tamsulosin and Naftopidil on the Quality of Life Specific to Each Symptom of the International Prostate Symptom Score: a Randomized Controlled Trial in Elderly Men with Overactive Bladder.
		住野 泰弘	大分大学	Myostatin Inhibits Growth of Satellite Cells in Human Urethral Rhabdosphincter via Phospholation of Smad-2.

※ 2013 年以降、受賞者は 3 名以内に規定された。

年度	学術大会	氏名	所属	演題名
2011 年度	第 18 回日本排尿機能学会	松川 宜久	名古屋大学	What is the cause of the poor improvement cases of International Prostate Symptom Score after silodosin administration in LUTS with BPH : Prospective investigation using a pressure-flow study.
		館野 冬樹	東邦大学医療センター佐倉病院	LOWER URINARY TRACT FUNCTION IN DEMENTIA WITH LEWY BODIES.
		長瀬 桂子	福井大学	Effects of α_1 -blocker on the release of ATP and prostaglandin E2 from the urethral epithelium in BOO rats.
		森 健一	大分大学	Neurogenic bladder associated with Xeroderma Pigmentosum A in Japan.
		橘田 岳也	北海道大学	The anterior cingulate gyrus plays an important role in the control of micturition reflex in a rat model of Parkinson's disease.
		小口 智彦	信州大学	Enhanced bladder pain in cyclophosphamide-induced cystitis in rats-Involvement of pelvic nerve and hypogastric nerve sensitization.
2012 年度	第 19 回日本排尿機能学会	松田 陽介	福井大学	Melatonin enlarges the bladder without affecting the bladder contraction pressure or the electroencephalogram findings: a comparison between young and senescent rats.
		査 新民	福井大学	Association between lower urinary tract symptoms and metabolic syndrome in OLETF rats.
		王 東	福井大学	The influences of 5 α -reductase inhibitor dutasteride on contraction and α 1-adrenoceptor expression in rat prostate.
		野宮 明	東京大学	Interstitial cystitis associated with Sjögren's syndrome.
		國分 周子	福島県立医科大学	Neuron Protection agent TAC-302 prevents bladder denervation and dysfunction following partial bladder outlet obstruction in rat.
		熊野信太郎	東京大学	EFFECTS OF RQ-00311610, A NOVEL T-TYPE CALCIUM CHANNEL INHIBITOR, ON BLADDER FUNCTION AND BLOOD PRESSURE IN RATS WITH BLADDER OUTLET OBSTRUCTION.
		井上 誠也	鳥取大学	The vasodilating drugs ameliorate detrusor overactivity via improving pelvic blood flow in the male spontaneously hypertensive rat.
		野口 渉	信州大学	INCREASED SKIN TRPM8 BY ESTROGEN DEFICIENCY MAY INDUCE DETRUSOR OVERACTIVITY MEDIATED α 1AD-ADRENERGIC RECEPTORS TRIGGERED.
2013 年度	第 20 回日本排尿機能学会	生駒 彩	佐賀大学	A negative association between uncomplicated cystitis in women and wiping method of the vulva after bowel movements.
		伊藤 悠城	東京大学コンチネンス医学	AGE-RELATED CHANGES IN DETRUSOR PROPERTIES AND GENE EXPRESSION IN THE BLADDER AND DORSAL ROOT GANGLION OF THE RAT AND PREVENTATIVE EFFECT OF LOW CALORIC DIET AGAINST THESE CHANGES.
		菅野由岐子	KKR 札幌医療センター	An inflammatory cytokine IL-1 β is involved in bladder remodelling after partial bladder outlet obstruction in mice.
2014 年度	第 21 回日本排尿機能学会	杉山 梨乃	東京大学コンチネンス医学	UPREGULATIONS OF TRANSIENT RECEPTOR POTENTIAL (TRP) A1 AND V1 CHANNELS IN THE BLADDER AND THEIR FUNCTIONAL IMPLICATION IN MALE RATS WITH SUB-ACUTE PARTIAL BLADDER OUTLET OBSTRUCTION (BOO).
		関 雅也	福井大学	Relationship between lifestyle diseases and the frequency of medical therapies for lower urinary tract symptoms: Analysis of 60,000 aging males and females.
		竹澤健太郎	大阪大学	A novel cystometry method combined with bladder ultrasonography reveals rapid decrease of bladder capacity and compliance in mice LPS-induced cystitis.
2015 年度	第 22 回日本排尿機能学会	市原 浩司	東京大学	Activation of toll like receptor 7 induces cystitis and facilitation of bladder pain and mechanosensation in mice.
		千葉 博基	北海道大学	The role of serotonergic mechanism in the rat prefrontal cortex for controlling the micturition reflex: an in vivo microdialysis study.
		溝口 晋輔	大分大学	Effects of Estrogen Receptor activation on Prostatic Inflammation and Bladder Overactivity in a Rat Model of Chronic Nonbacterial Prostatitis.
2016 年度	第 23 回日本排尿機能学会	秋山 佳之	東京大学	Inflammatory infiltrates specific to Hunner type interstitial cystitis.
		井原 達矢	山梨大学	Circadian regulations of Piezo1,TRPV4,Connexin26 and VNUT by clock genes in the mouse bladder urothelium.
		清水 翔吾	高知大学	EFFECT OF ALPFA1 ADRENOCEPTOR ANTAGONIST NAFTOPIDIL ON THE ARGININE-VASOPRESSIN SECRETION AND URINE VOLUME IN CENTRALLY NORADRENALINE-ADMINISTERED RATS.
2017 年度	第 24 回日本排尿機能学会	橋本 士	近畿大学	Effects of withdrawing dutasteride on serum testosterone and lower urinary tract symptoms.
		堀田 祐志	名古屋市立大学	Chronic DPP-4 inhibition improved bladder dysfunction and hemodynamics in rats with ligation of internal iliac arteries.
		加賀 勘家	獨協医科大学	Expression profile of urothelial transcription factors in bladder biopsies with interstitial cystitis.

年度	学術大会	氏名	所属	演題名
2018年度	第25回日本排尿機能学会	渡邊 大仁	東京大学	Comparison of clinical characteristics between interstitial cystitis and hypersensitive bladder.
		秦 淳也	福島県立医科大学	Complement activation mechanism activated by autoantigen recognition during growth of benign prostatic hyperplasia.
		片岡 智哉	名古屋市立大学	A low-carbohydrate diet prolongs voiding function and weakens detrusor muscle contraction in rats.
2019年度	第26回日本排尿機能学会	Sudha Silwal Gautam	信州大学	Implantation of biofabricated autologous adipose derived cell C-type structures regenerate cryo-injured urethra.
		松岡 香菜子	福島県立医科大学	Benign prostatic enlargement affects vesical adaptation response to diuresis in men with overactive bladder.
		木村 有佑	鳥取大学	The impact of nerve-sparing robot-assisted radical prostatectomy on quality of life and lower urinary tract function in a longitudinal study.
2020年度	第27回日本排尿機能学会	鄒 瑣	高知大学	Changes with age of hydrogen sulfide-induced relaxation of the bladder in spontaneously hypertensive rats.
		松本 侑樹	北信総合病院	Relationship between change of prostate volume and lower urinary tract symptoms after low-dose-rate brachytherapy for prostate cancer.
		前田 琴美	名古屋市立大学	Control of rat bladder neck relaxation using "NORD-1", a light-reactive nitric oxide releaser.
2021年度	第28回日本排尿機能学会	志村 寛史	山梨大学	Therapeutic potential of cell-type selective optogenetics for a mouse model with increased urinary frequency.
		関井 洋輔	大阪大学大学院	New insights into the molecular mechanisms of nocturnal polyuria using a novel animal model: Insufficient sodium excretion by hyperactivation of the renal RAS-SPAK-NCC pathway causes nocturnal polyuria.
		亀井 潤	自治医科大学	Preserving longer membranous urethra predicts significantly better postoperative urinary continence recovery in robot-assisted radical prostatectomy: semiquantitative analysis of video database review.
2022年度	第29回日本排尿機能学会	木村 信吾	東北大学	Low-energy shockwave therapy ameliorates ischemic-induced overactive bladder in a rat model with higher expression of soluble guanylate cyclase and vascular endothelial growth factor.
		寺岡 祥吾	鳥取大学	Histological and physiological evaluation of the effects of adipose-derived stem cell sheets on a rat model of detrusor underactivity.
		林 悠大朗	横須賀共済病院	Short-term efficacy and safety of bipolar transurethral electro vaporization and holmium laser enucleation of the prostate for moderate and large benign prostatic enlargement.
		千原尉智路	筑波大学附属病院	Control of bladder peripheral clock and diurnal micturition pattern by glucocorticoids.
2023年度	第30回日本排尿機能学会	川瀬 紘太	琉球大学	Low-Intensity Extracorporeal Shock Wave Therapy ameliorates detrusor sphincter dyssynergia in Spinal Cord Injured Rat Model.
		飯沼 光司	岐阜大学医学部附属病院	Multi-institutional study of nocturia in Japanese patients.
		川田 龍哉	名古屋市立大学	Effects of bone marrow-derived stem cell lysate on detrusor muscle contraction in neurogenic overflow urinary incontinence rat model.

日本排尿機能学会が関与した適正使用指針・声明

年月日	名 称	編 集
2017 年 1 月 5 日	植込み型排尿・排便制御用スティミュレーター(仙骨神経刺激装置)に関する適正使用基準	日本泌尿器科学会・日本大腸肛門病学会 仙骨神経刺激装置適正使用基準作成委員会
2020 年 7 月 29 日	神経管閉鎖障害の発生リスク低減を目的とした、葉酸サプリメントの摂取を推奨する声明文	日本排尿機能学会
2021 年 3 月 14 日	過活動膀胱・神経因性膀胱に対するボツリヌス療法適正使用指針	日本排尿機能学会・日本泌尿器科学会 過活動膀胱・神経因性膀胱に対するボツリヌス療法適正使用指針作成委員会
2022 年 2 月 7 日	前立腺肥大症(benign prostatic hyperplasia)に対する経尿道的前立腺吊り上げ術に使用されるUroLift システムの適正使用指針	日本泌尿器科学会、日本排尿機能学会、日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会
2022 年 4 月 1 日	経尿道的水蒸気治療に関する適正使用指針	日本泌尿器科学会、日本排尿機能学会、日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会 Rezum システム適正使用指針作成委員会
2023 年 3 月 24 日	前立腺肥大症(Benign prostatic hyperplasia)に対する経尿道的前立腺切除術に使用されるAQUABEAM ロボットシステムの適正使用指針	日本泌尿器科学会、日本排尿機能学会、日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会

日本排尿機能学会が提出した医療技術評価提案書

年 度	新規／改定	名 称	保険委員会 委員長
平成 28 年度診療報酬改定	新規	排尿自立指導料(承認) 親水性コーティングカテーテル(承認) ナイト(間歇的)バルーン(承認) 在宅自己導尿特殊カテーテル(承認)	高橋 悟
平成 30 年度診療報酬改定	新規	在宅排尿管理指導料	高橋 悟
令和元年度診療報酬改定	新規	膀胱鏡下ボツリヌス毒素注入手術 内圧尿流測定(プレッシャーフロースタディ) 在宅排尿管理指導料	高橋 悟
令和 2 年度診療報酬改定	新規	膀胱鏡下ボツリヌス毒素注入手術(承認) 内圧尿流測定(プレッシャーフロースタディ) 在宅排尿管理指導料	高橋 悟
令和 4 年度診療報酬改定	新規	ハンナ型間質性膀胱炎手術(経尿道)(承認) 脂肪組織由来再生(幹)細胞採取・経尿道的移植術 内圧尿流測定(プレッシャーフロースタディ)	藤村 哲也
	改定	在宅排尿管理指導料	
令和 6 年度診療報酬改定	新規	尿失禁手術・再生幹細胞移植(経尿道) 内圧尿流検査(プレッシャーフロースタディ) 膀胱蓄尿監視(3 日間) ハンナ型間質性膀胱炎の食事療法	藤村 哲也
	改定	排尿自立支援指導料の改定	



日本排尿機能学会 副理事長
関戸 哲利

1. 旧ロゴマーク



今回、名誉会員の先生方を中心に旧ロゴマーク成立の経緯とロゴマークの意味するところをお伺いした結果、名誉会員の西澤理先生より、役員あるいは会員の投票によって最多票数を獲得した久留米大学医学部泌尿器科学講座 初代教授の重松俊先生の案が採用された可能性があるとの情報をいただきました。これに関して、現教授の井川掌先生にご照会申し上げたところ、医局内、さらには同門会も含めてお調べいただきましたが、残念ながら詳細は不明でした。このため、50周年誌にこれ以上の記載ができないことをお詫び申し上げますとともに、もし、ご存知の先生方がおられましたら今後の周年事業の際にこの部分の記載内容を修正したいと思いますので、情報をお寄せいただければ幸いです。

2. 新ロゴマーク



一般社団法人

日本排尿機能学会

The Japanese Continence Society

JCS

ロゴ製作者のご説明によりますと、本シンボルマークは、「膀胱、前立腺、骨盤底筋を抽象化し、シャープなイメージでデザイン」され、「膀胱は内側を空白状態にしてスッキリとしたデザインにすることで、排尿された状

態を表し」、「周囲には円の形に名称を表記した文字を配置することで、アカデミックな印象も取り入れ」、「鮮やかな色使いによる、鮮烈でインパクトのあるイメージ」となっています。一方、ロゴタイプは、「洗練された落ち着いた印象の書体」で、「クラシカルなイメージ、アカデミックさはありながらも重すぎないデザイン」となっています。なお、「尿」の文字には「ワンポイントで膀胱のイメージを表現」したデザインが施されています。

新ロゴマーク制定の経緯は以下の通りです。2014 年 9 月の理事会において、学会の法人化と英語名の The Japanese Continence Society への改称に伴いロゴマークを改めることが決まり、理事長の横山先生から広報委員会委員長であった小職の方に新たなロゴマーク制定の御下命がありました。会員から公募するなどの案も出ましたが、最終的にロゴ制作企業（ビズアップ [biz-up !] 社）に依頼することとなりました。ロゴマークのイメージに関しては、広報委員会（武井先生、巴先生、三井先生、古田先生）、さらに理事会でもかなり熱いメール審議となり、最終的に、「膀胱、骨盤底筋、前立腺をシンボルマークに入れ、シャープでアカデミックでシンプルな寒色系」でお願いすることになりました。その後、ビズアップ社から提案された 21 案に対して、広報委員会、横山理事長、後藤事務局長とで一次審査を行い 10 案を採択、次いで理事の先生方による二次審査で 3 案まで絞り、理事の先生方のコメントに従って、この内の 2 案のバリエーションを加えた合計 5 案を代議員による三次審査に回しました。79%の代議員から回答を得ましたが、3 案中 2 案が 28 対 25 票で拮抗したため、この 2 案について代議員による四次審査を行い（回答率 87%）、58 対 46 票の結果を受け、2015 年 9 月の理事会と代議員総会で新ロゴマークが承認されました。なお、新ロゴマークの著作権は学会に譲渡されております。さらに、丁度この時期に東京五輪のエンブレムの盗作疑惑が世間を賑わせたこともあり、本シンボルマークは日本において商標登録をすることとなり、2015 年 9 月 29 日に特許庁に出願、2016 年 2 月 26 日に商標原簿に無事登録されました（権利更新申請期間は 2025 年 8 月 27 日から 2026 年 2 月 26 日までですのでお忘れなく）。

以上の手続きを経て制定された新ロゴマークですので、本学会の「顔」として、学会ホームページのロゴマークに関する規程・ガイドラインに沿って末長く大切に使用いただければと思います。

山口 脩先生の逝去を悼んで



信州大学 名誉教授
藤森病院 顧問
北アルプス医療センター あづみ病院 名誉院長
西澤 理

2023年4月24日に山口先生の逝去の知らせを受けて語り合うことができなくなったことへの痛切な寂しさを感じました。2023年4月28日に福島医科大学泌尿器科教室による「山口 脩 先生を送る会」に参列した際の、奥様からの「主人の生き甲斐は研究でした」との言葉に秋田大学医学部泌尿器科で山口先生からいただいた適確な研究指導が思い出されました。山口先生との付き合いは東北大学理学部物理学科を卒業後医学部医学科に編入した1969年4月に同級生となった時に始まり以降54年間に及びました。1975年4月から福島医科大学泌尿器科講師として転出する1983年12月までは秋田大学医学部泌尿器科において、手術、実験、学会、関連病院出張、医局旅行、入局勧誘会、歓送迎会などの際に喜怒哀楽をさまざまに共有してきました。1996年4月に福島医科大学泌尿器科教授に就任、3ヵ月後の1996年6月に松本で開催された講演会后に、小川秋實先生宅での夜遅くまでの語り合いは楽しい一時でした。

大学や医局の垣根を越える自由な研究発表の場として環太平洋禁制学会（Pan-Pacific Continence Society：PPCS）を創設し日本排尿機能学会（JCS）、韓国禁制学会、台湾禁制学会の3学会をメンバーとして、卓越したリーダーシップを発揮し2006年9月に東京での第1回学術大会の開催にこぎつけました。さらに2009年には3学会の英文機関誌としてLower Urinary Tract Symptoms（LUTS）を創刊し13年間編集主幹として発展に寄与していただきました。PPCSの年次学会で台北や釜山などで飲み語り合えたことや、PPCSやLUTSにかかわる用件などで携帯電話への着信履歴に気付くと、即返信し話し合ったことなどを折りにふれ思い出します。山口先生はJCS、PPCS、LUTSが未来に向けて継続的に発展することを希求しているものと思います。山口先生の科学研究への真摯な思いに心よりの敬意を表しつつ、ご冥福をお祈り申し上げます。



編集後記

この度、日本排尿機能学会 50 周年記念誌を刊行させていただきました。本記念誌は、日本排尿機能学会の 50 周年記念の一事業として、これまでの日本排尿機能学会の活動を振り返るとともに、本学会の今後のさらなる発展を図るために企画・作成されたものです。タイトなスケジュールにもかかわらず、海外や関連学会の先生方を始め、多くの先生方から貴重な原稿をいただき、心より感謝申し上げます。

本記念誌の内容を俯瞰いたしますと、1973 年発足の神経因性膀胱研究会から始まり日本神経因性膀胱学会を経て日本排尿機能学会に至るまでの歴史と事業内容が手に取るように理解できます。一部の医師や基礎研究者による研究会から始まり、下部尿路機能のみならず排便機能や性機能などにも領域を拡充し、さらには泌尿器癌や婦人科癌などのオンコロジー領域も包括しはじめています。医師、基礎研究者、看護師、理学療法士、作業療法士、検査技師などの多職種により運営される本領域の中核的な学会として機能していることは周知の事実です。学会員も約 2,000 名を数え、今後も益々の水平・垂直展開が期待されるところです。50 年の節目として、そして、今後の本学会の発展のための礎として本記念誌がお役に立てば望外の喜びです。

なお、本記念誌の企画・作成・完成に当たっては、副理事長の関戸哲利先生と日本コンベンションサービスの小倉幸子さん、酒井智亜紀さん、植田美穂さんに多大なるご尽力をいただきました。PDF 版の製作をご担当いただいた、医学図書出版株式会社の八藤丸祐己さん、中村昌哉さんにも深謝申し上げます。また、本記念誌作成や下部尿路症状疫学調査などの 50 周年記念事業の遂行にあたり、多大なるご支援をいただきました企業の皆様方に心より御礼申し上げます。

最後になりますが、本誌の編集や校正に当たりましては誤りなきよう十分に留意したつもりではありますが、なお万全でない点に関しましては、何卒ご寛容を賜りますようお願い申し上げます。

日本排尿機能学会 事務局長
舩森 直哉



選択的 β_3 アドレナリン受容体作動性過活動膀胱治療剤 薬価基準収載
(ミラベグロン錠)

ベタニス[®]錠 25mg 50mg

劇薬、処方箋医薬品
(注意—医師等の処方箋により使用すること)

Betanis[®]

■「効能又は効果」、「用法及び用量」、「警告・禁忌を含む注意事項等情報」等については、電子化された添付文書をご参照ください。

製造販売 **アステラス製薬株式会社**

東京都中央区日本橋本町2-5-1

〔文献請求先及び問い合わせ先〕 メディカルインフォメーションセンター ☎ 0120-189-371

クランベリーURシリーズ

Cranberry UR Series デリケートな女性の健やかな毎日をサポート。

- クランベリー果汁を高濃度に含む飲料、ゼリーです。
- キナ酸とポリフェノールが健康維持に役立ちます。
- クランベリー特有の酸味と渋味に、果糖やスクラロースを加えて毎日利用しやすい風味に工夫しています。
- 果汁由来の鮮やかなルビー色はおいしさを引き立てます。

クランベリーの酸味や渋味が
苦手な方に

＼ サプリメントタイプ ／



クランベリーUR100



クランベリーUR65



クランベリーURゼリー



クランベリーURタブレット

WEBでの商品勉強会や商品サンプル希望の方は、
下記内容を記載の上、FAXにてお申込みください。

FAX 03-3660-9222

WEB勉強会

☐ 希望する

商品サンプル

☐ 希望する

郵便番号			
勤務先住所			
勤務先名		職種	
フリガナ		電話番号	
お名前		FAX	
メールアドレス			

資料請求、商品説明会、その他お問合せは、キッコーマンニュートリケア・ジャパン株式会社

TEL 03-5521-5138 【受付時間】 10:00~17:00 月曜日~金曜日(祝日除く)

担当:和泉、天野

P003

サイエンスを もっと身近に

すこやかな日本の未来を信じて。
私たちは人々に寄りそいながら、
革新的な医薬品を生みだします。

70

ファイザーは日本で70周年



ファイザー日本法人
公式ウェブサイトはこちら



●

We chase the *miracles* of science to improve people's lives



私たちは人々の暮らしをより良くするため、科学のもたらす奇跡を追求します。

●

サノフィ株式会社

〒163-1488 東京都新宿区西新宿三丁目20番2号 東京オペラシティタワー www.sanofi.co.jp

sanofi



鉄欠乏性貧血治療剤

処方箋医薬品[※] 薬価基準収載

フェインジェクト[®] 静注500mg

Ferinject[®] solution for injection/infusion 500mg カルボキシマルトース第二鉄注射液

注) 注意—医師等の処方箋により使用すること

「効能又は効果」、「用法及び用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等については、
製品添付文書をご参照ください。



製造販売元

ゼリア新薬工業株式会社

東京都中央区日本橋小舟町10-11 〒103-8351

〔文献請求先及び問い合わせ先〕 お客様相談室
TEL.(03)3661-0277 / FAX.(03)3663-2352

製品情報サイト

[https://medical.zeria.co.jp/
di/ferinject/#tabRelation](https://medical.zeria.co.jp/di/ferinject/#tabRelation)



PC、スマホ、タブレットで
ご覧になれます。



2021年8月作成



EBRANTIL®
●薬価基準収載



排尿障害改善剤・降圧剤

(処方箋医薬品) 注意—医師等の処方箋により使用すること

エブランチル®
カプセル15mg/30mg
(ウラピジルカプセル)

- 効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については電子添文をご参照ください。



製造販売元〔文献請求先及び問い合わせ先〕
科研製薬株式会社
東京都文京区本駒込二丁目28番8号
医薬品情報サービス室

(2022年5月作成) EBR05CK

尿流量計



Flowstar NS-2
全自動尿流量計 フロースター NS-2
届出番号:13B1X00113000048

検査測定項目

Voiding time	排尿時間(sec)
Flow time	尿流時間(sec)
Time to peakflow	最大尿流量率到達時間(sec)
Peak flowrate	最大尿流量 (mL/sec)
Average flowrate	平均尿流量 (mL/sec)
Intervals	尿流間隔
Voided volume	排尿量 (mL)

*日本語によるレポート機能もございます。

ウロダイナミクス検査装置

AQUARIUS CTS®

ラボリー ウロダイナミックシステム Aquarius
製造販売認証番号 227ADBZX00187000



T-DOC®

エアチャージカテーテル
エアチャージトランスデューサ

認証番号:228AHBZX00032000
228AHBZX00033000

検査測定プログラム例

- ウロフロメトリー (尿流量測定)
- シストメトリー (膀胱内圧測定)
- プレッシャーフロースタディー
- UPP (尿道内圧測定)
- EMG (括約筋電図測定)

VCUG(排尿時膀胱造影)、
VUR(膀胱尿管逆流)診断検査時の内圧測定



edap tms
Bringing New Horizons to Therapy

製造販売元:エダップテクノメド株式会社

東京本社 〒104-0033 東京都中央区新川1-3-17 Tel 03-5540-6767 Fax 03-5540-6785
大阪営業所 〒532-0011 大阪市淀川区西中島5-3-10 Tel 06-6304-0960 Fax 06-6304-0876
福岡営業所 〒816-0912 福岡県大野城市御笠川5-3-4 Tel 092-600-7155 Fax 092-600-7166

www.edaptechnomed.co.jp



一般社団法人日本排尿機能学会
50周年記念事業
協力企業一覧

日本排尿機能学会 50周年記念事業にご協力をいただいた以下の方々に深く御礼申し上げます。

アステラス製薬株式会社
エダップテクノメド株式会社
科研製薬株式会社
キッコーマンニュートリケア・ジャパン株式会社
キッセイ薬品工業株式会社
小林製薬株式会社
サノフィ株式会社
すみれ医療株式会社
ゼリア新薬工業株式会社
大鵬薬品工業株式会社
日本新薬株式会社
日本メドトロニック株式会社
ファイザー株式会社
扶桑薬品工業株式会社

(五十音順)

